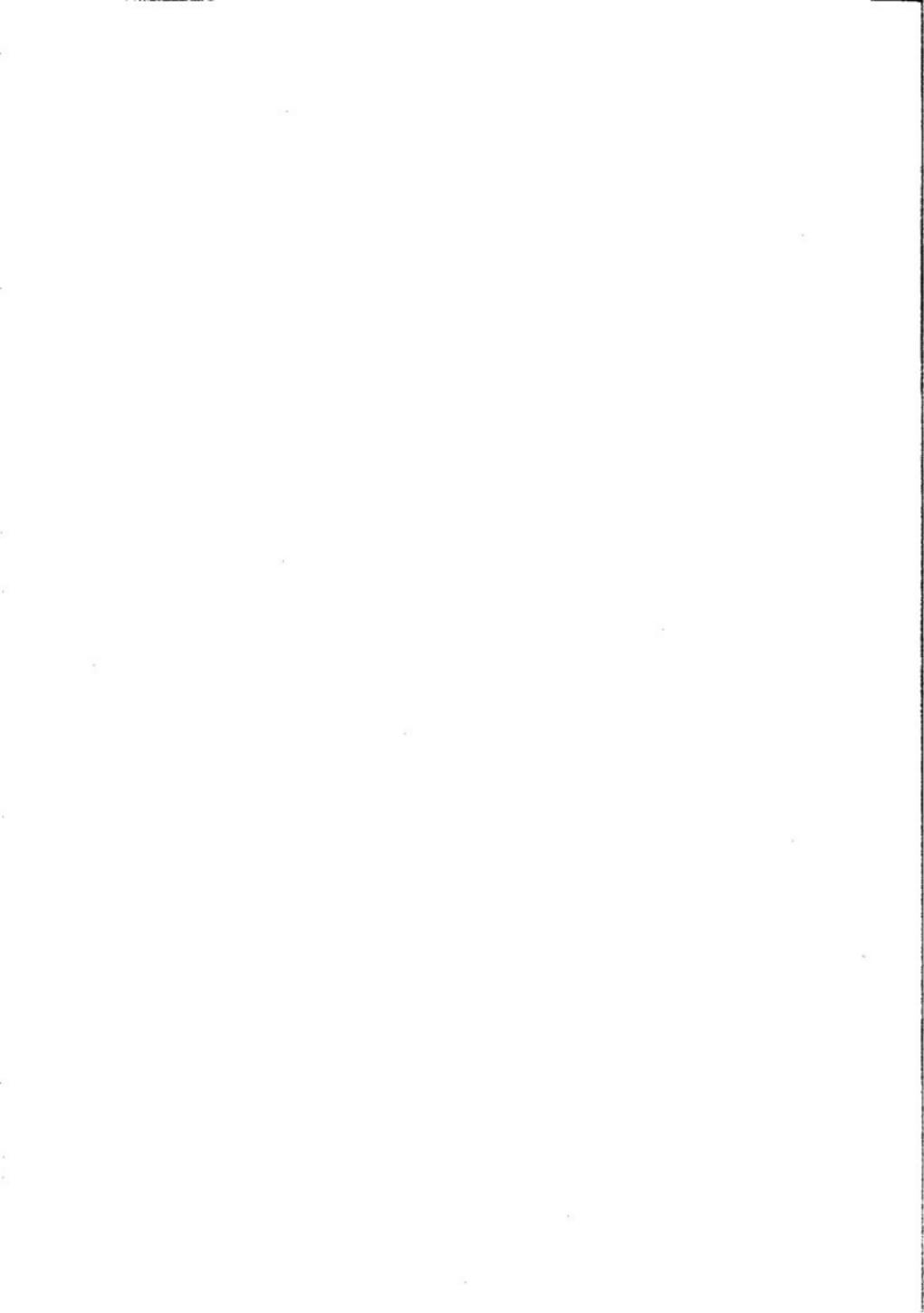


財團法人八尾市文化財調査研究会報告67

- I 跡部遺跡（第31次調査）
- II 植松南遺跡（第2次調査）
- III 太田遺跡（第4次調査）
- IV 大竹西遺跡（第4次調査）
- V 亀井遺跡（第9次調査）
- VI 亀井遺跡（第10次調査）
- VII 萱振遺跡（第22次調査）
- VIII 心合寺山古墳（第4次調査）
- IX 太子堂遺跡（第10次調査）
- X 東郷遺跡（第55次調査）
- XI 宮町遺跡（第2次調査）
- XII 山賀遺跡（第10次調査）
- XIII 弓削遺跡（第2次調査）

2001年



正誤表

財団法人八尾市文化財調査研究会編行67

		誤	正
6頁	4行目	裏の取っ手	裏の把手
8頁	13行目	ほほ元形	壺H _{n2}
26頁	8行目	墨張り	墨張り
27頁	24行目	第113層を除去した第114層	第110層を除去した第111層
27頁	32行目	東西約1.0m、南北0.8m以上	東西約1.1m、南北1.1m以上
27頁	37行目	東西約1.5m、南北0.8m以上	東西約2.3m、南北0.4m以上
36頁	25行目	第1調査区検出	第1次調査地検出
36頁	32~33行目	第2次調査区では	第2次調査地では
51頁	10行目	近畿自動車道予定地	近畿自動車道建設予定地
52頁	第2図	(S = 水平1/100・垂直1/50)	(S = 1/50)
55頁	第3図	(S = 水平1/100・垂直1/50)・平面図 (S = 1/200)	(S = 1/50)・平面図 (S = 1/100)
56頁	15行目	北へ降る	北へふる
57頁	第4図スケール	20m	20cm
58頁	註	『河内平野遺跡群の動態』	『河内平野遺跡群の動態』
64頁	20行目	第1区	第2区
69頁	第2図最上部のキワジン	裏壁	裏壁
86頁	3行目	S.D.401	S.K.401
89頁	2行目	1012層	1010層
136頁	7行目	東西約200m	南北約200m
報告書抄録	太子堂遺跡 調査期間	~19990118	~20000118

財團法人八尾市文化財調査研究会報告67

- I 跡部遺跡（第31次調査）
- II 植松南遺跡（第2次調査）
- III 太田遺跡（第4次調査）
- IV 大竹西遺跡（第4次調査）
- V 亀井遺跡（第9次調査）
- VI 亀井遺跡（第10次調査）
- VII 萱振遺跡（第22次調査）
- VIII 心合寺山古墳（第4次調査）
- IX 太子堂遺跡（第10次調査）
- X 東郷遺跡（第55次調査）
- XI 宮町遺跡（第2次調査）
- XII 山賀遺跡（第10次調査）
- XIII 弓削遺跡（第2次調査）

2001年

はしがき

大阪府の東部の一画を占める八尾市は、東に緑豊かな自然を残す生駒山地西麓部を従え、その西側には、旧大和川水系が形成した河内平野が広がっている。このような地形的環境を有する八尾市の歴史は古く、市域の南端に所在の八尾南遺跡では、旧石器時代に遡る遺物が出土している。一方、市域の大部分を占める平野部では、今から2300年前の弥生時代前期から、水田経営を基盤とした集団の遺構・遺物が散見され始める。以後各時代を生きた先人たちとは、度重なる洪水の危険に怯えながらも、それに起ち向かい、この豊かな土地を手放すことにはなかった。近世に至るまで、連綿と遺構・遺物が残されているのはそのためである。

近年では、旧国鉄竜華操車場跡地において大規模な都市開発が進行しているほか、市民の保健・衛生の向上を図る為、公共下水道の普及にも力を注ぎ、自然と都市型空間との共存を図りながら今尚、発展を止めることはない。

この度、平成11年度に実施した公共下水道工事等に伴う13件の発掘調査の整理が完了したため、これらをまとめ報告書として刊行する。この内、市域の北東部に位置する大竹西遺跡の調査では、縄文時代後期の地層が見つかり、ハマグリなどが多数棲息する海水域であったことが判明した。現在本市は、海岸部にまったく接していないが、この時期、潮風漂う地域が存在し、生駒山地西麓部で生活していた人々が海の幸の恵みを満喫していたかもしれないことを、現在の市街地からはまったく想像できない。このように地中には、私たち現代人が思いもよらぬ自然環境・歴史環境が埋もれているのである。今も市域のどこかで、市民生活の向上のための開発が進行している。それと同時に、先人が残してくれたかけがえのない文化財が破壊されていることもこれまた事実である。文化財は一度破壊されると、二度と元には戻らない。今後とも埋蔵文化財の保護、および否応なく破壊されていく埋蔵文化財に対して、発掘調査を行い、歴史を記録・保存し、21世紀に伝承していくという、私たち(財)八尾市文化財調査研究会の活動により一層のご理解・ご協力を賜りますよう心よりお願い申し上げたい。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対してご協力いただきました関係諸機関の皆様に感謝するとともに、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 木山丈司

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成11年度に実施した発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成13年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・IX・Ⅹが森本めぐみ、II・V・VI・VIIが成海佳子、III・VI・VIIIが高萩千秋、IV・X・XIが樋口 薫で、全体の構成・編集は樋口が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1（平成8年7月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成8年10月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T. P.）である。
1. 本書で用いた方位は磁北および座標北（国土座標第VI系）を示している。
1. 遺構は下記の略号で示した。
井戸—S E 土坑—S K 溝—S D 小穴・柱穴—S P 落ち込み—S O
土器集積・土器溜—S W 自然河川—N R
1. 遺物実測図は、断面の表示によって下記のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪—白、須恵器・陶磁器—黒、木製品・石製品・鉄製品—斜線
1. 土色については『新版 標準土色帖』1996 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

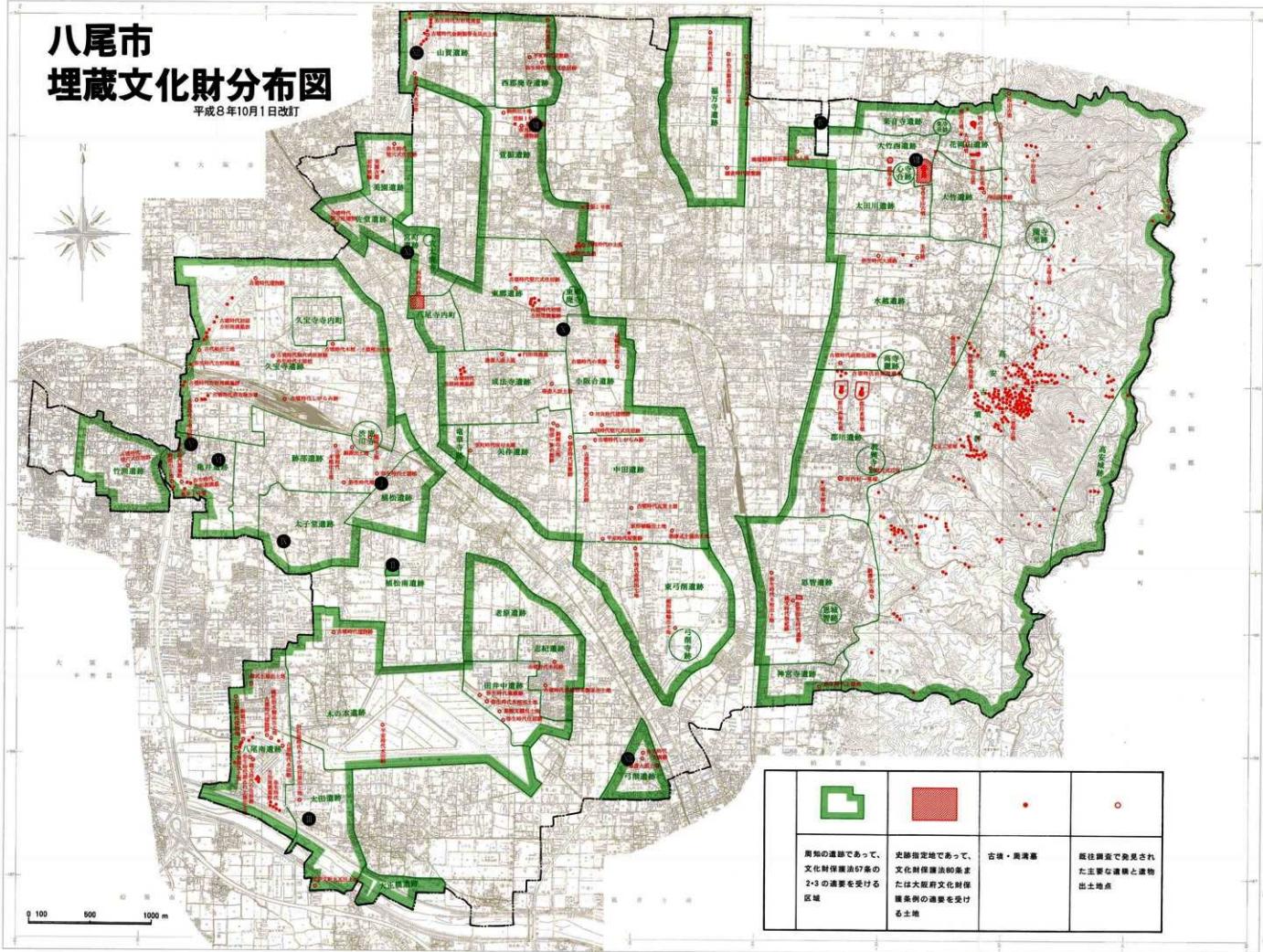
八尾市埋蔵文化財分布図

I 跡部遺跡 第31次調査 (A T99-31)	1
II 植松南遺跡 第2次調査 (UMS99-2)	19
III 太田遺跡 第4次調査 (OOT99-4)	25
IV 大竹西遺跡 第4次調査 (OTN99-4)	33
V 亀井遺跡 第9次調査 (KM99-9)	51
VI 亀井遺跡 第10次調査 (KM99-10)	61
VII 萱振遺跡 第22次調査 (KF99-22)	67

VIII	心合寺山古墳 第4次調査 (S O99-4)	71
IX	太子堂遺跡 第10次調査 (T S99-10)	77
X	東郷遺跡 第55次調査 (T G99-55)	101
XI	宮町遺跡 第2次調査 (MM99-2)	117
XII	山賀遺跡 第10次調査 (YMG99-10)	123
XIII	弓削遺跡 第2次調査 (YGE99-2)	129
報告書抄録		

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成8年10月1日改訂



I 跡部遺跡第31次調査 (A T 99-31)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市春日町2丁目・東太子1丁目地内で実施した公共下水道工事（10-213工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する跡部遺跡第31次調査（AT99-31）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第265号 平成11年8月12日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年11月29日～平成12年3月3日（実働17日間）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は約117m²を測る。現地調査には以下の補助員が参加した。
市森千恵子・加茂靖通・岸田靖子・中西明美・西岡千恵子・山口拓也（五十音順）
1. 内業整理には上記の他、澤村妙子・田島和恵・都築順子の参加を得た。
1. 本書の執筆および写真撮影は森本が行った。

本 文 目 次

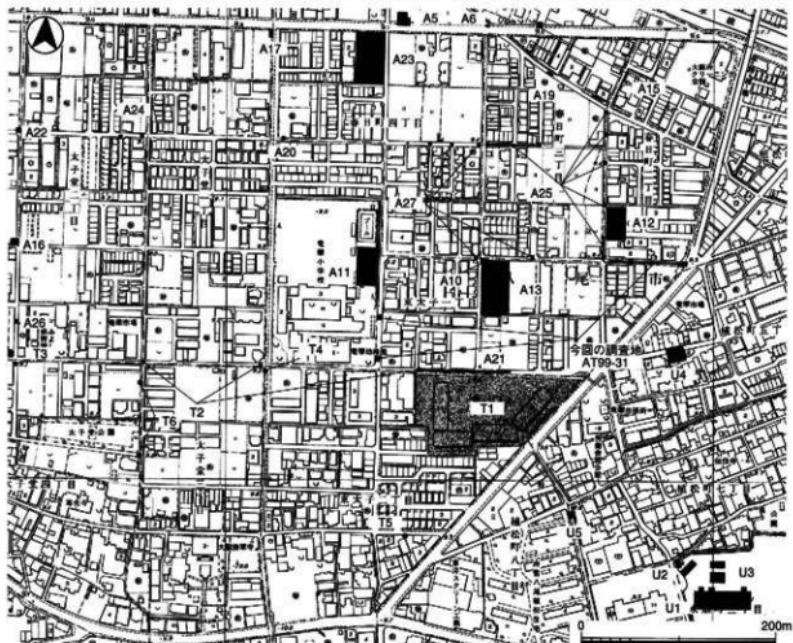
1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	3
1) 調査の方法と経過.....	3
2) 各調査区の概要.....	4
3.まとめ.....	12

I 跡部遺跡第31次調査 (A T99-31)

1. はじめに

跡部遺跡が所在する八尾市は大阪府の東部に位置し、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川に区画される河内平野の南東部にあたる。当遺跡は、その八尾市の西部に位置しており、現在の行政区画では跡部北の町1～3丁目、跡部本町1～4丁目、春日町1～4丁目、太子堂1・2丁目、東太子1丁目、跡部南の町1・2丁目、安中町3丁目の東西約1.4km、南北0.5～1.0kmがその範囲と推定されている。地理的には、東側を古長瀬川が北流し、南側を古平野川が北に向かって流れるなど数多くの大・中小河川の沖積作用によって形成された自然堤防上および氾濫原上に立地している。今回の調査地は跡部遺跡の南部の中央に位置し、調査区南側には太子堂遺跡、東部には植松遺跡が隣接している。

ところで、当調査研究会は今までに跡部遺跡で30件、太子堂遺跡で10件の調査を行っており、当調査地周辺だけでも、A11・A12・A13・A15・A20・A21・A27・T1・T2・T4の調査が行われている。これらのなかで最も古い時期を表すのは、A27で検出された土坑である。この土坑からは焼土と共に弥生時代前期新段階の土器が多く出土しており、火災後の廃棄坑の可能性



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

が挙げられている。また、弥生時代前期～中期の遺物包含層も厚く堆積しており、集落の中心的な位置を占めるものと思われる。当調査地（3区）の北に位置するA12でも同時期の遺構・遺物が確認されており、弥生時代前期の居住域が東側にも広がっていたことが想定できる。続く中期の遺構はA10・A11・A13で確認されている。A10・A11では溝を中心とした遺構しか検出されていないため、性格は明瞭ではない。しかし、A13では、環濠になる可能性の高い3重の溝が確認されており、A12・A27で検出された前期の集落との関係について考えさせる興味深い資料を提供している。その後、弥生時代後期～古墳時代前期になると各調査地でも広く、遺構・遺物が検出されるようになる。特に、T2ではT.P.+6.8～6.3mで古墳時代前期の土器集積などが検出されており、周間に当該期の居住域の存在が示唆されている。また、T1では奈良時代の居住域が検出されており、当地周辺は古墳時代以降比較的安定した地域となつたようである。

表1 既往調査一覧表

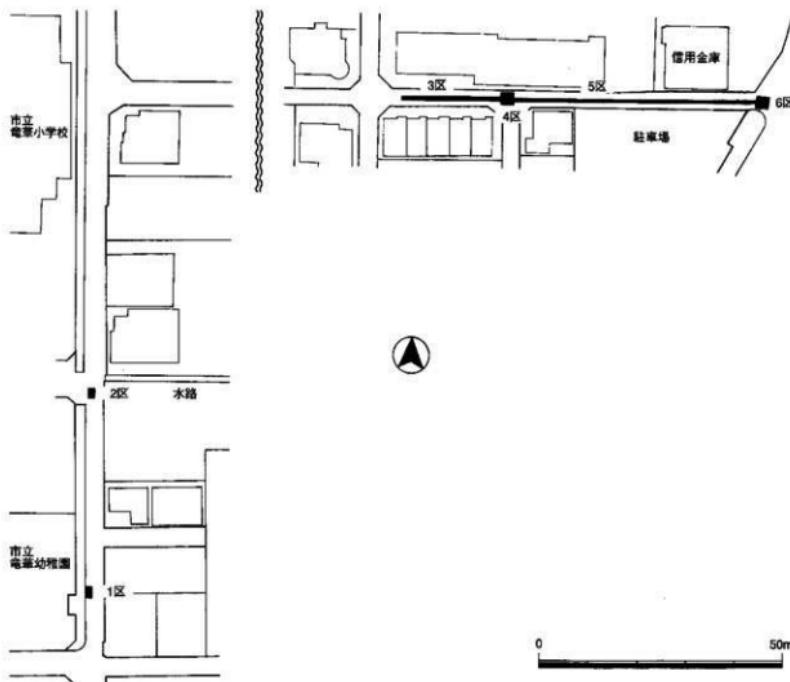
番号	遺跡名	所在地	主な成果	関連文献
A5 AT89-5	春日町1丁目 45-1	弥生時代後期：網陣埋葬坑（流水狀網陣・網鐵等出土） 平安時代後期～古墳時代初期の遺構	「勝部遺跡発掘調査報告書-一大坂府八尾市春日町1丁目出土網鐵」、1991	
A6 AT91-6	春日町1丁目	古墳時代前葉の遺構面 弥生時代後期・古墳時代前期 ・奈良時代の包含層	「八尾市文化財調査研究会報告34」、1992	
A10 AT92-10	春日町3丁目 内地内	弥生時代中期の構 弥生時代後期の溝（網陣出土）	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」、1997	
A11 AT93-11	東太子1丁目 106	弥生時代前葉以前：桝溝 古墳時代前葉：流溝	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」、1997	
A12 AT93-12	春日町2丁目 35-1-2	弥生時代前葉～古墳時代後期にかけての遺構面を5面 難波した	「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」、1994	
A13 AT93-13	東太子1丁目 16番	弥生時代中期後半の溝（環濠になる可能性有り） 石包 や石碑・骨などが出土	「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」、1994	
A15 AT93-15	春日町1丁目 2-4番地先	縄文時代の自然河川 古墳時代前期の七坑	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」、1997	
A17 AT94-17	太子堂1丁目 内地内	弥生時代前葉の土坑・小穴	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」、1997	
A19 AT95-19	春日町3丁目 内地内	弥生時代後期～古墳時代前葉の桝溝 古墳時代中期～奈良時代の遺構包含層 平安時代の構	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告53」、1996	
A20 AT95-20	春日町4丁目 内地内	弥生時代前葉～中期の遺物包含層 弥生時代中期後半 ・古墳時代前葉の土坑・構	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告53」、1996	
A21 AT95-21	東太子1・2 丁目	奈良時代の井戸	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告53」、1996	
A23 AT96-23	春日町4丁目 4番	弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面（井戸・土坑等） 網陣出土	「平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」、1997	
A24 AT96-24	太子堂1・2 丁目内地内	古墳時代前葉以前の自然河川	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告60」、1998	
A25 AT97-25	春日町2-3 丁目内地内	古墳時代前葉～古墳時代後期～奈良時代・平安時代・ 中世以降の遺構・遺物を複数	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告62」、1999	
A27 AT97-27	春日町3-4 丁目内地内	弥生時代前葉の土坑（火災後の焼却坑） 古墳時代以 跡の溝	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告62」、1999	
T1 TS83-1	太子堂 1地	古墳時代中期～後期の遺物包含層 奈良時代の制作域 縄文時代中期～末期の生産域	「太子堂遺跡（第1次調査・第2次調査報告書）」、1993	
T2 TS90-2	太子堂 2地	古墳時代初頭の井戸・土坑・土器集積 古墳時代前期 の遺物包含層	「太子堂遺跡（第1次調査・第2次調査報告書）」、1993	
T4 TS92-4	太子堂 2丁目 内地内	古墳時代前葉の小穴・落ち込み	「八尾市文化財調査研究会報告30」、1993	
T5 TS93-5	東太子2丁目 内地内	奈良時代の遺物包含層	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告42」、1994	
T6 TS94-6	太子堂3-4 丁目内地内	弥生時代中期以前・古墳時代前葉・平安時代後期以降 の遺構の発掘を複数	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」、1997	
U1 UM92-1	永畠町3丁目 内地内	弥生時代前葉～中期の遺物包含層・古墳時代前期の遺 物包含層	「八尾市文化財調査研究会報告39」、1993	
U2 UM93-2	永畠町3丁目 1番1号地	古墳時代～平安時代の埋没河川	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告42」、1994	
U3 UM93-3	永畠町3丁目 1号地	弥生時代前葉～中期・古墳時代前期・中葉～後期の遺 物包含層 奈良時代の生産域と祭祀の可能性のある上 坑・平安時代末・鎌倉時代の生産域	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告50」、1998	
U4 UM95-4	植松町3・5 丁目内地内	弥生時代中期の遺構面（土坑・溝） 奈良時代の溝	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告63」、1999	
U5 UM95-5	植松町7丁目	中世末以前に埋没した河川	「財団法人八尾市文化財調査研究会報告60」、1998	

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は当調査研究会が跡部遺跡内で行った第31次調査にあたる。調査は公共下水道工事(10-213工区)に伴うもので、調査対象となったのは、人孔4カ所、開削部分2ヶ所の計6ヶ所、調査総面積は約117m²である。調査区名は、調査を行った順に1区～6区と呼称した。その内訳は、1・2・4・6区が人孔、3・5区が開削部分である。3・5区の開削部分は1日に約6～8mずつ調査を行ったため、1日ごとに枝番号を付け、3-1区～3-3区、5-1区～5-7区と呼称した。しかし、3区の西側約4mは、既設のマンホールに管をつなぐことを優先させてほしいと、下水道部から連絡があったため、文化財課の許可を受け、この4m部分のみ立会い調査とした。

調査は八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に従い、現地表下約1.0mを表土掘削範囲、それ以下(0.5～1.5m)を包含層掘削範囲として調査し、その後、工事の機械掘削深度まで地層観察などの下層調査を行った。各調査区とも機械掘削と人力掘削を併用し、遺構・遺物の検出に努めた。調査は平成11年11月29日～平成12年3月3日にかけて行った。実働日数は17日間である。



第2図 調査区位置図(S=1/1000)

2) 各調査区の概要

今回の調査は、人孔や開削部分など小規模な調査区が多かったため、各調査区ごとに概要を述べる。各調査区とも現地表下約1.5~1.7mまで調査を行ない、簡易矢板を設置した後、以下の調査を行った。

1区

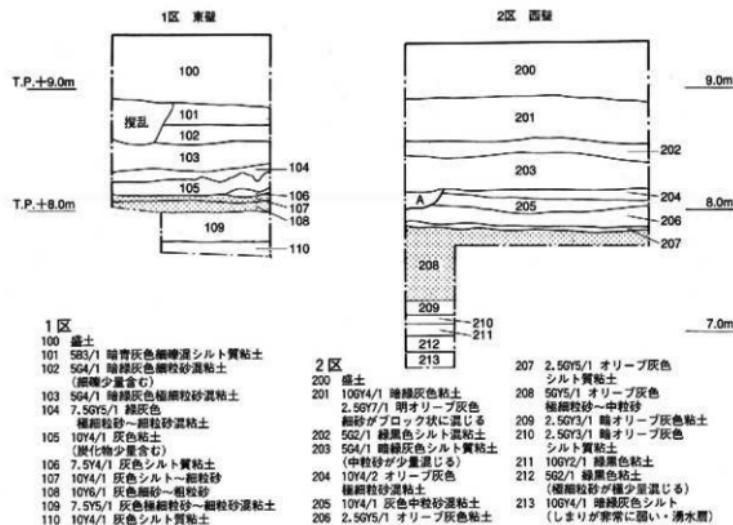
現地表 (T.P.+9.44m) 下約1.8mまで調査を行った。T.P.+8.1m付近でシルト～粗粒砂の河川堆積層 (107・108層) を確認した。この砂層はA11で検出した平安時代中期頃までに埋没したとされている河川堆積層に相当するものと思われる。

1区では、遺構・遺物は確認できなかった。

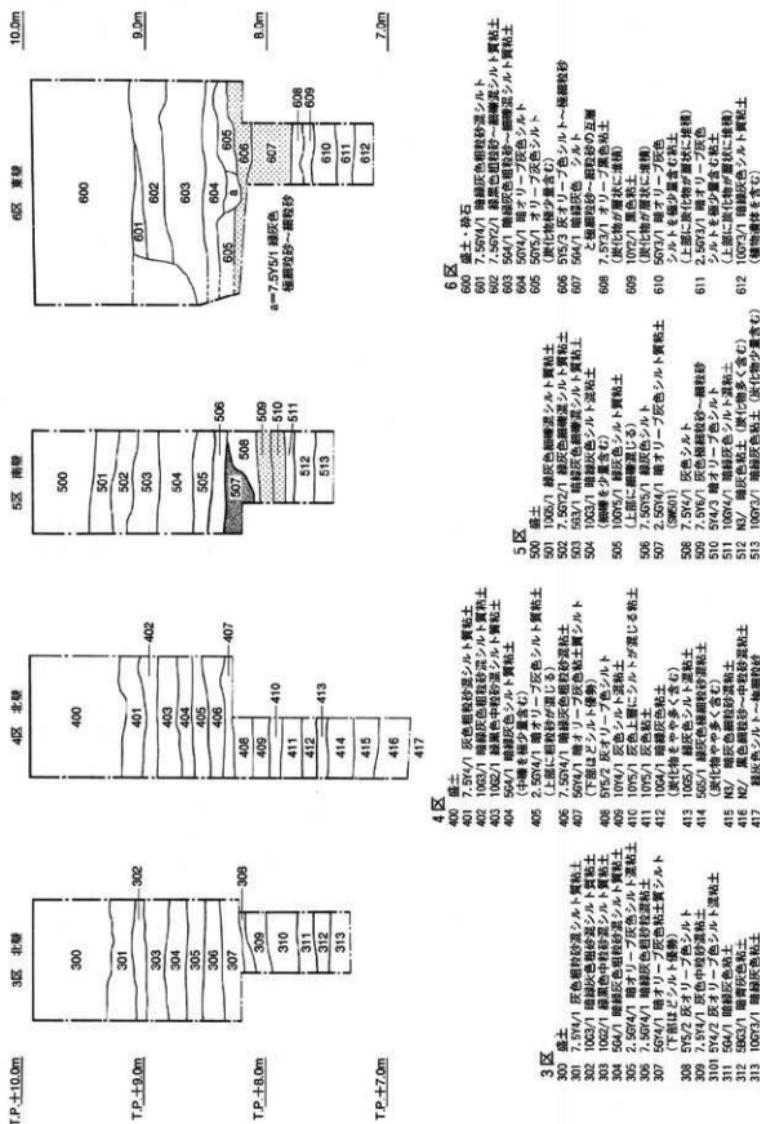
2区

現地表 (T.P.+9.38m) 下約2.7mまで調査を行った。T.P.+8.1m前後の205層で土師器の破片を検出したため、平面的に精査を行ったが、遺構は確認できなかった。しかしながら、地層観察時に西壁で204層から南に向かって落ち込むA層 (2.5GY5/1オリーブ灰色粘土) を確認した。204・205層とも極細粒砂～中粒砂が混在する層であり、遺構が存在した可能性も否定できない。

次に、T.P.+7.8m付近から極細粒砂～中粒砂の河川堆積層 (208層) を確認した。これは、1区の107・108層に相当するものである。しかし、208層からは水が激しく湧いてきたため、断面を残して堆積状況を確認することはできなかった。また、208層からの湧水のため、上層 (200~207



第3図 1・2区地層断面図 (S=1/40)



第4図 3~6区地層断面図(S = 1/40)

層)も壁ごと崩れてきたため、充分な観察は行えなかった。部分的な観察であるが、209~212層は植物遺体を含む湿地状の堆積を示す。以下の213層は、非常にしまりの悪いシルトで、湧水が激しかった。

出土遺物は205層から壺の取っ手部分が出土している。この部分だけで時期を特定するのは難しいが、奈良~平安時代に比定できるだろう。その他、208層から、古墳時代初頭~前期に相当すると思われる、外面にハケ調整が施された壺の体部の破片が出土している。しかしながら、小破片のため図化できなかった。

3区

幅1.1m・長さ23.8mの開削部分である。全体を3区分(3-1~3-3区)して調査を行った。西側から調査を開始し、現地表(約T.P.+9.9m)下、約2.6mまで掘削を行った。最初に行った立会い調査の地層観察の結果、現地表下約1.6m前後(T.P.+8.3m)で上部に中粒砂を少量含み、よくしまった粘土質シルト層(307層)を観察した。そのため、307層上面を調査対象面とした。しかし、調査区全域の現地表下約1.5~1.7m前後には、既設の排水管が南北方向に埋設されており、平面的な調査は行えず、遺構も確認できなかった。そのため、地層観察が主になったが、地層は3-1~3-3区ともほぼ同様の堆積状況を示していた。3区の地層を観察した結果、307層の他に、309層の上面でも中粒砂を含むなど人為的に攪拌を受けた痕跡が確認できた。しかしながら、遺構の有無は確認できなかった。また、311層以下は、植物遺体を層状に含み、炭化物や炭酸鉄斑が見られるなど湿地状の堆積状況を示していることが観察できた。

3区からは、301~306の各層から遺物が出土しているが、ほとんどが土師器の小破片で時期を明確にできるものではない。

4区

3区と5区をつなぐ人孔である。現地表(T.P.+9.95m)下、約3.1mまで調査を行った。今回の調査のなかで最も深い部分まで調査を行うことができた調査区である。地層は3区とほぼ同様の堆積状況を示している。遺構面の可能性の高い307層に対応する407層は確認できたが上面で遺構の検出はできなかった。検出できた遺構は、簡易矢板打設後に検出した井戸1基のみである。出土遺物としては、401・402・407・416の各層から出土している。なかでも416層からは、弥生時代前期~中期前葉に比定できる壺もしくは壺の底部が出土している。

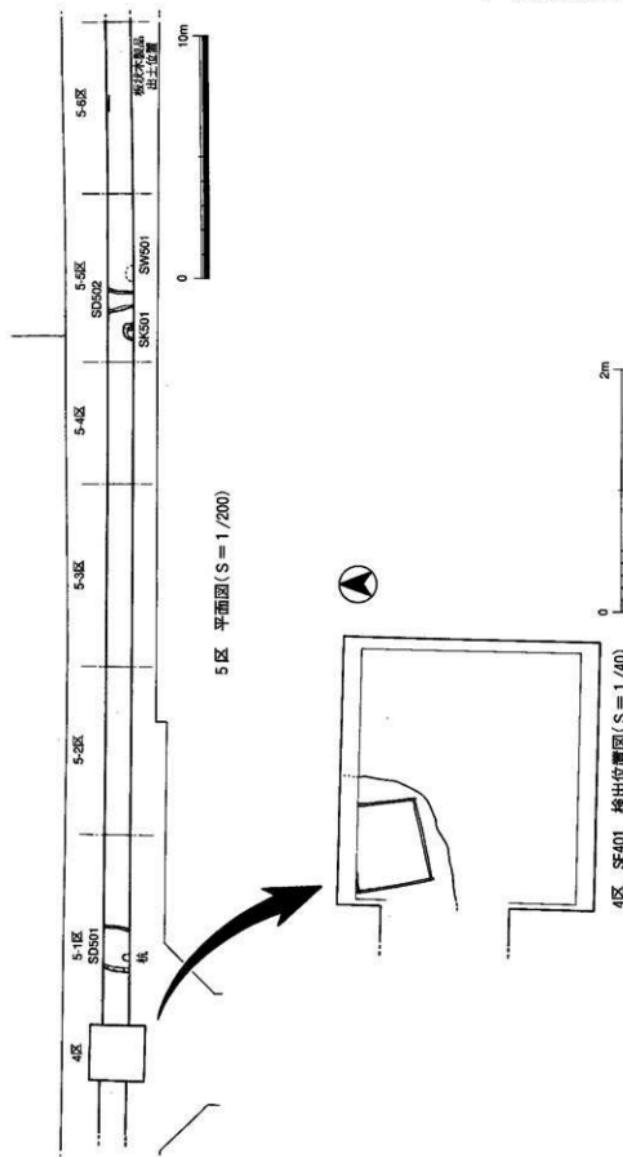
〈検出遺構〉

井戸(S E 401)

T.P.+8.0m前後で井戸側の最上部を検出した。S E 401は、簡易矢板打設後の機械掘削中に井戸側が出土したことによって明確となった遺構であるため、正確な遺構構築面は、確認することができなかった。

井戸の掘形は、井戸側の最上部より約0.2m掘り下げて平面精査を行ったところ、確認することができた。しかし、北と西側が調査区外に至っており、正確な平面形状は不明である。掘形内の埋土は径0.5~2cm前後の灰色粘土ブロックを含む層であった。

S E 401は、「縦板組横棟どめ井戸」に分類されるもので、井戸側の平面形状は方形である。規模は一辺約0.65mを測る。北側は調査区外に至るため、正確な構造は不明であるが、東・西・南とも一辺に3枚の縦板を組み合わせている。井戸側は1段のみを確認した。ほとんどが幅20cm前後、



第5図 4区・5区検出位置図

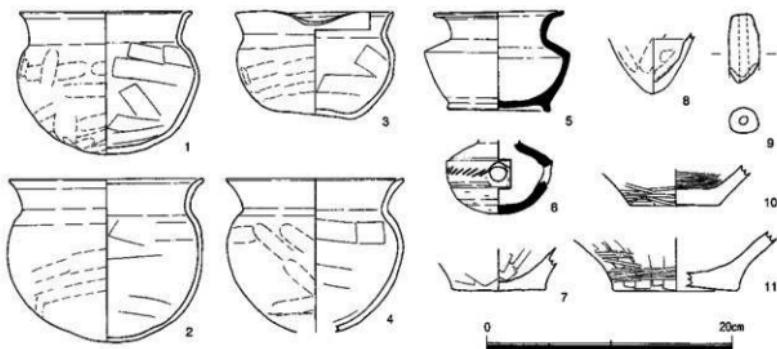
長さ110cm前後であった。最大の縦板は、西側に使用されていたもので、幅36cm・長さ125cm・厚さ5cmを測る。また、横柵は2段分確認した。そして、井戸側の最下部は416層(T.P.+6.8m前後)以下の緑灰色シルト～極細粒砂の湧水層まで達しており、水はこの層から供給されていたことが確認できた。

井戸側内埋土は大きく分けて、3層に分かれる。上層から①：10Y5/1灰色粘土質シルト、②：5G4/1暗緑灰色粘土質シルト、③：N3/暗灰色中粒砂混粘土である。また、遺物のほとんどは③層から出土している。井戸側内から出土した遺物は土器、木製品、土製品や植物遺体など多岐にわたる。以下、これらの井戸側内から出土した遺物の出土状況を概説する。

まずT.P.+7.5m前後で南北方向に長辺を持つ板状木製品が2枚出土した。これらは②層の最下部に位置している。2枚ともほぼ水平に置かれた状態で一段目の横柵より上で出土した。蓋のような役割を果たしたものであろうか。そして、T.P.+7.2m前後で土師器甕が完形で2個体(1・3)と破片が出土した。この破片は土師器甕2個体分(2・4)に復元できた。次に、T.P.+7.0m前後で須恵器の壺が2点出土した。1点はほぼ完形の壺Hと呼ばれるもの(5)で、もう1点は底の体部(6)である。2点ともほぼ同じ高さ(T.P.+7.0m前後)から出土した。それ以下は、正確な高さを確認できなかったが、土器のほか、土錐(9)、桃の種や木片などが出土している。これらの出土遺物は井戸の廃絶時に行われた祭祀に関係する遺物が大半と思われるが、時期差が認められるものも含まれている。

〈出土遺物〉

井戸内から出土した遺物の内、(1～9)を図化した。1～4は土師器の甕である。1・2は丸底で球形の体部を持つ。頸部はやや外反気味に立ちあがり、端部は外側に屈曲してひらく。3は他よりやや小型の甕で、底部は平底を呈し、頸部は直線的に立ちあがる。口縁端部は一部が注ぎ口を意識したかのように変形している。4は底部を欠いているが、球形の体部をもち、頸部はやや外反気味に立ち上がる。口縁端部の内側は強くなられており、沈線状のくぼみが観察できる。5は須恵器の壺Hである。肩部が大きく張りだし、頸部は短い。しっかりふんばった高台がつき、器高が8.1cmとやや小型品である。内面には何かは断定できないが、付着物が残存している。



第6図 4区出土遺物実測図(S=1/4)

1～5の時期は8世紀後半に比定できる。6は甕の体部である。口縁部が出土していないため、詳細は不明であるが、6世紀後半～7世紀前半のものであろう。7は弥生時代前期～中期の壺か甕の底部である。井戸の最下部から出土しており、本来は416層内出土の可能性が高い。8は製塙土器の底部とみられ、内外面とも指で強くなれて成形しており、内面の上部にはハケが若干観察できる。1～5と同時期に比定できよう。9は須恵質の土錐である。表面には、指押さえが残存している。

〈416層出土遺物〉

416層から出土した遺物のうち、2点を図化した(10・11)。10は内外面ともヘラミガキを施している。11の外面はハケの後粗いヘラミガキが施されている。2点とも壺か甕の底部であろう。時期は弥生時代前期後葉～中期前葉に比定できる。

5区

幅1.0m・長さ51.9mの開削部分である。全体を7区分(5-1区～5-7区)して調査を行った。全調査区を通じて比較的安定した堆積状況を示している。T.P.+8.4～8.3m前後で土壤化の痕跡が見られる粘土質シルト～シルト層(506層)を確認できた。506層はこれに相当する層が5区全域で確認できており、307層・407層と対応するものと考えている。また、T.P.+8.1～7.8m前後で観察した灰オリーブ色のしまりの悪いシルト層(510層)は、308層・408層に対応するものと考えられる。この層は東に行くほどしまりが悪く、水を多く含む層になる。

5区で検出できた遺構は、5-1区で溝1条(S D501)、5-5区で土坑1基(S K501)・溝1条(S D502)・土器溜1基(S W501)である。以下、遺構を検出した各小地区ごとに概要を述べる。

・5-1区

〈検出遺構〉

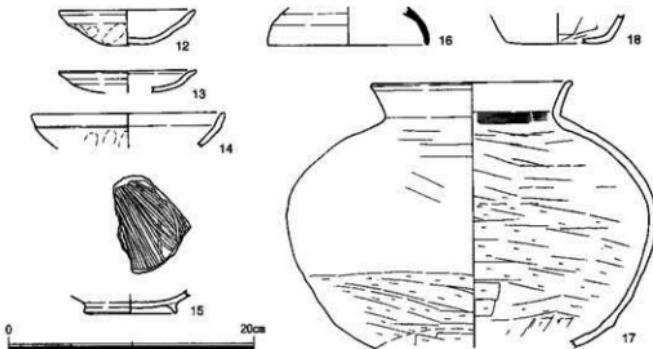
T.P.+7.7m前後の10GY5/1縁灰色粘土層上面で溝1条(S D501)を検出した。この遺構は、最終面で検出しており、正確な遺構構築面は簡易矢板を打設していたため、確認できていない。

溝(S D501)

平面形状は南北とも調査区外に至るため、不明である。土坑となる可能性もあるが、検出状況から溝とした。幅は0.7～1.0m、深さは約0.15mを測る。埋土は10GY4/1暗緑灰色シルト混粘土層の單一層である。また、S D501の中央の調査区南壁付近で断面がかまぼこ状を呈する杭状木製品を1本検出した。この杭状木製品の最上部のレベルはT.P.+7.9m前後である。杭状木製品は腐食しており、最後まで取り上げることはできなかったため、先端が尖っているかどうかは確認できなかった。杭状木製品は長さが75cm前後、幅30cm前後、厚さ2～3cmの板状木製品2枚によって囲まれていた。しかし、これらは簡易矢板によって切断されており、正確な法量は不明である。板状木製品は杭状木製品よりも浅く埋まっていたが、これらの木製品の性格は不明である。

〈出土遺物〉

S D501からは土師器と黒色土器が出土したが、図化できたのは(12～15)である。しかし、これらには時期差が認められる。12は深身の皿で内面はナデ、底部外面は指押さえが残る。13は皿で、口縁部を強くなれて外反している。14は口径15.5cmを測る大皿で口縁端部を一条強くヨコナデしている。これらは11世紀後葉に比定できる。15は内黒の黒色土器碗の底部で、高台が貼り付けられている。見込み部にはやや密なヘラミガキを施している。時期は10世紀前半に比定できよう。



第7図 5区出土遺物実測図、SD501(12~15)・SK501(16)・SW501(17・18)(S=1/4)

・5-5区

〈検出遺構〉

508層上面(T.P.+8.3m)で土坑1基(SK501)と溝1条(SD502)・土器溜1基(SW501)を検出した。しかしながら、土坑と溝に関しては、機械掘削の段階で掘りすぎており、本来の遺構構築面は、506層上面である。また、土器溜は508層上面から切りこむ遺構であることを南壁で確認した。

土坑(SK501)

平面形は、南側が調査区外に至るため不明である。断面形状は東側に1段肩を持ち、西側はなだらかに立ちあがる。深さは約0.45mを測り、埋土は①:10G4/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂混粘土(炭化物多く含む)、②:10GY3/1暗緑灰色粘土質シルト(炭化物非常に多く含む)の2層に分かれる。

〈出土遺物〉

遺物は①層から土師器と須恵器が出土しており、そのうち須恵器の杯蓋を図化した(16)。口縁部のみであるが、時期は6世紀末～7世紀初頭に相当する。

溝(SD502)

SK501の東側で検出した。この遺構も溝としたが、南北とも調査区外に至るため、性格は不明である。深さは約0.25mを測り、埋土は10GY4/1暗緑灰色シルトの單一層である。遺物は出土しなかった。

土器溜(SW501)

508層上面で土師器の破片がまとまって出土したため、これを土器溜とした。出土したのは17と18である。17は口縁を下に向けた形で出土した。17を確認した段階で平面精査を行ったが、掘形を確認することができなかった。しかし、南壁の地層観察で508層から西に向かって落ち込む層(507層)を観察することができた。加えて、507層内には17の破片が含まれていたため、この層が遺構であった可能性が高い。以上のことから正確な遺構構築面が508層上面であることを再確認できた。

<出土遺物>

図化できたのは(17・18)の2点である。17は中位が大きく張り出した体部をもつ土師器の壺である。短い口縁部は外方に向かって直線的に伸び、口縁端部は丸くおさめる。体部外面下半はヘラケズリを施し、上半はナデ調整である。内面の調整は底部付近には縦方向、そして体部最大径より下半はナナメ方向のヘラケズリを行っている。上半は頸部内面にハケ調整を行う他はヨコナデと板ナデを施している。18は底部が平底を呈する把手付きの鉢であろう。調整は内外面とも磨耗しているが、内面に若干の板ナデ痕がみられる。17の時期については、SK501から6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出土していることと、18の時期から考えると、6世紀後半頃に比定できよう。

その他、5-6区の現地表下約1.1m(T.P.+8.8m)で板状木製品が出土した。この板状木製品は調査区の北壁の504層内で確認したもので、掘形などは不明である。長さ約70cm・幅約13cm・厚さ約3cmを測るもので、東西方向に長軸を持ち、北にむかってやや傾く形で出土した。周囲にこれに伴う遺物も確認できなかった。

[6区]

5区の開削部分がつながる東端の人孔である。現地表(T.P.+9.9m)下、約2.8mまで調査した。現地表下約1.7mは既設の排水管やコンクリートの廃材が埋められていたため、平面的には調査できなかった。加えて、西・南・北の各壁も廃材で搅乱されていた。そのため、地層観察は搅乱をあまり受けていなかった東壁で行った。

前記の通り、上部の搅乱が激しかったため、606層までは平面的には観察できなかった。しかし、断面観察の結果、606層が506層などの土壤化層に相当することが判明した。また、607層はシルトと極細粒砂～細粒砂の互層を成しており、水の湧く層である。510層に相当すると思われる。そして611層以下は、植物遺体や炭化物が層状に堆積している状況が観察できた。このことから当時、湿地状の環境であったことが推察できる。

出土遺物は、604層から土師器の破片が出土しているが、破片であるため時期などは不明である。

表2 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	遺構 番号	器種	法量	調整 技法	色調	胎土	焼成	備考
1 四	4区 SE401	土師壺	口径 13.9 器高 11.7	外面:横方向のナデ後部 分割的縦方向のナデ 内面:板ナデ	内外面:5Y6/3オリーブ黄色 断面:5YR5/4にぶい赤褐色	精良	良好	完形
2 四	4区 SE401	土師壺	口径 15.9 器高 13.3	外面:ナデ 内面:板ナデ	内外面:10YR7/2にぶい黄 褐色 断面:5YR5/4にぶい赤褐色	精良	良好	約4/5残存
3 四	4区 SE401	土師壺	口径 12.7 器高 8.6	外面:横方向のナデ 内面:板ナデ	内外面:2.5Y6/3にぶい黄色 断面:5YR4/3にぶい赤褐色	精良	良好	完形 注ぎ口 を意識したものか、口縁部 が一部変形
4 四	4区 SE401	土師壺	口径 (14.5) 器高 (12.6)	外面:ナデ 内面:板ナデ	内外面:2.5Y6/3にぶい黄色 断面:7.5YR5/4にぶい褐色	精良	良好	
5 四	4区 SE401	須恵器	口径 (10.4) 器高 8.1	内外面とも回転ナデ	N5/ 灰色	密	堅緻	内面に付着物 あり
6 四	4区 SE401	須恵器	体部径 8.6	外面:底部回転ケズリ 中位に刻文を施す 内面:回転ナデ	10BG4/1暗青灰色	密	堅緻	

遺物番号 図版番号	遺構番号	基種	法量	調整 技法	色調	胎土	焼成	備考
7 四	4区 SE401	弥生土器 壺か壺	底径 7.6	外面：板ナデ 内面：板ナデ	外面：5YR6/2灰白色 内面：7.5YR7/3にぶい黄橙色	やや粗	良好	
8 四	4区 SE401	製塙上器	高さ (5.0)	外面：板ナデ 内面：上部板ナデ	外面：2.5Y8/2灰白色 内面：2.5Y8/2灰白色	やや粗	良好	
9 四	4区 SE401	土錐		指押さえ	10BG4/I暗青灰色	密	良好	須恵質
10 五	4区 416層	弥生土器 壺か壺	底径 7.3	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	外面：10YR7/2にぶい黄橙色 内面：N2/ 黒色	やや粗	良好	
11 五	4区 416層	弥生土器 壺か壺	底径 (10.0)	外面：ハケ後ヘラミガキ 内面：ナデ	外面10YR6/2灰黃褐色 内面：10YR7/2にぶい黄橙色	やや粗	良好	
12 五	5-1区 SD501	土師器皿	口径 (11.0)	口縁端部はヨコナデ その他のナデ調整	外面：7.5YR5/2灰黃褐色 内面：10Y6/3にぶい黄橙色	精良	良好	
13	5-1区 SD501	土師器皿	口径 (15.5)	口縁端部は強いヨコナデ	外面：7.5YR7/4にぶい橙色 内面：10YR6/3にぶい黄橙色	精良	良好	
14	5-1区 SD501	土師器皿	口径 (11.2)	口縁端部は強いヨコナデ	外面：10YR6/3にぶい黄橙色 断面：5YR5/4にぶい赤褐色	精良	良好	
15	5-1区 SD501	瓦器碗	底径 (7.6)	底面：ナデ 内面：やや密なヘラミガキ	外面7.5YR5/4にぶい褐色 内面：N5 黒色	精良	良好	
16	5-5区 SK501	須恵器 杯蓋	口径 (12.7)	同軸ナデ	5B5/1青灰色	密	堅緻	
17 五	5-5区 SW501	土師器 壺	口径 16.1 最大径30.0	外面：下半はヘラケズリ 内面：ヘラケズリ 端部はハケ	外面：5YR5/6赤褐色 内面：7.5YR6/4にぶい褐色 ～7.5YR5/1褐色	精良	良好	
18	5-5区 SW501	土師器 把手付 鉢?	底径 (8.5)	内外面とも摩擦しており 調整不明瞭(内面：板ナデか)	外面：5YR5/6明赤褐色 内面：5YR6/6橙色	精良	良好	

3.まとめ

今回の調査は幅1m前後の開削部分が大部分を占め、平面的な調査は充分に行えなかった。しかしながら、調査地の西側に位置する1・2区では平安時代中期頃に埋没したと考えられる砂の堆積を確認し、また、東側に位置する4・5区では奈良～平安時代にかけての遺構が確認できるなど、貴重な成果を得ることができた。

1・2区で確認した108・208層は、前述した通り、A11で確認された砂層(T.P.+7.6~6.7m前後)に対応すると考えられる。また、A11でも河川が埋没した後に奈良～平安時代の遺物を含む層が構成されており、今回の調査でも同様の結果を得ることができた(205層)。

次に、4区で検出した井戸(S E 401)からは、須恵器の壺Hや土師器壺、桃の種など、井戸を廃絶する時に行われた祭祀の状況がよくわかる資料が出土した。同時期の井戸は当調査区の南約200mに位置するT 1で検出されている。T 1ではT.P.+8.2m前後で検出されており、約0.4mの高低差がある。しかしながら、当時の居住域がT 1よりも北側に広がる可能性を示す結果を得ることができた。また、416層から弥生時代前期～中期前半に比定できる土器が出土した。これは、当調査区の北西約30mに位置するA12の成果とも一致する。A12では、T.P.+7.3mで弥生時代中期の遺構が、T.P.+7.0~6.8m前後で弥生時代前期の遺構が検出されている。4区ではT.P.+7.1~6.8mで土器が出土しており、このことは、当該期の遺構面が当調査区を含んで南に広がる可能性を示唆している。

最後に、5区で検出した遺構であるが、出土した遺物は6世紀後半～11世紀後葉と時期幅がある。SD501の様に、同一遺構から時期幅のある遺物を検出した遺構もある。加えて、検出した面の高さがT.P.+8.5～7.7mと幅があり、正確な遺構構築面を確認できなかった遺構も存在する。また、5-1区で確認した杭や5-6区で確認した板状木製品など用途不明のものが多く、性格が不明なまま調査を終わってしまった。しかしながら、遺構面になる可能性のある506層を確認できた。今後の周辺調査の一指標となるだろう。

註1 宇野隆夫 1982「井戸考」「史林」65巻5号

註2 1974『平城宮発掘調査報告VI 平城京左京一条三坊の調査』奈良国立文化財研究所学報第23冊 奈良国立文化財研究所

参考文献

- ・坪田真一 1993「II 第2次調査(T S90-2)発掘調査概要報告」「太子堂遺跡<第1次調査・第2次調査>」(財)八尾市文化財調査研究会報告36 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1994「2. 跡部遺跡第12次調査(A T93-12)」「平成5年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1997「II 跡部遺跡第11次調査(A T93-11)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告58」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・寺沢 真・森岡秀人編 1989「弥生土器の様式と編年－近畿編I-」(株)木耳社
- ・伊野近富「1. 土器器皿」
- ・森 隆「2. 黒色土器」
- ・尾上 実・森島康雄・近江俊秀「6. 瓦器挽」
上記3編は中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』『III 土器・陶磁器』 真陽社
- ・古代の土器研究会編 1994『古代の土器3 都城の土器集成III』
- ・古代の土器研究会編 1996『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』
- ・岡崎晋明 1984「近畿地方の内陸部より出土の製塙土器」「ヒストリア』105号 大阪歴史学会
- ・辻 美紀 1994「古墳時代中・後期の土器に関する一考察」「国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－」大阪大学考古学研究室



1区 調査開始状況（南から）



1区 東壁断面



3区 北壁断面（T.P. +9.4~8.2m）



3区 北壁断面（T.P. +8.0~7.3m）



2区 205層上面（南から）



2区 西壁断面（T.P. +9.3~7.9m）



2区 西壁断面（T.P. +7.3~6.7m）



2区 最終状況（南から）



4区 SE401検出状況（東から）



4区 SE401土器出土状況（南東から）(T.P.+7.0m)



4区 SE401北壁断面



4区 北壁断面 (T.P.+9.5~8.3m)



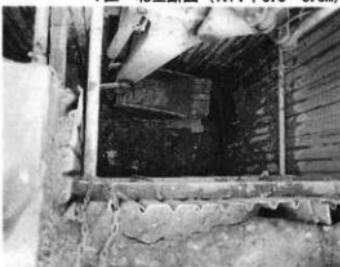
4区 SE401板木製品検出状況（南東から）(T.P.+7.5m)



4区 北壁断面 (T.P.+8.3~6.8m)



4区 SE401土器出土状況（南東から）(T.P.+7.2m)



4区 下層堀削状況（南から）



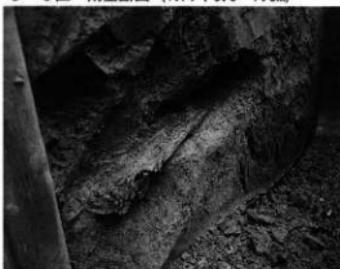
5-1区 SD501検出状況（西から）



5-5区 南壁断面（T.P.+9.0~7.5m）



5-5区 506層上面検出遺構（西から）



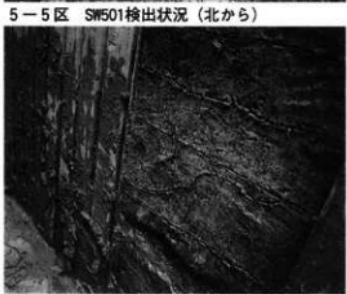
5-6区 北壁出土木製品（南西から）



5-5区 SW501検出状況（北から）



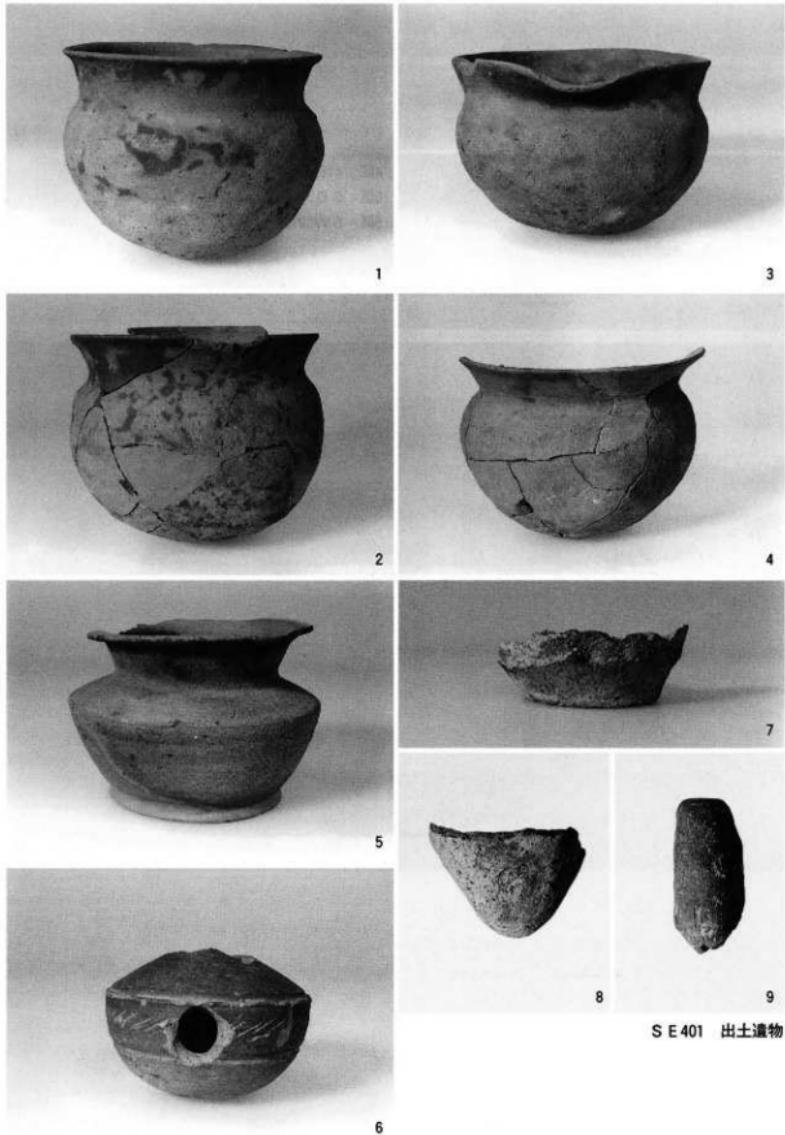
6区 東壁断面（T.P.+9.6~8.2m）



5-5区 南壁断面（T.P.+8.6~7.5m）



6区 東壁断面（T.P.+8.3~7.1m）



S E 401 出土遺物



4区 416層出土 (10・11)

5区 S D501出土 (12)

5区 SW501出土 (17)



II 植松南遺跡第2次調査(UMS99-2)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南植松町2・3丁目地内で行った、公共下水道工事（平成10年度第一第30工区）に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する植松南遺跡第2次調査（UMS99-2）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第612号 平成11年1月29日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年4月7日～5月28日（実働5日間）にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、約28m²を測る。
1. 現地調査・内業整理に参加した補助員は以下のとおりである(五十音順)。
田島和恵・松本貴匡・宮崎寛子・山口拓也

本文 目 次

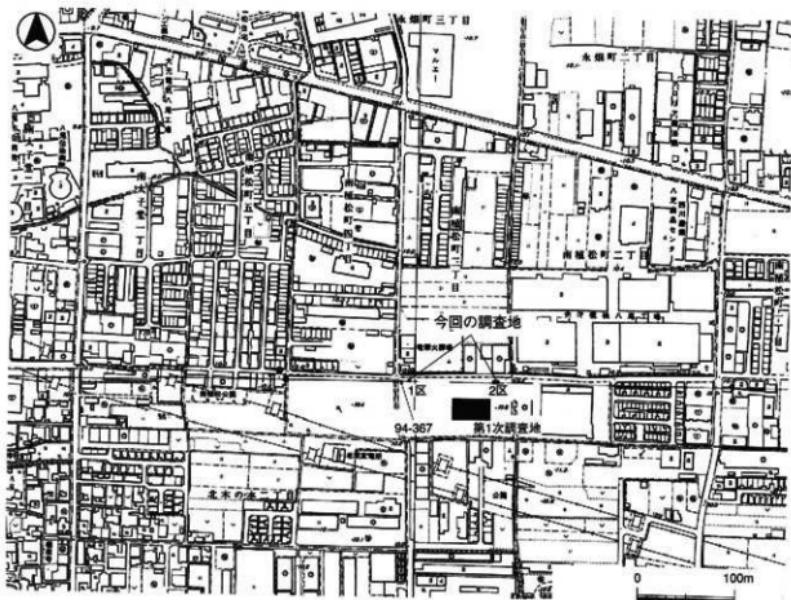
1. はじめに.....	19
2. 調査概要.....	20
1) 調査の方法と経過.....	20
2) 検出遺構と出土遺物.....	20
3.まとめ.....	22

II 植松南遺跡第2次調査(UMS99-2)

1. はじめに

植松南遺跡は八尾市の南西部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川の左岸一帯に広がる沖積地上に立地する。当遺跡の周辺には、北に植松遺跡・北西に太子堂遺跡・南に木の本遺跡・東に老原遺跡がある。当地は、市教育委員会が平成6年度に行った遺構確認調査(94-367)で、古墳時代前期の遺物包含層を検出していたが、その時点では、「遺跡」とは認定されていなかった。その後の平成8年度に、市教育委員会が行った竜華火葬場建て替えに伴う遺構確認調査(96-641)の結果から、新たに認定された遺跡である。そのため、火葬場建て替え予定地のみが遺跡範囲とされている。

この遺跡範囲確認調査をうけて、当調査研究会が平成9年度に火葬場建て替え予定地で実施した第1次調査(UMS97-1)の結果、現地表下2.0~4.0m(T.P.+7.0~9.0m)の範囲で、弥生時代中期~中世に至る遺構・遺物を検出するに至った。



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(平成10年度－第30工区)に伴うもので、当研究会が植松南遺跡内で実施した2度目の調査にあたり、略号はUMS 99-2である。調査地の位置は、第1次調査地(竜華火葬場建て替え予定地)の北側で、東西道路の拡幅予定地となっている。調査区は西側の人坑(1区)、東側の発進立坑(2区)の2箇所で、1区から調査を行った。

1区は、平成6年度に行われた市教委の調査地点(94-367)の北東に隣接しており、第1次調査地点の北西角からは、北西へ50m程度の位置にあたる。ここでは、工事に先だって、現地表下2m前後(T.P. +9.2~9.3m)までを素掘りとし、次に簡易矢板を設置して、現地表下3.4m(T.P. +7.8m)付近までを掘削し、地層堆積状況等の観察・写真撮影・図化等を行った。それ以下から、工事による最終掘削深度(T.P. +7.12m)までについては、工事に並行して立ち会った。

2区は1区から西へ約85m地点にあたり、第1次調査地点の北東角から北20mの位置にあたる。ここでは、鋼矢板打設後、工事に並行して、最終掘削深度(T.P. +5.62m)までの調査を行った。

2) 検出遺構と出土遺物

今回の発掘調査では、結果的に工事による最終掘削深度までの地層断面の観察にとどまった。

1区の概要

現地表面の標高はT.P. +11.1~11.4m、北西の道路側へ急角度で下がっている。地層断面観察用の畦は東側に残した。観察できた地層は以下の8枚(101~108層)である。盛土・表土は0.5m前後あり、それ以下の約0.7mが土壤改良のためにコンクリートで充填されている。

101層：青灰色粘土質シルトと灰黒色粘土質シルト混在、層厚30cm前後。上面の標高はT.P. +10m前後を測るが、土壤改良のために旧耕土・床土が攪拌されているものと思われる。

102層：青灰色シルト～微砂。層厚0.2~0.3m。

103層：白灰色粗砂。層厚0.2~0.3m。最下に酸化鉄が沈着しており、含水量が多い。

104層：青灰色粘土質シルト。層厚0.35m前後。上面には波状痕跡が認められることから、水田耕作土の可能性がある。

105層：灰色シルト～微砂。層厚0.5m前後。きわめて多量の水を含んでおり、非常に軟弱な土質である。

106層：灰黒色粘土。層厚0.7~0.8m。きわめて粘性が高い。

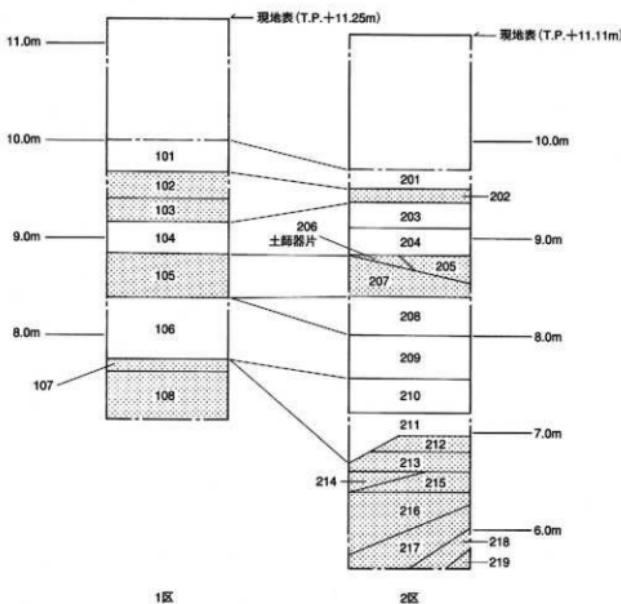
107層：粗砂と薄い植物遺体の互層。層厚0.1m前後。

108層：灰色シルト～微砂。層厚0.5m以上を確認した。105層と同様含水量がきわめて多く、軟弱な土質である。

2区の概要

2区は1区から東へ約85mの地点に位置する。現地表面の標高はT.P. +11.1mで、北側の道路に向かって0.2~0.3m程度下がっている。ここでは、現地表下約1.4mまでの盛土・コンクリート部分の掘削を終えてから、調査を行った。地層断面観察用の畦は東側に残した。観察できた土層は以下の19枚である。

201層：青灰色微砂混じり粘土質シルト。層厚0.15m前後。上面の標高はT.P. +9.7m前後を測るが削平されており、1区同様旧耕土・床土等が混在しているものと思われる。



- 101 青灰色粘土質シルトと灰黑色粘土質シルト混在
 102 青灰色シルト～微砂
 103 灰灰色細砂
 104 青灰色粘土質シルト
 105 灰色シルト～微砂
 106 灰黑色粘土
 107 相砂と薄い植物遺体の互層
 108 灰色シルト～微砂
- 201 青灰色微砂混じり粘土質シルト
 202 灰色粗砂
 203 青灰色粘土質シルトと褐色粘土質シルト混在
 204 青灰色シルト質粘土
 205 褐色微砂混じり粘土質粘土
 206 灰色微砂
 207 灰色微砂・粗砂・礫の互層
 208 灰褐色粘土と植物遺体を含むシルトの互層
 209 灰黑色粘土
 210 黄褐色粘土に青灰色シルトの互層
 211 黄褐色粘土質シルト
 212 青灰色粘土質シルトと灰色微砂の互層Ⅰ
 213 青灰色粘土質シルトと灰色微砂の互層Ⅱ
 214 青灰色微砂と輪灰色粘土質シルトの互層
 215 灰色微砂
 216 灰色微砂に少量の灰色粗砂・暗褐色粘土質シルト
 217 灰色微砂に暗褐色粘土質シルトの互層
 218 灰色微砂
 219 白灰色粗砂

第2図 1区・2区層序模式図(S=1/50)

202層：灰色粗砂。層厚0.25~0.4m。最下に酸化鉄が沈着しており、含水量はきわめて多い。

203層：青灰色粘土質シルトと褐色粘土質シルトが混在。層厚0.2m前後。上部に微砂が混入。

204層：青灰色シルト質粘土。層厚0.3m前後。下部に少量の礫が混入する。

205層：灰色礫混じりシルト質粘土。層厚0~0.25m。最下に少量の植物遺体を含み、含水量が多い。

206層：灰色微砂。層厚0~0.15m。上面に奈良時代以降の土器片が数点まとまっていた。
上面の標高は8.8m程度である。207層同様含水量が多い。

207層：灰色微砂・粗砂・礫の互層。層厚0.25~0.4m。含水量はきわめて多い。

208層：暗灰褐色粘土と植物遺体を含むシルトの互層。層厚0.3~0.4m。この層以下211層までの含水量は比較的少ない。

209層：灰黒色粘土。層厚0.4~0.5m。下部に炭酸鉄沈着する。

210層：暗灰色粘土に青灰色シルトの互層。層厚0.4m。

211層：青灰色粘土質シルト。層厚0.3~0.4m。

212層：青灰色粘土質シルトと灰色微砂の互層Ⅰ。層厚0~0.2m。粘土質シルトが多く、微砂が少ない。この層以下の含水量はきわめて多い。

213層：青灰色粘質シルトと灰色微砂の互層Ⅱ。層厚0.15m前後。粘土質シルトが少なく、微砂が多い。

214層：青灰色微砂と暗灰色粘土質シルトの互層。層厚0~0.3m。

215層：灰色微砂。層厚0~0.3m。

216層：灰色微砂に少量の白灰色粗砂・暗褐色粘土質シルト。層厚0~0.5m。

217層：灰色微砂に暗褐色粘土質シルトの多い互層。層厚0.2~0.3m。

218層：灰色微砂。層厚0.2~0.3m。

219層：白灰色粗砂。層厚0.15m以上を確認した。

ほとんどが水を多く含む軟弱な土質であったが、なかでも209層が硬くしまっていた。これらのうち205・206層は、南から北に下がる堆積状況を示しており、遭構内堆積土の可能性が考えられる。208~211層上面まではほぼ水平に堆積するが、それ以下の土層は、南から北へと下がっている。212・213層は、青灰色粘土質シルトと灰色微砂からなる互層で、下ほど砂が多く、粒径も大きくなる。214~218層は青灰色または灰色微砂が主体で、植物遺体を多く含む暗褐色~暗灰色粘土質シルト・白灰色粗砂等の互層で、219層白灰色粗砂に至る。212層以下は河川内堆積土と考えられる。1区との関係は、201層が101層に、202層が102・103層に、203・204層が104層に、207層が105層に、209層が106層に、212層以下が107層・108層に対応する。

3.まとめ

今回の調査では、工事に並行したため、現地表下4~5.5mの土層を観察することが可能であった。両調査区では、T.P.+7.5~8.4mに堆積する灰黒色粘土(106・209層)をはさんで、上下に含水量の多いシルト~礫からなる河川内堆積土が検出された。上層の河川内堆積土は105・205~207層からなり、ほぼ水平堆積、下層の河川内堆積土は107・108・212~219層で、2区では南から北へ下がる堆積状況が確認できた。

II 植松南遺跡第2次調査(UMS99-2)

上層の河川は、T.P. +8.4~8.8mにあり、過去の調査で確認した河川1(藤井1997)に対応する。今回の調査では、206層上面で奈良時代以降の土師器の小破片をごく少量検出した。第1次調査では、この層中で奈良時代末期から平安時代初頭の井戸を検出したことから、河川1は奈良時代末期から平安時代初頭には埋没していたものと考えられる。

中層の灰黒色粘土は、第1次調査で確認した弥生時代中期~古墳時代前期の遺物包含層に対応するものと考えられるが、今回の調査では遺物は含まれていなかった。

下層の河川は、T.P. +7m以下にあり、水量豊富なものである。その直上に堆積する211層青灰色粘土質シルトは、上面のT.P.+7.2mを測り、第1次調査の第2面ベース層(16層=綠灰色粘質シルト=上面の7.2~7.6m)に、土質・標高とも、ほぼ対応している。前述のように、第1次調査では、弥生時代中期の遺物も包含層内から出土していることから、下層の河川は、弥生時代中期までには埋没していたものと考えられる。

参考文献

- ・藤井 淳弘 1997 「3. 植松南遺跡(96-641)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書Ⅱ』 八尾市文化財調査報告37 平成8年度公共事業 八尾市教育委員会
- ・森本めぐみ 1998 「4. 植松南遺跡第1次調査(UMS97-1)」『平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』 (財)八尾市文化財調査研究会



1区 東側壁面（表土～103層）



2区 機械掘削状況（西から）



1区 東側壁面（103～105層）



2区 東側壁面（203～208層）



1区 東側壁面（105～106層）



2区 東側壁面（209～219層）

III 太田遺跡第4次調査（OOT99-4）

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市太田3丁目地内で実施した公共下水道工事（10-44工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太田遺跡第4次調査（OOT99-4）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第723号 平成11年3月9日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年6月14日～6月18日（実働4日）にかけて、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約43m²である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時行い、平成12年9月に終了した。
1. 本書の執筆・編集は、高萩が行った。

本文目次

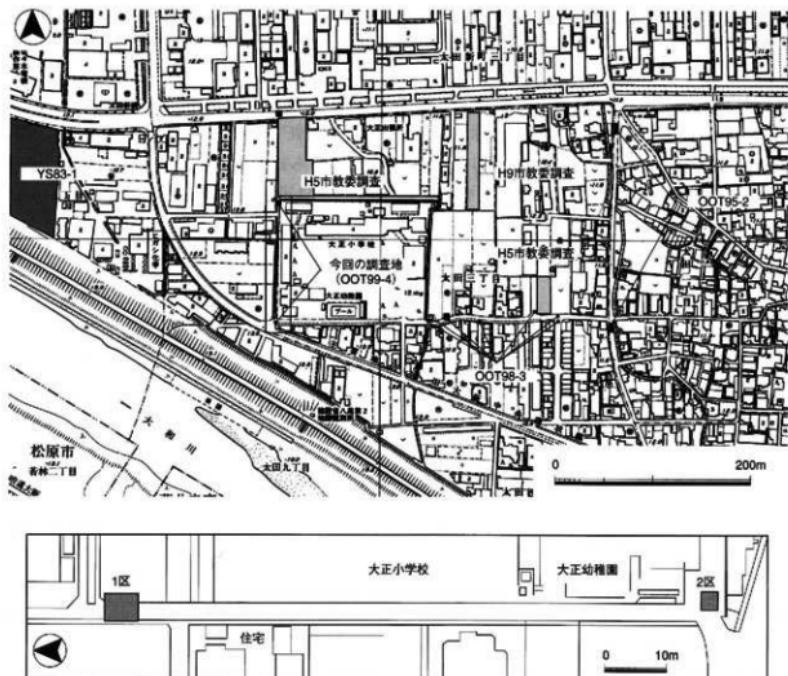
1.	はじめに	25
2.	調査概要	26
1)	調査の方法と経過.....	26
2)	検出遺構と出土遺物.....	26
	1区.....	26
	2区.....	28
3.	まとめ.....	30

III 太田遺跡第4次調査 (OOT99-4)

1. はじめに

太田遺跡は八尾市の南部に位置し、行政区画では太田3・4・9丁目、太田新町1・3丁目をその範囲としている。地理的には南から伸びる羽曳野丘陵の先端部と北側に広がる旧大和川の沖積地との接点部に位置する。当遺跡の周囲では、南に大正橋遺跡、津堂遺跡（藤井寺市）、西に八尾南遺跡、北に木の本遺跡が接している。

当遺跡は近年の発掘調査の成果によって旧石器時代～中世に至る複合遺跡であることが確認されている。当調査地の近隣では昭和62年度の大坂府教育委員会による公共下水道工事に伴う発掘調査で旧石器時代の石器が多量に出土している。^{註1} 平成5年度の八尾市教育委員会による共同住宅に伴う発掘調査で平安時代～鎌倉時代の井戸・小穴・溝などの集落遺構を検出している。^{註2}



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000) 及び位置図 (S = 1/800)

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事（10-44工区）によって破壊が予測される立坑部分を対象とした。調査対象の立坑部分は2箇所で、北部のNo.2立坑（6.8×4.8m、約33m²）を1区、その1区から南へ120mのNo.3立坑（3.2×3.2m、約10m²）を2区と呼称した。

まず1区の調査を平成11年6月14日（月）より開始した。現地表下1mまでは覆工板設置により掘削されていた。そこより下の地層について皮を剥ぐように少しずつ機械と人力による掘り下げを行った。一段目の張りを設置するため、その深度まで掘削を進めた。地層の観測は北壁を残した。現地表下2.5~2.7mで遺構を検出したが、北壁の断面実測のみでその日を終了した。翌日、一段目の張りを設置後、その遺構検出面を精査し、遺構の掘削・測量を行った。調査終了後、さらに工事掘削深度である現地表下4.2m（T.P.+8.0m前後）までの地層について上部と同様、機械と人力による掘り下げを進めた。下部についても北壁を残し、地層の観測および実測を実施し、1区の調査を完了した。その後の17日は1区から南へ約120m離れた2区を1区と同様、一段目の張りの深度までを掘削・調査した。地層の観測については、調査区が小規模であるため、南半分を先行して掘削し、北壁の観測を行った。そして一段目の張りを設置後の18日、その下部の調査を実施し、すべての調査を完了した。

2) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、1区では現地表下1.1m（T.P.+11.0m）前後で平安時代～鎌倉時代の地層、現地表下2.2m（T.P.+10.0m）前後で弥生時代の地層、現地表下2.7m（T.P.+9.4m）前後で縄文時代に比定される土坑（SK-1～3）3基を検出した。さらに現地表下3.1～3.5m（T.P.+8.6～9.0m）で旧石器時代に相当する地層を検出した。2区では現地表下1.5m（T.P.+10.9m）付近で現在の埋設工事により削平を受けたかたちで溝（SD-1）1条を検出した。出土遺物については1区・2区ともに出土しなかった。以下、各調査区について記す。

1区

① 基本層序

現地表（T.P.+12.09m）下～4.2mまでの間の地層で普遍的に存在する17層を抽出して基本層序とした。以下、各層を記す。

- 第101層 盛土・攪乱。層厚1.0～1.2m。上面の現地表面の標高はT.P.+12.09mを測る。埋設工事などによる埋め土。
- 第102層 茶灰褐色細砂混じり粘質土。層厚0.1m。遺物の包含はなかったが、調査区の北側で行ったH5年度市教委調査の成果では、同レベルで酷似する地層を検出しており、それに対応するとしたら平安～鎌倉時代の時期の地層と考えられる。
- 第103層 黄茶灰色粘土混じり細砂。層厚0.25m。東側に行くに従い粘土混じりとなる。
- 第104層 暗灰茶色粘質シルト。層厚0.1～0.25m。
- 第105層 灰色粘質土。層厚0.05～0.2m。褐色の斑点が少量みられる。
- 第106層 淡灰色混細砂～シルト。層厚0.05～0.2m。
- 第107層 淡灰茶色粘土。層厚0.1～0.2m。
- 第108層 黒灰色粘質土。層厚0.15～0.2m。東部で第108'層黒灰青色粘質土がみられる。

- 第109層 暗灰色細砂。層厚0.3m前後。
- 第110層 黒灰色粘質シルト。層厚0.1~0.2m。S62年度府教委調査で検出している第7層に相当する地層である。
- 第111層 青灰色シルト。層厚0.15m。
- 第112層 青灰色粘土。層厚0.2~0.3m。炭化物を少量含む。粘着性のある粘土である。
- 第113層 乳灰色シルト。層厚0.2~0.3m。よくしまっている。
- 第114層 乳灰青色粘質シルト。層厚0.2~0.35m。
- 第115層 緑灰色シルト。層厚0.3~0.35m。よくしまっている。
- 第116層 淡青灰色微砂。層厚0.4m前後。
- 第117層 灰青色粗砂。層厚0.55m。砂粒の大きさは5~10mmを測る。
- 第A層 淡灰青色粘質シルト。層厚0.4m。SK-3の埋土。
- 第B層 暗青灰色粘質シルト。層厚0.05~0.1m。SK-3の埋土。
- 第C層 青灰色粘土。層厚0.7m。SK-3の埋土。
- 第D層 乳灰色微砂。SK-3の埋土。
- 第E層 黒灰色細砂混じり粘質土。層厚0.5m。SK-3の埋土。
- 第F層 暗青灰色細砂混じり粘質土。層厚0.3~0.5m。SK-2の埋土。

調査区では旧石器時代～鎌倉時代に対応する地層がみられた。第114層～第115層は府教委調査で検出している旧石器時代に相当する層で、第113層は大山ホーキ火山灰を含む層ではないかと思われる。第102層～第110層まではほぼ水平な堆積を呈している。第110層は縄文時代（府教委調査では前期の爪形文土器出土の層にあたる）。第108層は弥生時代。第102層は平安～鎌倉時代の層にそれぞれあたるものと思われる。また、第111層上面より切り込む遺構を検出している。第A層～第E層はSK-2の埋土、第F層はSK-3の埋土である。

②検出遺構・出土遺物

第113層を除去した第114層上面 (T.P. +9.6m) で土坑2基 (SK-1・2) を検出した。

土坑 (SK)

SK-1

調査区北部で検出した。平面楕円形の土坑である。規模は長径約1.2m、短径0.8m、深さ0.5mを測る。埋土は第110層と同じ黒灰色粘質シルトである。土坑内から遺物が出土していないため、明確な時期は不明である。層序から想定すると縄文時代のものと思われる。

SK-2

調査区の北壁で検出した。北部が調査区外に至るため、平面形状は不明である。規模は検出部で東西約1.0m、南北0.8m以上、深さ0.5mを測り、SK-3を切る関係にある。埋土は暗青灰色細砂混じり粘質土の一層である。土坑内は無遺物であり、SK-1と同様、明確な時期は不明である。

SK-3

調査区北東部の北壁で検出した。北東部が調査区外に至るため、平面形状は不明である。規模は検出部で東西約1.5m、南北0.8m、深さ0.6mを測る。埋土は上から青灰色粘質シルト・灰黒色粘質土・乳灰色微砂である。土坑内は無遺物であり、SK-1と同様、明確な時期は不明である。

るが、SK-2に切られていることから、SK-2より古い時期と言えるであろう。

2区

①基本層序

現地表（T.P.+12.3～12.5m）下約4.2mまでの間の地層で普遍的に存在する12層を摘出して基本層序とした。以下、各層について記す。

第201層 盛土・搅乱。層厚1.0m。

第202層 乳灰色細砂。層厚1.2～1.7m。水平のラミナがみられる。砂層内から自然木片が少量みられた。NR-1の埋土。

第203層 灰青シルトと乳灰色細砂のブロック土。層厚0.3m。植物遺体を少量含む。

第204層 灰青色シルト。層厚0.1～0.3m。

第205層 暗灰青色粘質シルト。層厚0.2m前後。

第206層 青灰色粘土。層厚0.1～0.2m。粘性の強い粘土。植物遺体を少量含む。

第207層 灰青色粘質土。層厚0.15m前後。

第208層 乳灰青色シルト混細砂。層厚0.15～0.25m。

第209層 青灰色シルト混じり粘土。層厚0.2m前後。

第210層 青灰色粘土。層厚0.1m前後。

第211層 暗灰青色粘土。層厚0.15m前後。

第212層 灰青色粘質土。層厚0.1m以上。炭化物を含む。

第H層 暗灰色細砂。層厚0.2m。SD-1の埋土。

第I層 暗灰黒色粘質土。層厚0.2～0.3m。SD-1の埋土。

第202層は河川の堆積土である。この砂層は調査区外の北東側のボーリングデータでは、調査区内で検出した基底面より約1.0m低い結果が得られている。第204層～第211層はほぼ水平な堆積を呈している。工事掘削深度の床面付近で検出した第212層は1区で検出している縄文時代に相当する第110層に対応する可能性があるが、レベルでは約1.2mほど低い。第H層・第I層は溝(SD-1)の堆積土である。

②検出遺構・出土遺物

現地表（T.P.+12.3m）下4.2mまでの層を観測した。その結果、第202層上面より切り込む溝(SD-1)1条を検出した。また、第202層は河川(NR-1)の堆積と考えられる層である。

溝(SD)

SD-1

調査区東部で検出した南北方向にのびる溝で、東肩は調査区外に至り、溝幅は不明である。深さは最深部で0.5mを測る。埋土は上から暗灰色細砂・暗灰黒色粘質土である。遺物の出土はなく、上部が現在の埋設工事により削平を受けており時期は不明である。

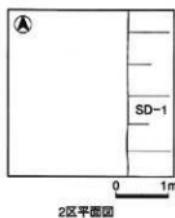
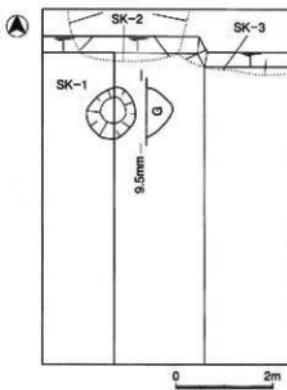
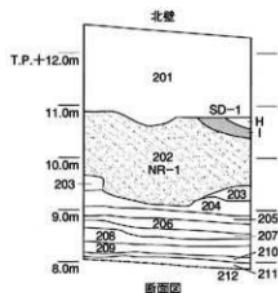
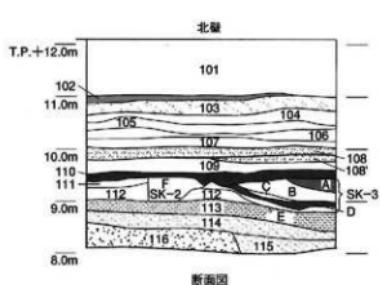
河川(NR)

NR-1

調査区全体で検出した基本層序の第202層がそれにあたる。川幅や流路方向などは不明であるが、調査区内の砂層の厚み約1.2～1.7mを測り、底面は起伏がみられる。また、調査区から北東約1mの所で行われた下水工事のボーリングデータの結果では砂層が約2.5mの厚みを観測して

III 太田遺跡第4次調査(OOT99-4)

おり、調査区内より約0.8~1.3m深いようである。埋土内から土器類は出土しなかったが自然木と思われる破片が少量みられた。



第2図 1区平断面図($S = 1/100$)

第3図 2区平断面図($S = 1/100$)

3.まとめ

今回の調査は、下水工事に伴う小規模な立坑2箇所の調査であった。調査の結果、遺物の出土はなかったものの旧石器時代～鎌倉時代にかけての地層に対応する層を確認することができた。遺構としては縄文時代前期のものと思われる土坑、弥生時代以降のものと思われる河川、平安時代以降のものと思われる溝を検出した。1区で検出した旧石器時代の層は2区ではみられなかつた。弥生時代に対応する第212層は2区の最終床面下で確認されているが、1区で検出しているレベル高より約2m低い。このことは北側の1区が丘陵の先端部分にあたり、南側の2区がその谷間にあたるのではないかと考えられる。また、東部へ100mの所でも沖積地状を呈する堆積が確認されており、検出した丘陵は細長く伸びていることがうかがえる。今後、近隣の調査資料が蓄積すれば、丘陵の範囲が想定できるであろう。

註1 福田英人 1989 「八尾市遺跡－旧石器出土第3地点－」 大阪府教育委員会

註2 吉田野乃 1994 「4. 太田遺跡(93-81)の調査」「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ」 八尾市教育委員会

註3 前註2掲載

註4 前註1掲載

註5 前註1掲載

註6 埋蔵文化財指示書八教社文第723号の下水道工事平面図

参考文献

- ・米田敏幸 1988 「大正橋遺跡(86-516)の調査」「八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ」 八尾市教育委員会
- ・西村公助 1992 「太田遺跡第1次調査(OOT91-1)」「平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告 財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野乃 1994 「4. 太田遺跡(93-81)の調査」「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書Ⅰ」 八尾市教育委員会
- ・1990『太田遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会



1区 遺構検出状況（東から）



1区 SK-1（東から）



1区 北壁〈T.P. +8.0~9.5m〉



1区 全景（南から）



2区 北壁〈T.P. +8.0~10.0m〉



2区 全景（南から）



IV 大竹西遺跡第4次調査(OTN99-4)

大 竹 西 遺 跡

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市上尾町9丁目・西高安町4丁目地内で実施した公共下水道工事（平成10年度恩智川東排水区第206工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する大竹西遺跡第4次（OTN99-4）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第259号 平成11年8月11日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年11月4日～12月21日（実働17日間）にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約91.52m²である。
1. 現地調査にあたっては、市森千恵子、加茂靖通、岸田靖子、中西明美の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成12年8月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－飯塚直世、岸田、図面トレース－市森、樋口、本書の執筆・写真撮影及び編集－樋口が担当した。
1. 現地調査においては、(財)東大阪市文化財協会の松田順一郎氏にご指導・ご教示を賜った。また、その後の内業整理の段階では、松田氏に加え、同協会の別所秀高氏にも貴重なご意見を頂戴した。貝化石については、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏、(財)大阪市文化財協会の池田 研氏に鑑定していただいた。記して厚く感謝の意を表す。

本　文　目　次

1.はじめ	33
2.調査概要	37
1)調査方法と経過	37
2)基本層序	38
3)検出遺構と出土遺物	43
4)第27層包含の貝化石について	45
3.まとめ	46

IV 大竹西遺跡第4次調査(OTN99-4)

1. はじめに

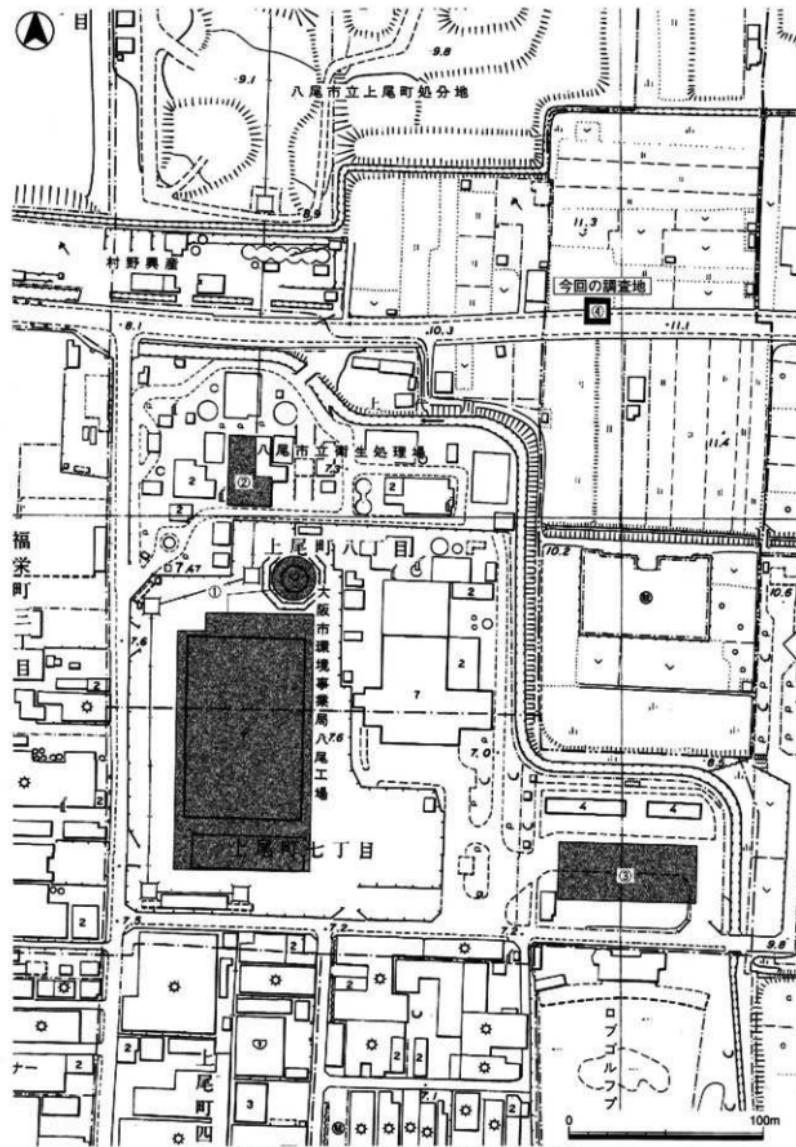
大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす冲積作用によって形成されている。今回報告する大竹西遺跡は、この大平野の東部を両する東大阪市の南東部、八尾市の北東部に位置する。現在の行政区画では、東大阪市池島町5丁目・八尾市楽音寺2丁目・大竹2・5丁目・西高安町3・4丁目・上尾町7・8丁目一帯の東西約1300m・南北約300mがその範囲と推定されている。

当遺跡は、地形的には、生駒山地西麓部を東から西に向かって流れ落ちる小河川により形成された扇状地が展開している東部地区と、南から北へと流れる旧大和川の本流の一つである玉串川がもたらした冲積平野が広がっている西部地区に大別される。両者の境界線は、国道170号大阪外環状線付近に求めることができる。なお、大阪東南部土地利用図(昭和58年3月 国土地理院発行 S=1/25000)によると、大竹西遺跡は、緩扇状地と盛土地に分類されるが、概ね東部地区が前者に、西部地区が後者に包括される。

当遺跡の周辺には多くの遺跡が存在する。東には、古墳時代中期前半に造営された中・北河内最大の前方後円墳である心合寺山古墳(墳丘長約160m)が所在する。当古墳では、近年、史跡整備に伴う発掘調査が断続的に行われてきた。特筆すべき成果としては、当古墳が三段築成であったことや、前方部で発見された埋葬施設を伴う方形壇状遺構の存在、後円部で発見された三基の粘土櫛から成る埋葬施設の存在、くびれ部付近に位置する造り出しに置かれていた家形埴輪の存在などが挙げられる。特に、後円部における三基の粘土櫛の内、西櫛から出土した夔鳳鏡をはじめとする豊富な副葬品には目を見張るものがある。また、造り出しで見つかった家形埴輪は、古代の水の祭祀場を忠実に表現しているものと思われ、当時の水祭祀を考え上で貴重な成果といえる。この心合寺山古墳からさらに東の生駒山地尾根上には、古墳時代後期に築造された高安古墳群(180基以上)が展開している。一方、北西に目を向けると、縄文時代晩期～近世にかけての複合遺跡として知られる池島・福万寺遺跡が広がる。この遺跡一帯は、当遺跡西部地区同様、北流する旧大和川が形成した冲積平野上に立地し、その豊富な水量と肥沃な土壤を利用して、弥生時代前期以来近世に至るまで、脈脈と水田経営が行われてきたことが判明している。

さて、大竹西遺跡が考古学史にはじめてその名を連ねるのは、(財)八尾市文化財調査研究会が実施した第1次調査までまたなければならない。その後、今まで3次にわたる調査が行われ、調査件数こそ少ないが、マスコミ等を賑わすような大きな成果をあげてきた。以下、調査の経緯について概説していく。

当地域は、東部の大竹地区では中世起源の東高野街道を継承する旧国道170号線が南北に貫いているため、沿道を中心に旧村が形成されているが、それ以外の西高安町・上尾町地区は、近年まで中世が起源と考えられる条里制に基づく整然と区画された田園地帯が広がっている状況であった。ところが、昭和45年に八尾市東部を南北に貫く大阪外環状道路が開通してからは、当地域周辺の景観は目まぐるしく変化した。大阪府東部を南北に結ぶ交通・物流の要衝として



第1図 大竹西遺跡調査地位置図(S-1/2500)

表1 大竹西遺跡調査地一覧表（地図番号は第1図に対応）

地図番号	調査名	調査地番	調査原因	調査面積 (m ²)	調査期間	調査機関	備考	文献
①	OTN90-1	上尾町7丁目	大阪市環境事業局八尾工場立替工事	8500	平成2年6月1日～平成3年7月12日	八文研		A・B
②	OTN91-2	上尾町8丁目	衛生処理場更新工事	671	平成3年12月2日～平成4年1月31日	八文研		C
③	OTN96-3	上尾町7丁目	屋内プール建設	2000	平成8年8月19日～平成9年3月31日	八文研		D
④	OTN99-4	東大阪市池島5丁目・上尾町9丁目・西高安町4丁目	公共下水道工事	91.52	平成11年11月4日～12月21日	八文研	今回の調査地	本報告

文献A 高萩千秋 1992「1.大竹西遺跡第1次調査(OTN90-1)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

文献B 高萩千秋 1991「20.大竹西遺跡第1次調査(OTN90-1)」『平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

文献C 高萩千秋 1992「X 大竹西遺跡第2次調査(OTN91-2)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告34

文献D 西村公助・樋口 薫1997「7. 大竹西遺跡第3次調査(OTN96-3)」『平成8年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

注目を集めた当道路は、道路沿いを中心とする当地域一帯を激しい開発の波の中に飲み込んでいったのである。

このような状況下、昭和63年、大阪市環境事業局から上尾町7丁目地内に所在する八尾工場代替の事業計画が出された。その旨を受けた八尾市教育委員会は、当該地にも未だ知られざる遺跡が存在する可能性があるとして、確認調査の実施が必要と判断した。そこで、平成元年に八尾市教育委員会による試掘調査が実施され、その結果、縄文時代・弥生時代・古墳時代前期の遺物包含層が確認された(岡田1990)。この試掘調査の結果を受けた当調査研究会は、平成2年6月～平成4年7月にかけて、工場部分と煙突部分の約8500m²について発掘調査を実施した(OTN90-1)。平成3年12月～平成4年1月には、第1次調査地に北接する上尾町8丁目地内において衛生処理場更新工事に伴う発掘調査(OTN91-2)が当調査研究会により行われた。さらに、平成8年8月～平成9年3月には、第1次調査地の東側約130mの地点において当調査研究会が屋内プール建設に伴う発掘調査を実施した(OTN96-3)。これらの調査の結果、上尾町一帯には、縄文時代晚期～近世にかけての複合遺跡が存在することが判明したのである。次にこれらの既往の成果を踏まえながら、時代順に当遺跡の変遷を概説していく。

縄文時代晚期 第1次調査地と第3次調査地において遺物の出土が認められるのみで、遺構は検出されていない。第3次調査地では、弥生時代前期～中期にかけて機能していた埋没河川の中から出土しているが、おそらく上流から運ばれてきたものであろう。

弥生時代前期 この地域における最も古い遺構は、この時期に築かれる。第1次調査地では、調査区の東部において、木棺墓を3基、土坑墓を2基、土器甕棺墓を1基検出しており、墓域を形成していたと考えられる。一方、第3次調査地では、南西～北東方向に流向をもつ河川の存在を確認している。したがって、第1次調査地の墓域は、第3次調査区まで広がらないことは確実である。なお、第2次調査区では、当該期に相当する地層は確認されているが、遺構は検出して

いない。したがって、当区がどのように土地利用されていたのかは不明である。

弥生時代中期 中期前半では、第1次調査地において、水田19筆を検出したほか、第2次調査地でも水田の存在が確認されており、前代とは打って変わって生産域として利用されていたようである。中期後半も引き続き生産域として土地利用が行われたようだ。一方、第3次調査地では、前期同様河川が北流しており、生産域の広がりが規制されていることが判明している。なお第1次調査区では、河川内に構築された堰や水田に取水するための水路なども検出されており、稻作土木技術を知る上で貴重な成果といえる。

弥生時代後期 第1次調査地では、当該期～奈良時代にかけて遺構が同一面で検出されていることからも明らかのように、非常に安定した環境下にあったことが推測される。この時期の遺構としては、井戸や土坑などが挙げられるが、それらの遺構が居住域を形成するものなのかは明らかでない。第2次調査地では、この時期に対応する地層は確認しているが、遺構は検出していない。第3次調査地では、後期初頭の段階において、前代に機能していた河川がその規模を縮小させながら流芯を調査区の東部に移し、かつて河川の本流を成していた西部には、砂礫優勢の堆積物で充填された自然堤防が形成される。その上面には夥しい数の遺構が検出され、その内の幾つかの遺構からは、完形に近い土器が数個出土している。しかしながら、これだけでもって遺構群の性格を推し量ることは困難を極める。一方、東部では後期初頭の河川、後期前半に比定される3条の溝、後期後半の溝を確認しているほか、後期初頭の土坑も一基検出している。この土坑からは、国内初例となる鋳造鉄剣が埋置されていたが、この成果は、当遺跡に当時としては非常に貴重であった鉄剣を持つことができた有力者と、その有力者を輩出しうる集落の存在を彷彿させる資料である。

古墳時代前期 第1次調査地では、掘立柱建物1棟のほか、井戸8基など居住域の中核を形成していたと思われる遺構群を検出している。さらに特筆すべき成果として、この時期の土坑から布留式土器とともに瑪瑙製の鏡形石製品が出土したことが挙げられる。弥生時代後期初頭の鋳造鉄剣同様、当遺跡の集落の性格を知る上で貴重な資料である。第2次調査地や第3次調査地では、当該期の遺構は検出されておらず、したがって、第1調査区検出の居住域は北側や東側に広がらないことは確実である。

古墳時代中期 第3次調査地の東部で、無数の遺構群を検出した。遺構群は土坑状のものや溝状のものばかりで、しかも浅く、埋土も單一層のものがほとんどである。遺物も全く伴っておらず、遺構の性格は不明である。その他調査区の中部では、落ち込みが確認されているが、この中には杭が列を成して打設されており、橋状の構築物の存在を思わせる。

奈良時代 第1次調査地で落ち込みと小穴を検出したのみである。

平安時代～鎌倉時代 第1次調査地では、鎌倉時代の土坑や動溝を検出している。また第2次調査区では溝を数条検出しているが、いずれも生産域に伴うものであろう。第3次調査地では平安時代末～鎌倉時代にかけての水田を検出しており、当該期の当地が生産域に変貌を遂げたのは確実である。

室町時代 第1次調査地で水田を25筆、第2次調査地で水田を2筆検出しており、前代に引き続き生産域として利用されていたことがわかる。

2. 調査概要

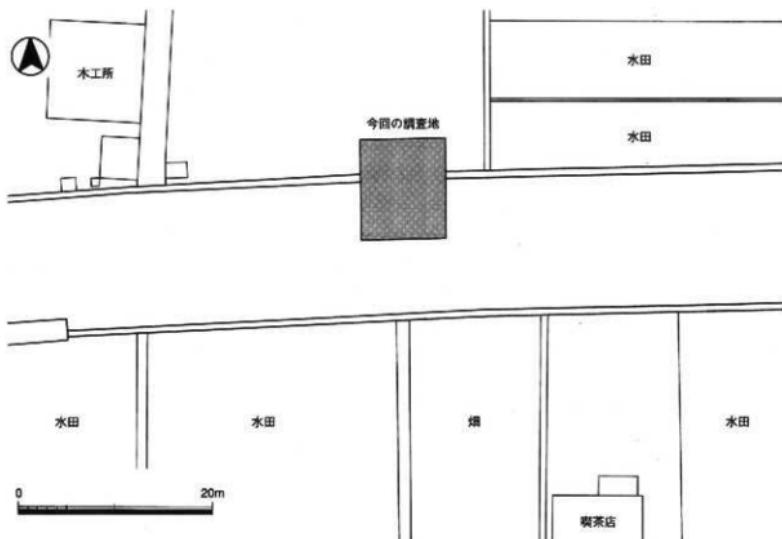
1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事に伴うもので、当調査研究会が大竹西遺跡内で実施する第4次調査にある。調査区の一箇所である。調査区の一部は東大阪市域に含まれる。調査区の平面形状は、鋼矢板で囲まれた東西約9m、南北約10mの南北に長い長方形を呈する（第2図）。調査面積は約91.52m²である。本調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（T.P.+11.24m前後）下5.24m前後までを大型重機による機械掘削とし、以下現地表下14.24m（T.P.-3.0m）前後までの9.0mについては小型重機により慎重に掘削を行った。調査に際しては、調査区の北、および東側に壁面を残しながら掘り下げていき、地層観察を踏まえて、平面的な調査を試み、遺構・遺物の検出に努めた。調査期間は、平成11年11月4日～12月21日（実働17日）である。

ところで、検出遺構や出土遺物の相対的な新旧関係を明確にするために、あるいは当時の古環境復元のために、さらには、同時期における遺構面や生活面の広がりを把握するために、地層観察は有効な手段である。したがって本調査では、中河内地域の地層を研究しておられる（財）東大阪市文化財協会の松田順一郎氏にご指導・ご教授を賜り、調査に反映させることを試みた。

調査の結果、弥生時代後期に比定される地層や、弥生時代前期～中期にかけて機能していた埋没河川をはじめ、縄文時代後期～晩期に相当するとと思われる水成層を確認することができた。

出土遺物は遺物収納用コンテナ（縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m）1箱である。



第2図 調査位置図(S=1/500)

2) 基本層序

本調査地の發掘調査開始直前の状況は、ほぼ平らに整地が行われ、既存の構築物等はまったく存在していなかった。現地表面の標高は約11.24mを測る。

調査の結果、40にもよぶ地層を確認することができた。しかしながら、調査面積が狭いことや、堆積構造が複雑を極めたことなどが重なり、普遍的に存在するであろう地層を抽出することは困難を極めた。したがって本報告では、調査区の東側に残した地層観察用壁面の一部分を抜粋し基本層序とした（第3図）。基本層序は34層である。以下、それらについて概説していくと、まず、客土・盛土層は現地表下5.24m付近にまで達していることが判明した。以下、現地表下5.5m（T.P.+5.7m）付近において、酸化鉄分の沈着が著しい粘土質シルト～シルト層を検出したが、これらの地層の上面には人為的に構築されたと思われる造構のラインが認められる。その下層には層厚40cmを測る流水層が観察される。埋没河川であろう。現地表下6.2～6.6m（T.P.+4.6～5.5m）前後には、弥生時代後期に比定される土器片を含むシルト質粘土～粘土質シルト優勢層が3層ほど存在し、上面において造構が構築された地層も認められる。以下、現地表下7.0～9.9m（T.P.+1.3～4.2m）の層厚2.9mについては、砂礫優勢の流水堆積層が存在する。この地層には流水堆積構造が顕著に残っており、それらを観察することによって、概ね南東～北西に向かってもつ河川が存在したことが断定できよう。この流水層の下層には、粘土を主体とした湿地性の堆積層が続く。これらの地層には、流水時に形成されるようなラミナ構造は顕著に認められず、しかも、メタンガスが発生するような地層が存在することなどから勘案すると、排水不良の後背湿地的な環境を復元することが可能である。なお、いわゆる黒色粘土帯や暗色粘土帯と呼称されているような黒色を呈した粘土層が2層確認されており、既往の成果と照らし合わせる時に鍵を握りそうである。

一方現地表下11.5m（T.P.-0.3m）付近からは、巻き貝や二枚貝などの動物遺体が検出され、本調査区が限りなく海浜部に近い地点に位置していた時代があったことを可視的に示す貴重な資料を提供している。この貝化石を主体とする動物遺体を含む地層は、現地表下13.2m（T.P.-2.0m）前後でなくなり、以下は中粒砂を主体とした淘汰不良の地層が続く。

第0層 客土・埋土で充填された地層である。産業廃棄物を含む非常に汚い地層である。本層は、さらに細かく4層に分層が可能であった。上層から列記する。

第0-A層・N4/灰色～7.5Y4/1暗緑灰色極粗粒砂～細礫混シルト質粘土。産業廃棄物で構成された客土層である。油分を多量に含む非常に汚い地層である。

第0-B層・5Y3/1オリーブ黒色粘土。アルミニウムやガラスなどの産業廃棄物で構成された客土である。

第0-C層・2.5Y3/1黒褐色シルト質粘土。7.5Y5/2灰オリーブ色シルト質粘土のプロックや炭化物、中疊などを多く含む客土である。

第0-D層・10Y4/1灰色中疊混粘土～シルト質粘土。客土層である。若干グライ化している。

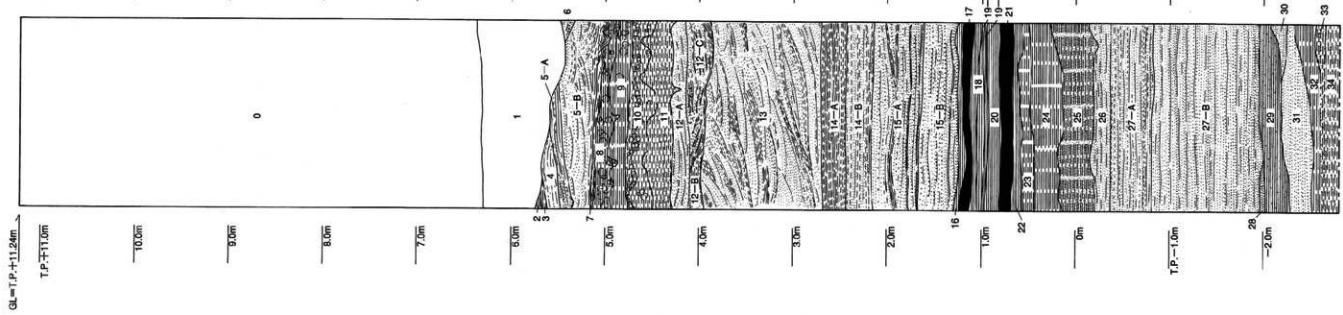
第1層 5GY4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂～細礫混シルト質粘土。グライ化層である。層内に散在する細礫からは自然堆積層とは考えられない。したがって、本層も客土の可能性が高い。ただし、第0層に含まれるような産業廃棄物が混在しないため、客土の性格は異なるも

のと思われる。

- 第2層** 7.5Y5/1灰色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト。酸化鉄分斑を多量に含む。本層上では、人為的に形成されたと考えられる窪みが認められる。
- 第3層** 10Y5/1灰色極粗粒砂～細礫混シルト質粘土～シルト。酸化鉄分斑を多量に含む。第3層よりも礫質に富む地層である。
- 第4層** 7.5Y5/1灰色シルト質粘土。酸化鉄分斑を多量に含む。水平なラミナ構造をもつ流水堆積層である。
- 第5層** 流水堆積層である。ラミナ構造や粒度組成などから、さらに2層に細分することができる。
第5-A層・10Y5/1灰色粘土質シルト～中礫。流水堆積層である。北壁の東方や東壁の北方では、マンガンの沈着が顕著で、一部ではマンガン塊も認められるほどである。この付近は、中礫が優勢であるが、南に向かうにつれて細粒化している。
- 第5-B層・5Y6/1灰色～10YR5/6黄褐色シルト～細礫。トラフ型斜行ラミナ構造が認められる。流向は南東～北西方向であるが、限りなく東～西方向に近いように感じられる。酸化鉄分もラミナに認められる。粒度組成は上方に向かうにつれて粗粒化の傾向にある。
- 第6層** 5Y6/2灰オリーブ色極粗粒砂～中礫。流水堆積層である。上方や北方に向かうにつれて細粒化する傾向にある。第5層と同様の流水過程で形成されたものかは不明であったためここでは第6層とした。
- 第7層** 10YR3/3暗褐色粘土質シルト。マンガン塊を多く含む。マンガンが沈着し、塊になっている状態の地層である。
- 第8層** 7.5Y4/1灰色シルト質粘土。シルトがブロック状に混在する汚い地層である。土器片を極少量含む。
- 第9層** 5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土。北方ほど粘性が強い。南方ではシルト質が優勢になり、一部5Y4/1灰色シルトのブロックや植物遺体、炭化物を含む。土器も認められる。おそらく土壤化層であろう。調査区内に普遍的に存在する地層である。
- 第10層** 2.5GY5/1オリーブ灰色～5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト。上方では、5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土～10Y4/1灰色粘土質シルトのブロックが多く認められる。ブロックの大きさは1cmほどで、丸みをもつ形状である。生物擾乱の可能性も考えられる。土器片や植物遺体も極少量であるが認められる。また、本層上面より構築されたと考えられる遺構のラインも確認できた。この部分には土器片が多く含まれる。
- 第11層** 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト～細粒砂。流水堆積層である。5Y4/1灰色粘土質シルトが縦模状に散在する。
- 第12層** 流水堆積層である。ラミナ構造や粒度組成などの相違によりさらに3層に細分できた。
第12-A層・2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂。北壁の東方では東から西に落ちるラミナも認められる。粒度組成は西方に向かうにつれて極粗粒砂～細礫が優勢になる。
第12-B層・2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト。ラミナが顕著に認められる流水堆積層である。
第12-C層・5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト。粘性に富むシルトで形成されたラミ

ナ層である。ラミナは不明瞭で、上方ではブロック状に粘土質シルトが混在しているところも認められる。

- 第13層 5GY5/1オリーブ灰色シルト～細粒砂。ラミナが顕著に認められる流水堆積層である。北壁を観察する限り、東方では東から西に傾くラミナが顕著であるが、西に向かうにつれてそのラミナは不明瞭になる。粒度組成も西に向かうにつれて粗くなる傾向にある。
- 第14層 第14-A層・5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルト。流水堆積層であるが、ラミナ構造は明瞭でない。植物の根の痕跡と思われる10Y4/1灰色粘土質シルトが染み状に入る。これらの染みは横方向に伸びるものが多いのが特徴で、この原因として地震による地すべりなどが考えられる。本層は北東方向にさらに広がっているようだ。本調査区の南西方向に存在すると思われる流路（河川）により形成された自然堤防に相当するのか。第14-B層・2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～細粒砂。ラミナ構造が顕著に認められる流水堆積層である。東壁の南方ではラミナ構造が北から西に傾いている。
- 第15層 第15-A層・5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂～細礫。植物遺体がラミナ状に何層かに入る。ここで観察された植物遺体は、布が張り付くようにして堆積していることから、砂礫が運ばれてくるような激しい流れの時期と、限りなく流速が0に近い時期を繰り返していたことが想定される。
第15-B層・5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂～細礫。植物遺体がラミナ状に入る。
- 第16層 2.5Y4/1黄灰色粘土。植物遺体がラミナ状に入る。本層上面は上層の流水層に削り取られている。後背湿地のような閉塞的な水浸かりの環境下で形成された地層である。
- 第17層 5Y3/1オリーブ黒色粘土。植物遺体を非常に多く含む地層である。植物遺体は横方向に倒れている。なお、本層下面において変形構造が確認されたが、おそらく本層が水浸かりの状態時に発生した地震によるものと考えられる。また、本層からは微量であるがメタンガスが発生しているらしく、したがって泥炭に近い地層の可能性も秘めている。
- 第18層 5Y4/1灰色粘土。植物遺体を極少量含む。非常に細かい（径1mm程度）炭化物を含む。上方では、生物擾乱によるものと思われる径5mm程度の丸みをもつブロックが確認できる。このブロックが上層との境を不明瞭にさせている。また、地震に伴うと思われる変形構造も認められる。
- 第19層 第19-A層・10Y5/1灰色粘土。植物遺体や炭化物を極少量含む。地震による横ズレのような痕跡が見られる。
第19-B層・10Y4/1灰色粘土。普遍的には存在しない。地震による横ズレのような痕跡が見られる。
- 第20層 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土。植物の根の痕跡と思われる10Y4/1灰色粘土が染み状に入る。地震の影響か、上下から圧力を受けているらしい。
- 第21層 5Y3/1オリーブ黒色粘土。非常に細かい（径1mm程度）炭化物を含む。湿地帯のような閉塞的な水浸かりの環境下で形成された地層である。
- 第22層 10Y5/2オリーブ灰色粘土。炭化物をラミナ状に含む。植物遺体を含む。生物擾乱が起源と思われる5Y3/1オリーブ黒色粘土のブロック（径5～10mm程度で丸みをもつ）が多く認められる。このため第21層と本層との境は不明瞭である。上面では乾痕のような凹凸も



第3図 基本断面模式図 (S=1/40)

若干認められる。

- 第23層 5Y4/1灰色シルト混粘土質シルト。植物遺体を含む。
- 第24層 7.5Y4/1灰色シルト質粘土。植物遺体を含む。生物擾乱による変形構造も認められ、その部分には、5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～極粗粒砂がラミナ状に入る。5Y3/1オリーブ黒色粘土のブロック（長辺約8cm・短辺約3cmで梢円形を呈する）も観察できる。これも生物擾乱により形成されたものであろう。
- 第25層 10Y4/1灰色粘土質シルト～細粒砂。上方において、幅約1cm・長さ約10cmほどの粘土を充填したブロックが観察できた。生物擾乱により形成されたものであろう。
- 第26層 7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂。上方に比べ下方では細粒砂が優勢で、炭化物や植物遺体のラミナも顕著に認められる。また、下方にのみ貝の化石も極少量見られる。
- 第27層 貝などの動物遺体を含む量により2層に分層が可能であった。
第27-A層・10Y4/1灰色シルト～極粗粒砂。植物遺体や炭化物を含む。貝の化石も含まれるが、上方では散在し、下方では明瞭とまではいかないまでも葉理状に認められる。非常に細かいラミナ構造をもつ堆積層である。河川などの流水作用により形成されたラミナ構造と考えるよりは、むしろ干涸などで起こる潮の干満により形成されたものであろう。
- 第27-B層・10Y4/1灰色極細粒砂～極粗粒砂。植物遺体や炭化物を含む。貝などの動物遺体を多く含む。貝は、第27-A層に比べ明瞭に葉理を成している。
- 第28層 5Y4/1灰色粗粒砂～細礫。北壁では東方に向かうにつれて層厚は減少、東壁では南方に向かうにつれて層厚が減少している。
- 第29層 2.5Y3/1黒褐色粘土。7.5Y5/2灰オリーブ色粘土～10Y6/1灰色シルト～細粒砂～中礫などがブロック状に混在している。生物擾乱によるものと思われる。
- 第30層 5Y4/1灰色粗粒砂～細礫。北壁では東方に向かうにつれて層厚は減少、東壁では南方に向かうにつれて層厚が減少している。
- 第31層 5Y3/1オリーブ黒色中粒砂～細礫。5Y2/1黒色粘土質シルト～中粒砂のブロック（大きさは2cm大で丸みをもつ）を含む。
- 第32層 7.5Y4/1灰色シルト質粘土～シルト。7.5Y3/1オリーブ黒色中礫混シルト質粘土～シルトのブロックを含む。
- 第33層 10Y4/2オリーブ灰色シルト～極粗粒砂。5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトのブロック（縦約5cm・横約1cm）を含む。生物擾乱である。
- 第34層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～中粒砂。10Y4/1灰色シルト質粘土～シルトのブロックあり。生物擾乱である。

3) 検出遺構と出土遺物

①検出遺構

平面的に遺構を検出することはできなかった。しかしながら、地層断面では概ね二つの時期の遺構と思われるラインを確認することができた。一つは第2層上面に構築されるもので、もうひとつは第10層上面に構築されるものである。前者からは遺物が出土していないため、遺構の性格

や時期的なことは全く不明である。後者からは弥生時代後期に比定される遺物（1・2）が出土した。

②出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナに換算して1箱と極めて少ない。この内のほとんどが弥生時代後期の土器である。以下では、検出遺構や出土層位が明確な遺物を中心にその概略を記す。また、調査の都合上、遺物の出土層位は確定できなかったが、その取り上げたレベルから概ね所属していたであろう層位を追求することを試み、それらのうち実測可能なものはすべて抽出し、その特徴を述べる。なお、以下に記す土器は、すべて胎土中に角閃石を含み、色調も10YR5/2灰黄褐色を呈することから、生駒西麓産であると推測される。

遺構内出土遺物

第10層上面構築遺構内出土遺物（1・2）

1は壺の口縁部である。口縁端部は垂下し、端面には、不明瞭ながらも2条の沈線を施す。2は鉢の底部である。底部はつまみ出すことによって高台ふうの上げ底になっている。内面はナデ調整を行う。いずれも細片のため、明確な時期は限定できないが、概ね弥生時代後期に収まるであろう。

地層内出土遺物

第9層内出土遺物（3）

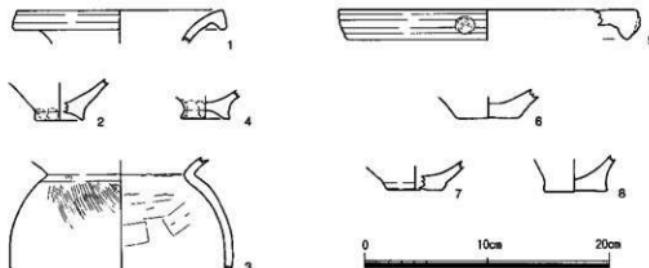
壺の頸部～体部上半部である。調整は、外面にハケナデを、内面にヘラケズリを行う。外面には煤が付着しており、二次焼成を受けたことが分かる。内面のヘラケズリは古墳時代初頭（庄内式期）に多く認められる特徴であるが、その時期の壺と比較すると本例は器壁が厚いことから、さらに時期は遡る可能性が高い。弥生時代後期初頭に比定される資料の中には、本例と類似した調整を有する壺が存在することから時期的にはその辺りまで遡る可能性も否定できない。

第13層内出土遺物（4）

鉢の底部である。底部の成形は指によるつまみ出しが行われ、あげ底を成している。底面には意識的に面が形成されている。

T.P.+4.5～5.0m内出土遺物（5・6）

概ね第8層～第10層に包含されていたものと思われる。5は垂下口縁の壺もしくは器台の口縁



第4図 出土遺物実測図(S=1/4)

部である。摩滅が著しいが観察の結果、口縁端面には4条の沈線を施した後、竹管円形浮文を貼り付けている。6は壺または壺の底部である。内外面ともにナデ調整を行う。弥生時代後期に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

T.P. +2.4~4.6m内出土遺物 (7・8)

概ね第10層~第14層に包含されていたものと思われる。両者とも、壺あるいは壺の底部と思われるが、7については、胴部が大きく開くことから壺の可能性が高い。7の調整は、外面がナデ調整であるが、内面は板状の工具によるナデが施されている。8は内外面ともにナデ調整が行われる。弥生時代後期の所産か。

4) 第27層包含の貝化石について

第27層には、比較的保存状態が良好な貝化石が多量に包含されていた。この第27層は、断面観察の結果、自然状態で形成された地層であることが確認されたが、この成果は、本層が貝化石を包含し得る環境下にあったことを示す可視的な資料として貴重なものである。以下では第27層に含まれる貝の形態的分類を行い、さらに、各貝の生態的特徴について概説を行う。なお、貝化石については、大阪市立自然史博物館の石井久夫氏、(財)大阪市文化財協会の池田 研氏に鑑定していただき、両氏の見解に従った。貝の生態的特徴については、両氏に貴重なご意見を頂戴し、それを参考にしつつ、保育社発行の『標準原色図鑑全集3 貝』(波部忠重・小菅貞男共著 1967年)も参照した。

貝化石は巻き貝5種類(アラムシロガイ・カワアイ・ヘナタリ・ウミニナ・イボウミニナ)、二枚貝5種類(マガキ・イチョウシラトリガイ・シオフキガイ・オキシジミガイ・ハマグリ)の計10種類が認められる。各貝ともに、内湾の砂海に分布するもので、さらに地形的に細分するならば、より岸部に近いところに棲息する貝群であるといえる。また、マルスダレガイ科のオキシジミガイやハマグリは汽水域に分布しやすいことから、本調査地周辺が、一時期、河口のような淡水が流れ込む環境下にあった可能性も考えられる。

表2 第27層包含貝化石一覧表

貝の種類		写真番号	貝の棲息地とその環境
巻き貝 (腹足綱)	オリエヨフバイ科	アラムシロガイ	① 北海道南部以南。潮間帯の砂疊底に棲息する。
	ウミニナ科	カワアイ	房総半島以南。汽水域の潮間帯の砂泥底やアシモ帶に棲息する。
		ヘナタリ	③ 本州以南。潮間帯の砂泥底に棲息する。
		ウミニナ	④ 本州以南。潮間帯の砂や小石のところに棲息する。
		イボウミニナ	⑤ 北海道南部以南。潮間帯に分布し、砂泥底に棲息する。
二枚貝 (斧足綱)	イタボガキ科	マガキ	⑥ 樺太以南・中国大陸・東南アジアの内湾などの比較的塩分の低い潮間帯の岩礁に棲息する。
	ニッコウガイ科	イチョウシラトリガイ	⑦ 本州中部以南。浅海の砂泥底に棲息する。
	バカガイ科	シオフキガイ	⑧ 房総半島以南。内湾の潮間帯の砂泥底に棲息する。
	マルスダレガイ科	オキシジミガイ ハマグリ	⑨ 房総半島以南。内湾奥部の潮間帯の泥底に棲息する。 ⑩ 北海道南部以南。内湾の潮間帯や浅海の砂泥底に棲息する。

3.まとめ

まず、第1の成果として、弥生時代後期に比定される遺構の存在が確認されたことが挙げられる。本調査区の南側約270mに位置する第3次調査地では、弥生時代後期初頭の鍛造鉄剣を埋置した土坑を検出したほか、後期前半や後期後半に比定される溝の存在が確認されており、この時期の当地一帯が安定した生活環境にあったことが窺われる。今回の調査において同時期の遺構が検出されたことにより、集落を形成しうる環境がさらに北方にまで及んでいたことが明らかになったと言える。ただし、本調査区がどのような性格の地域（例えば居住域や墓域、生産域といった区分）であったのかは、これだけの調査で言及することは危険である。今後の調査に期待したい。一方、この弥生時代後期の遺構よりも相対的に新しい遺構については、第3次調査地で検出された平安時代末～鎌倉時代にかけての水田とレベル的にはほぼ一致し、しかも酸化鉄斑を多量に含む粘土質シルトが基盤層となっていることなどから考慮すれば、第2層の年代もこの時期に持っていくことが出来そうである。これら以外にも、弥生時代後期に相当する第10層を鍵層に、既往の調査で検出された地層などと照らし合わせながら相対年代を推し量ると、以下のことが言えるのではないか。つまり、第10層の下層に存在する第12層～第15層は、第3次調査地でも検出された弥生時代前期～中期に形成された河川堆積物に相当する。また、この河川堆積物の下層で認められる、第16層～第24層といった粘土優勢層は、河内湖の時期に堆積した湿地性の堆積物と考えられる（梶山・市原1972）。一方、第27層からは、巻き貝や二枚貝などの貝化石が包含されていたが、その生態的特徴から、本調査地付近が一時期、限りなく岸辺に近い内湾最奥部という環境下にあった可能性が高くなかった。つまり、第27層が河内湖の時期に相当し、したがって、第24層と第27層に挟まれた第25層・第26層は河内湖の時期に形成された地層と推測することもできまい。以上が本調査における成果である。

参考文献

- ・岡田清一 1990 「6. 大竹西遺跡(89-397)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅱ』 八尾市文化財調査報告21 平成元年度公共事業
- ・高萩千秋 1991「20. 大竹西遺跡第1次調査(OTN90-1)」「平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」
- ・高萩千秋 1992「1. 大竹西遺跡第1次調査(OTN90-1)」「平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」
- ・高萩千秋 1992「X 大竹西遺跡第2次調査(OTN91-2)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」 (財)八尾市文化財調査研究会報告34
- ・西村公助・樋口 眞 1997「7. 大竹西遺跡第3次調査(OTN96-3)」「平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」
- ・波部忠重・小菅貞男 1967「貝」「標準原色図鑑全集3」
- ・梶山彦太郎・市原 実 1972「大阪平野の発達史—C14年代データからみた」「地質学論集7」



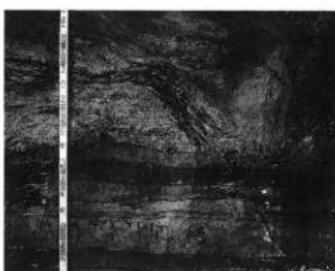
調査地周辺状況（北西から）



東壁地層〈水糸=T.P.+6.0m〉（南西から）



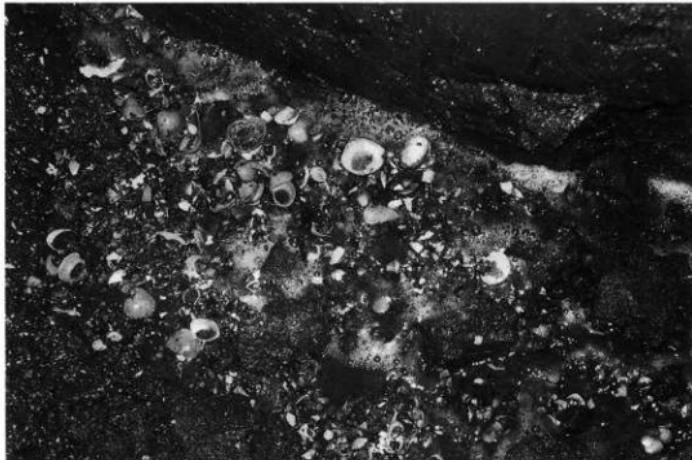
東壁地層〈水糸=T.P.+4.8m〉（北西から）



東壁地層〈T.P.+1.0~2.0m付近〉



東壁地層〈左は第17層を、右は第21層を指す〉



第27層内貝化石出土状況（南西から）



東壁地層（水糸=T.P. -2.0m：第27層
(貝化石包含層)と第29層の境界を指す）



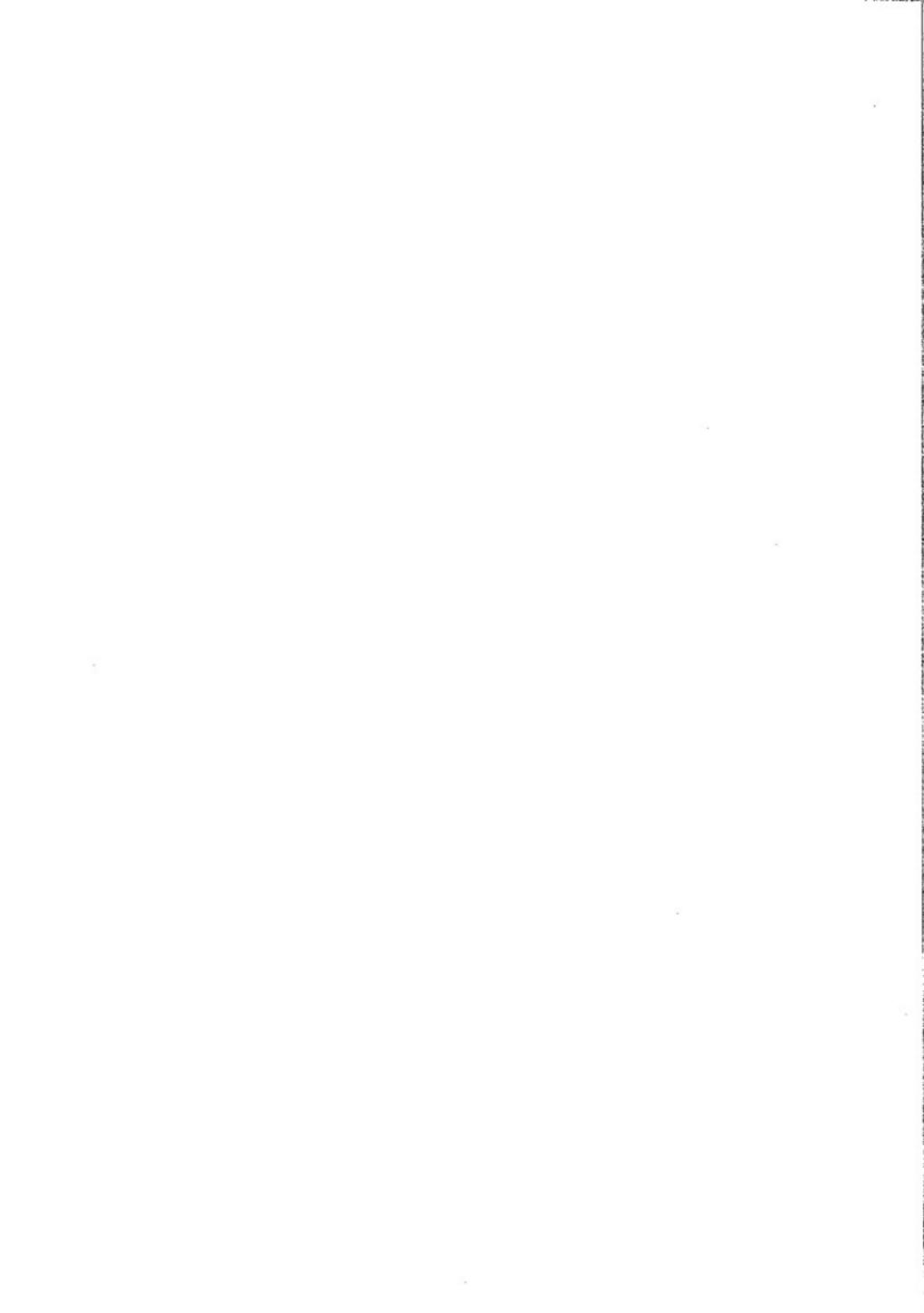
地層内出土土器



第27層包含貝化石 巻き貝 ($S = 1/1$)



第27層包含貝化石 二枚貝 ($S = 1/2$)



著　　者

日本古跡・古文書調査研究会（主査：山本信義）著
（監修：小西千秋、佐野義典、高橋義之、山本信義）

V 亀井遺跡第9次調査（KM99-9）

著者：日本古跡・古文書調査研究会（主査：山本信義）著
（監修：小西千秋、佐野義典、高橋義之、山本信義）
著者：日本古跡・古文書調査研究会（主査：山本信義）著
（監修：小西千秋、佐野義典、高橋義之、山本信義）

大　　目　　次

序文
第1章　調査概要
第2章　調査方法
第3章　調査結果
第4章　考察
参考文献

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市亀井町4丁目地内で行った、公共下水道工事(平成10年度－第211工区)に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する亀井遺跡第9次調査(KM99-9)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第258号 平成11年8月11日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年12月6日～20日(実働10日間)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、約33.52m²を測る。
1. 現地調査および内業整理には、飯塚直世・小田真也・加茂靖通・岸田靖子・中西明美・西岡千恵子・宮崎寛子・山口拓也・横山妙子が参加した。

本　文　目　次

1.はじめに.....	51
2.調査概要.....	51
1) 調査の方法と経過.....	51
2) 検出遺構と出土遺物.....	52
3.まとめ.....	56

V 亀井遺跡第9次調査(KM99-9)

1. はじめに

亀井遺跡は、八尾市南西部の亀井町1～4丁目、南亀井町1～5丁目一帯に所在し、旧大和川の支流である長瀬川の右岸の沖積地に位置する。周辺には東に跡部遺跡・西に竹渕遺跡・北に久宝寺遺跡・大阪市加美遺跡があり、南側には大阪市長原遺跡・城山遺跡などがある。

当遺跡は、昭和43(1968)年、平野川改修工事の際、多量の弥生土器が出土したことによって発見された遺跡である。それ以後、大阪府教育委員会による5回にわたる遺跡範囲確認調査が行われ、昭和44(1969)年、近畿自動車道予定地内では、(財)大阪文化財センターによる試掘調査が始まられた。その後、昭和53(1978)年からは長吉ポンプ場築造工事に伴う発掘調査、昭和55(1980)年からは近畿自動車道建設に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによって行われている。その結果、東西・南北500m以上の範囲をもつ複合遺跡であることが明らかにされている。

今回の調査地は、平安時代までの埋没河川(旧大和川の一支流である「古平野川」)上に営まれている亀井旧集落の北の縁辺部にあたり、南東100m地点に市教委89-041、200m地点にKM95-5・KM98-7、東80m地点にKM96-4、東から北東20～35m地点にKH90-5(久宝寺遺跡)がある。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(平成10年度－第211工区)に伴うもので、当研究会が亀井遺跡内で実施した9度目の調査(KM99-9)にあたる。

調査区は2箇所の立坑で、北側を1区、南側を2区と呼んだ。調査面積は、1区が10.8m²、2区が当初の予定では19.2m²であったが、22.72m²に変更された。

両調査区ともに現地表より0.7～1.2m程度までは、既設の水道管やガス管などの埋設時に掘削されていたため、それ以下について工事掘削終了時点までの掘削に立会い、調査を行った。調査期間は、1区が12月6日～9日(実働3日)、2区が12月10日～20日(実働7日)である。



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

2) 検出遺構と出土遺物

1区の概要

八尾市道竜華45号線に位置する調査区で、東西3.6m・南北2.8mの東西に長い長方形である。東20m地点にKH90-5(久宝寺遺跡)調査地がある。現地表面の標高はT.P.+8.4m前後を測る。地層観察用の畦は北側に残した。

層序

客土は西下がりとなっており、厚さは東部で0.7m、西部で1.1mを測る。中央部に水道管敷設に伴う南北方向の掘り込みが認められた。1区では、客土以下第101~第127層までの地層が認められた。

101層：青灰色砂質シルトと微砂の互層。層厚0.1~0.3m。

102層：灰~青灰色疊混砂質シルト。層厚0.2~0.4m。

103層：灰色砂質シルト。灰色粘土の細かいブロック混じる。層厚0.1~0.4m。

104層：灰色粘土。鉄分含む。層厚0.1~0.2m。

105層：灰色粘土と微砂の互層。層厚0.05~0.1m。

106層：灰~黄色粗砂・灰色微砂・灰色粘土質シルトの互層。層厚0.15~0.25m。

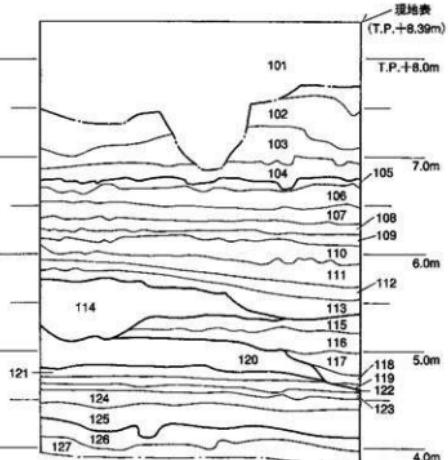
107層：暗灰色粘土質シルト。青灰色微砂少量含む。層厚0.15~0.2m。

108層：107層と植物遺体の互層。層厚0.1~0.15m。

109層：灰色粘土質シルトと灰色微砂の互層。層厚0.05~0.1m。

110層：灰色微砂。層厚0.2m前後。

111層：灰色微砂に灰褐色粘土質シルトの薄い互層。層厚0.1~0.25m。



101 青灰色砂質シルトと微砂の互層

102 灰~青灰色疊混砂質シルト

103 灰色砂質シルト、灰色粘土の細かいブロック混

104 灰色粘土

105 灰色粘土と微砂の互層

106 灰~黄色粗砂・灰色微砂・灰色粘土質シルトの互層

107 107層と植物遺体の互層

108 灰色粘土質シルトと灰色微砂の互層

109 灰色微砂

110 灰褐色粘土質シルトの薄い互層

111 灰褐色粘土質シルトと青灰色微砂の互層

112 青灰色粘土質シルトと植物遺体の互層

113 青灰色粘土と青灰色粘土質シルトの互層

114 白灰色粗砂、底に粘土のブロック

115 灰褐色粘土質シルト

116 灰褐色粘土質シルト

117 青灰色粘土質シルトと灰色微砂と植物遺体の互層

118 灰色微砂と青灰色粘土質シルトの互層

119 灰色粗砂

120 青灰色粘土質シルト

121 青灰色粘土質シルトと灰色微砂の薄い互層

122 灰褐色粘土・灰色微砂混

123 灰褐色粘土・灰色微砂混と植物遺体の互層

124 灰褐色粘土に微砂少量混

125 灰褐色粘土・植物遺体・微砂の互層

126 灰褐色粘土・植物遺体

127 青灰色粘土に青黑色粘土の細かいブロック

(上層河川)

(中層河川)

(下層河川)

(最下層河川)

第2図 1区北側壁面図(S=水平1/100・垂直1/50)

- 112層：灰褐色粘土質シルトと青灰色微砂の互層。層厚0.1~0.15m。
- 113層：青灰色微砂と植物遺体の互層。下ほど砂粒粗い。層厚0.1~0.25m。
- 114層：白灰色粗砂。底に粘土のブロック。含水量多い。層厚0~0.65m。
- 115層：暗灰褐色粘土質シルト。植物遺体多量に含む。層厚0~0.15m。
- 116層：暗青灰色粘土質シルト。植物遺体極少量含む。層厚0~0.25m。
- 117層：青灰色粘土質シルトと灰色微砂の互層に植物遺体極めて多量に含む。層厚0~0.25m。
- 118層：灰色微砂と青灰色粘土質シルトの互層に植物遺体少量含む。層厚0~0.15m。
- 119層：灰色粗砂。層厚0~0.05m。
- 120層：青灰色粘土質シルト。121層との境界に炭酸鉄か？ 層厚0~0.3m。
- 121層：青灰色粘土質シルトと灰色微砂の薄い互層。層厚0~0.1m。
- 122層：褐色粘土灰色微砂混。層厚0.05~0.1m。
- 123層：褐色粘土灰色微砂混と植物遺体の互層。層厚0.05~0.1m。
- 124層：褐色粘土に微砂少量混。層厚0.1~0.15m。
- 125層：褐色粘土・植物遺体・炭酸鉄・微砂少量混。層厚0.2~0.35m。
- 126層：褐色粘土・植物遺体。層厚0.05~0.2m。
- 127層：青灰色粘土に青黒色粘土の細かいブロック。炭酸鉄含む。層厚0.1~0.2m以上。上面の標高は、T.P. +4.0m前後を測る。

検出遺構と出土遺物

現地表下0.65m(T.P. +7.7m)の客土直下で、溝状遺構の痕跡を検出した。東側の壁に沿って、ほぼ南北方向に伸びる。構築面は削平されているため規模等は不明、深さ0.3m程度が遺存していた。内部堆積土は101層青灰色砂質シルトと微砂の互層である。

現地表下1.2m(T.P. +7.2m)の第103層中で、須恵器片1片が出土したが、時期・器種等詳細は不明である。

現地表下1.6m(T.P. +6.8m)以下の第105~119層・第121~125層が、埋没河川にあたる。前者の埋没河川は、上層(第105~113層)・中層(第114層)・下層(第115~119層)に分けることができる。上層(第105~113層)はおむね微砂を主体とする互層で、流れの激しいものとはいはず、流路方向も不明である。底の標高はT.P. +5.3mである。中層(第114層)は下部層を大きく抉り、水量も豊富であった。調査区内での流路方向は、やや東に振る南~北である。底の標高はT.P. +5.1mである。下層(第115~119層)は植物遺体を多量に含み、底に礫が堆積するもので、水量も極めて多いが、調査区北東隅のみでしか確認できていない。底の標高はT.P. +4.8mを測る。最下層(第121~125層)は再び粘土や微砂、植物遺体の互層で、上層河川と同様の堆積状況である。底の標高はT.P. +4.0mを測る。

2区の概要

1区から南40m地点に位置する調査区で東部は道路、西部は民地となっている。東西5.6m・南北5.2mの範囲で逆「L」字形を呈し、東部は東西2.4m・南北5.2mの長方形、西部は3.2m四方の正方形で、前者を東区・後者を西区と呼んで調査を行った。現地表面の標高は、東側がT.P. +8.5m前後、西側が8.7m前後を測る。

層序

客土は0.7~0.9mあり、西~北側が厚い。客土以下第201~227層までの地層が認められた。

201層：青灰色粘土に粗砂混。層厚0~0.35m。最高部の標高はT.P. +7.95mを測るが上面は削平され、耕作痕か、凹凸が激しい。

202層：明褐色~灰色微砂混粘土質シルト。層厚0.1~0.35m。

203層：灰色粘土。層厚0~0.2m。

204層：灰色礫混粘土質シルト~微砂。マンガン含む。層厚0~0.2m。南西部で厚みを増す。

205層：灰色粗砂に緑灰色粘土質シルトのブロック多量に含む。層厚0~0.2m。南部のみに堆積する層で、南東端では205B層暗灰色粘土に緑灰色粘土質シルトのブロックとなる。

206層：灰色微砂~粗砂に灰色粘土質シルトのブロック。層厚0.1~0.2m。

207層：明褐色微砂・粗砂・礫の互層。層厚0~0.8m。

208層：灰褐色粘土質シルトと灰色微砂の互層。層厚0~0.1m。

209層：黄灰色微砂に褐色粘土のブロック混入。層厚0~0.4m。

210層：灰褐色粘土質シルトと粗砂の互層。層厚0~0.2m。

211層：灰褐色粘土質シルトと植物遺体の互層。層厚0.1~0.25m。

212層：褐色粘土主体。層厚0~0.35m。211層上面に形成された溝状遺構内部の堆積土である。

以下の①~⑤からなる。

①褐色礫混粘土。②褐色礫混粘土。炭酸鉄多量に含む。③褐色礫混粘土。炭酸鉄含む。

④褐色粗砂混粘土。粗砂多量。⑤灰色粗砂に褐色粘土のブロック。粗砂少量。

213層：灰色礫混粘土質シルト。層厚0~0.25m。

214層：青灰色シルト・灰色微砂・明褐色粗砂・礫などの互層に、褐色粘土のブロック。層厚0~0.45m。

215層：褐灰色粘土と植物遺体の薄い互層。層厚0~0.2m。

216層：青灰色微砂・灰色粗砂・黄褐色礫などの互層。層厚0.15~0.7m。

217層：褐灰色粘土と植物遺体の互層。層厚0~0.2m。

218層：褐灰色粘土。層厚0~0.35m。

219層：青灰色粘土。層厚0.2~0.3m。

220層：灰色微砂。層厚0~0.2m。

221層：灰黑色微砂混粘土。層厚0~0.1m。北西部で厚みを増す。

222層：青灰色粘土質シルトに黒灰色粘土の細かいブロック少量含む。層厚0.1~0.2m。

223層：(A)灰黑色微砂混粘土。層厚0~0.3m。

(B)青灰色微砂混粘土質シルト。0~0.3m。西部で見られる。

224層：(A)黄灰色微砂。層厚0~0.3m、灰黑色粘土の細かいブロック少量含む。

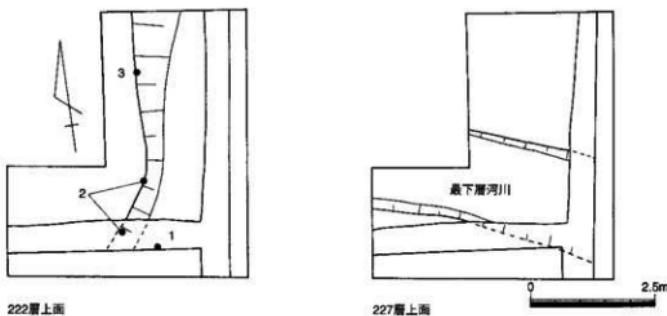
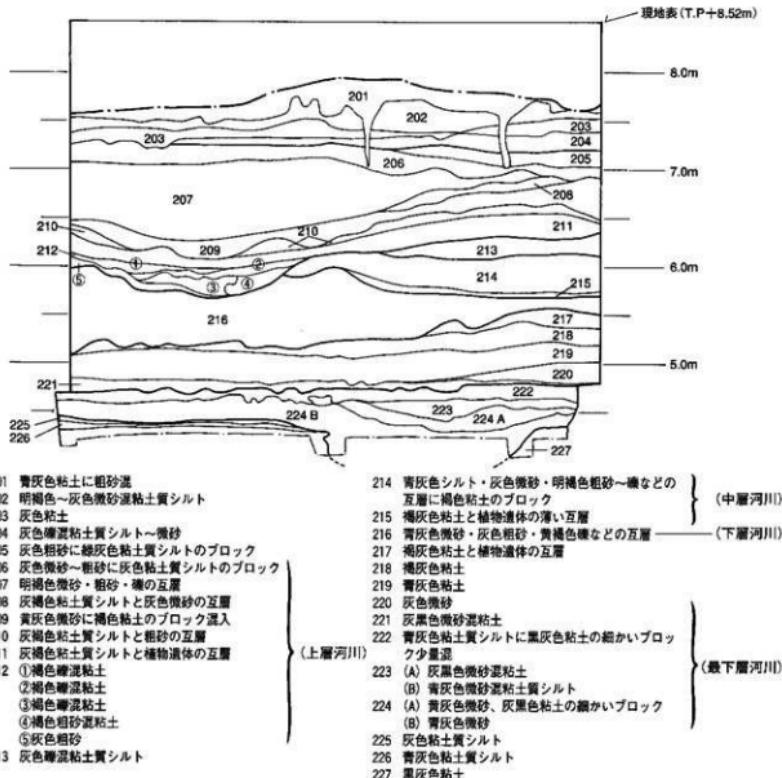
(B)青灰色微砂。層厚0.3m以上、中央部で東~西方向に下がるのを確認した。

225層：灰色粘土質シルト。層厚0~0.05m。極めて薄く、南よりを224層で切られている。

226層：青灰色粘土質シルト。層厚0~0.05m。225層同様の堆積状況である。

227層：黒灰色粘土。層厚0.1~0.25m以上。極めて粘性が強く、225・226層同様224層によって切られている。上面の標高はT.P. +4.3~4.4mを測る。

V 鬼井遺跡第9次調査(KM99-9)



第3図 2区東側壁面図(S=水平1/100・垂直1/50)・平面図(S=1/200)

検出遺構と出土遺物

現地表下1.3m(T.P.+7.2m)の206層上面では、近世～近代の井戸底を検出した。構築面は不明である。西区北西隅の壇際にあたっていたため、平面的には1/10程度を検出したにすぎない。桶を積み上げて井戸側とするもので、最下の1段分のみが遺存していた。井戸側内部には暗青灰色粘土質シルトが堆積しており、底は207層に達している。

ここでは、現地表下1.3m(T.P.+7.2m)以下の206～216層・224層が埋没河川にある。1区同様、前者は上層(206～212層)・中層(214・215層)・下層(216層)に分けることができる。

上層(206～212層-T.P.+5.7～7.2m)は上部が粗砂を主とし、下部に粘土や植物遺体の互層、底には212層が溝状に伸びている。流路方向は南東～北西、底のレベル高はT.P.+5.7mである。

中層(214・215層-T.P.+5.7～6.1m)は微砂を主とし、底に褐色粘土が堆積する。流路方向は不明、底のレベル高はT.P.+5.7mである。

下層(216層-T.P.+5.1～6.0m)は微砂・粗砂・礫が複雑に堆積するもので、水量は極めて多い。古墳時代前期(布留式期)の遺物が少量含まれる。流路方向は、やや北へふる東～西、底のレベル高はT.P.+5.1mに達する。

最下層(224層-T.P.+4.6m以下)は微砂の堆積で、水量は多い。流路方向は北へ降る東～西、幅2m、深さは0.5m以上あり、最下層の227層上面から0.3m程度落ち込むを確認したが、本来の切り込み面ではない。

出土遺物は、現地表下0.7m(T.P.+7.8m)の201層中、上層河川中から瓦片や近世の陶磁器等(6～9)が出土している。下層河川からは、古墳時代前期(布留式期)の高杯(5)他が少量出土し、現地表下3.5m(T.P.+5.0m)の219層中からは、弥生時代後期の壺(4)他が極少量出土している。また、現地表下3.5～3.8m(T.P.+4.7～5.0m)の221層中では、弥生時代中期後半の壺3個体(1～3)が検出された。弥生土器(1～3)は、東区南部の径約2m程度の範囲に3個体分のみがまとまっていたものである。明瞭な掘形はないが、222層上面が東へ向かってゆるやかに下がる斜面に落ち込んだような状態で出土した。いずれも煤が多量に付着している。

1は口縁端面～体部上半に幅広の横描籠状文が施される広口壺である。ヘラミガキ調整がなされ、淡褐色の色調を呈し、体部下位に最大径をもつ。口径18cm・底径5cm・器高27cmを測る。

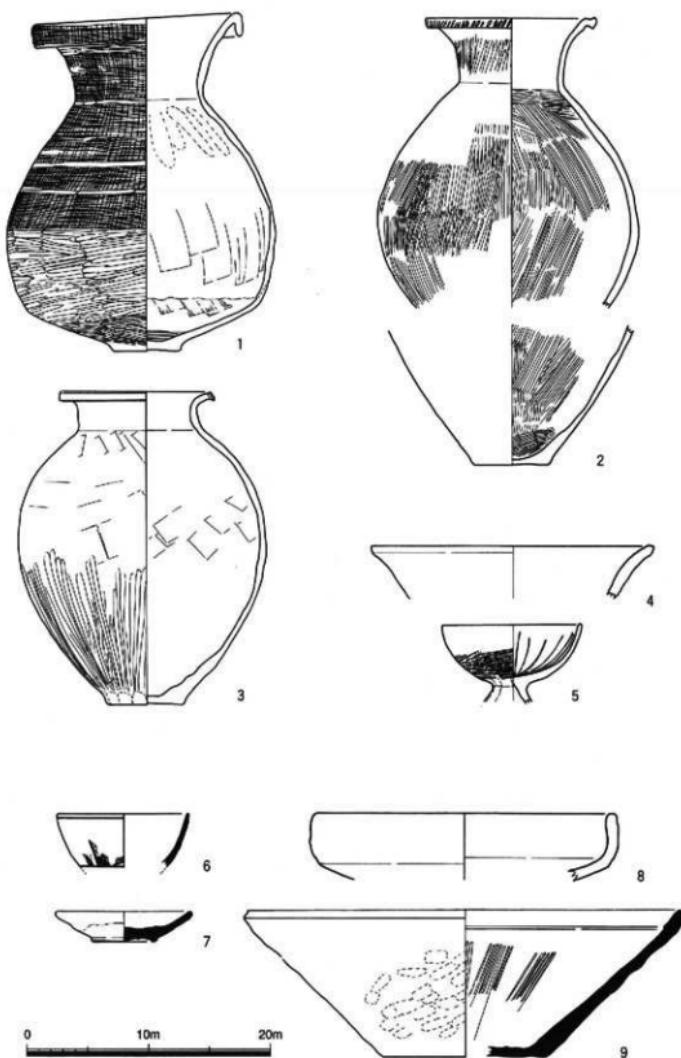
2は口縁端面にハケ状工具による籠状文状の文様が施される広口壺である。壺～体部上半の器表面の剥離が著しい。ヘラケズリ後体部下半ヘラミガキ、体部上半・内面ハケ調整、灰黒色の色調を呈し、体部中位に最大径をもつ。口径13cm・底径6cm・器高28cmを測る。

3は無文の短頸壺で、口縁上面の4方に紐孔(3孔残存)を穿つ。ヘラケズリの後体部下半ヘラミガキ、体部上半・内面ナデ調整、淡褐色の色調を呈し、体部上位に最大径をもつ。口径13cm・底径6cm・器高26cmを測る。

3.まとめ

調査の結果、両調査区で数枚の河川内堆積が確認できた。出土遺物からみた2区の河川埋没時期は、上層河川～近世、中層河川～布留式期以降、下層河川～弥生時代後期以降、最下層河川～弥生時代中期以前となる。

1区と2区では、堆積状況や流路方向も異なることから比較することは困難であるが、上層河



第4図 222層(1~3)・219層(4)・下層河川(5)・上層河川(6~9)出土遺物実測図(S=1/4)

川がこれまで周辺の調査で確認している「古平野川」であれば、1区はその岸辺に位置するため、流れの緩やかな堆積状況を示すものと考えられる。1区から西20m地点のK H90-5では、上層河川が認められないことからもこの付近が岸辺であったことは間違いないであろう。このK H90-5では、地表下2.3m(T.P.+6.0m)前後に弥生時代中期後半以降、古墳時代前期以前の河川があり、その下約0.5m(T.P.+5.7m)に、弥生時代中期後半(第IV様式)の方形周溝墓が検出されている。のことから、1区中層河川は、この河川に対応するものと考えられる。

さらに、2区から南東200m地点の(KM97-5)では、現地表下1.2~2.7m(T.P.+6.25~7.75m)の間に「古平野川」があり、川底より約0.5m下(T.P.+5.6~5.8m)で弥生時代後期初頭の落ち込み状遺構、さらにその下約0.5m(T.P.+5.0~5.2m)に弥生時代中期後半(第IV様式)の遺物が包含されていた。弥生時代後期の土器片を含む219層は、層位・層相などからも、前者に一致する。また、221層中出土の土器は、後者や前述のK H90-5方形周溝墓とも同時期のものであり、弥生時代中期後半の広範囲な遺跡の広がりが明らかになったものと考えられる。

最下で確認した227層は亀井遺跡に広範囲に存在する縄文晩期と推測される「黒灰色粘土層」に相当するものと思われ、当遺跡の指標となる層を捉えられている。

註

註 阵内暢子 1987「第12項 亀井遺跡」「河内平野遺跡群の動態工、近畿自動車道天理~吹田線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—プロローグ編」大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター

参考文献

- 青木勘時 1990「亀井遺跡(88-586)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 岡田清一 1990「亀井遺跡(89-041)の調査」同上①
- 岡田清一 1990「亀井遺跡(89-287)の調査」同上①
- 古川晴久 1998「V亀井遺跡第4次調査(KM96-4)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告60」(財)八尾市文化財調査研究会
- 古川晴久 1998「7、亀井遺跡第5次調査(KM97-5)」「平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 成海佳子 1999「6、亀井遺跡第7次調査(KM98-7)」「平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- 高萩千秋 1991「I 久宝寺遺跡(K H90-5)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」八尾市文化財調査研究会報告32 (財)八尾市文化財調査研究会



1区 北側壁面 (101~110層)



2区 東側壁面 (201~211層)



1区 北側壁面 (100~114層)



2区 東側壁面 (211~219層)



1区 北側壁面 (114~127層)



2区 222層上面遺物出土状況 (南から)



2区 227層上面 (南から)



221層内 出土遺物

言　　回

（中略）昭和21年1月文部省考古調査委員会は、この遺跡を調査した結果、この遺跡は古墳時代後半のものと認められ、その構造は、主として石室の存在から見て、古墳時代後半のものと見られる。

VI 亀井遺跡第10次調査 (KM99-10)

（中略）昭和21年1月文部省考古調査委員会は、この遺跡を調査した結果、この遺跡は古墳時代後半のものと認められ、その構造は、主として石室の存在から見て、古墳時代後半のものと見られる。

大　　目　　文　　本

序	1
前記	2
調査概要	3
調査方法	4
調査結果	5
調査報告書	6
参考文献	7
付録	8

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市亀井町1・2丁目地内で実施した公共下水道工事(11-7工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する亀井遺跡第10次調査(KM99-10)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書(八教社文第499号 平成11年12月13日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年3月6日～3月31日(実働6日間)にかけて、高萩千秋・岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約40m²である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時行い、平成12年9月に終了した。
1. 現地調査・内業整理には、加茂靖通が参加した。
1. 本書の執筆・編集は、高萩が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	61
2.調査概要.....	62
1) 調査の方法と経過.....	62
2) 検出構造と出土遺物.....	62
第1区.....	62
第2区.....	64
3.まとめ.....	65

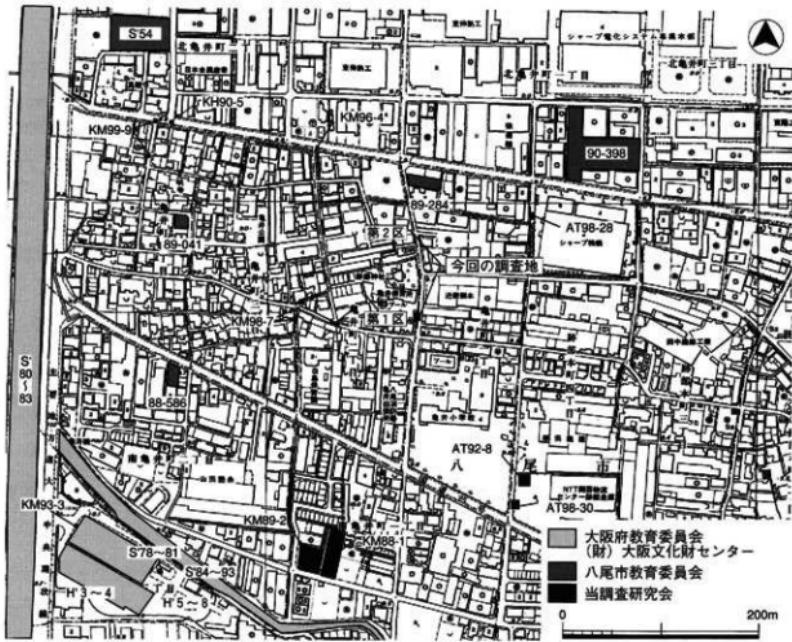
VI 亀井遺跡第10次調査 (KM99-10)

1. はじめに

亀井遺跡は八尾市の南西部にあたり、現在の行政区画では亀井町1～4丁目、南亀井町1～5丁目一帯に所在する。地形的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地に位置し、遺跡中央を横断するかたちで平野川が北西流する。周辺隣接には東に跡部遺跡・西に竹瀬遺跡・北に久宝寺遺跡・大阪市加美遺跡があり、南側には大阪市長原遺跡・城山遺跡などがある。

当遺跡は、昭和43(1968)年、平野川改修工事の際、弥生土器が多量に出土したことによって発見された遺跡である。それ以後、大阪府教育委員会による5次にわたる遺跡範囲確認調査が行われた。昭和44(1969)年、近畿自動車道建設に伴い、(財)大阪文化財センターによる遺構確認調査が行われた。その後、昭和53(1978)年からは長吉ポンプ場築造工事に伴う発掘調査、昭和55(1980)年からは近畿自動車道建設に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現大阪府文化財研究調査センター)によって行われている。その結果、東西・南北0.5km以上の範囲に存在する複合遺跡であることが明らかにされている。

今回の調査地は、平安時代ごろまで旧大和川の一支流であった平野川の自然堤防上に営まれてい



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

る亀井旧集落の北東側にあたり、西250m地点に市教委89-041、南西100m地点にKM95-5、120mにKM98-7、北西200m地点にKM96-4、北100m地点に市教委89-284がある。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(11-7工区)に伴うもので、当調査研究会が亀井遺跡内で実施した第10次調査にあたる。調査区は八尾市教育委員会から指示された2箇所で、南側(立坑)を第1区、北側(人孔)を第2区とした。調査面積は、第1区が約36m²(一辺6×6m)、2区は約3.84m²(1.6×2.4m)である。両調査区ともに現地表より0.7~1.2mまでは、既設の埋設物などの掘削時の埋め土である。調査は第1区より行った。平成12年3月6日~3月31日のうち実働5日間である。第2区は第1区終了後、約半月後の3月31日に行った。

2) 検出構造と出土遺物

第1区

奈良街道(現国道25号線)に面した市立亀井小学校の西側道路より約150m北へ入った旧亀井村の一角に位置する調査区である。立坑は一辺約6.0mの正方形で、南東側に市立亀井小学校、北側に跡部神社がある。調査区は亀井保育所の敷地の一部を借地したかたちで立坑を設定している。現地表(道路)面の標高はT.P.+8.9m前後を測る。調査区の東側では道路中央に埋設されている高压電線の埋設管(一辆0.9m断面方形)が南北方向に伸びている。この埋設管は関西電力の記録データでは昭和45年前後に埋設されたということである。埋設管は現地表下約1.4~2.5mまでの間に埋められていた。また、借地している保育所側では溜池を埋立てて建てられており、その溜池の堤と思われる落ち込みを調査区西端で確認した。

① 層序

第1区では、現地表面から約5.2mまでの地層を観察した結果、24層が確認できた。以下、各層について記す。

第1層 盛土。層厚0.7~1.2m。

第2層 明茶灰色中砂。層厚0.2~0.3m。西側に堆積。やわらかい。

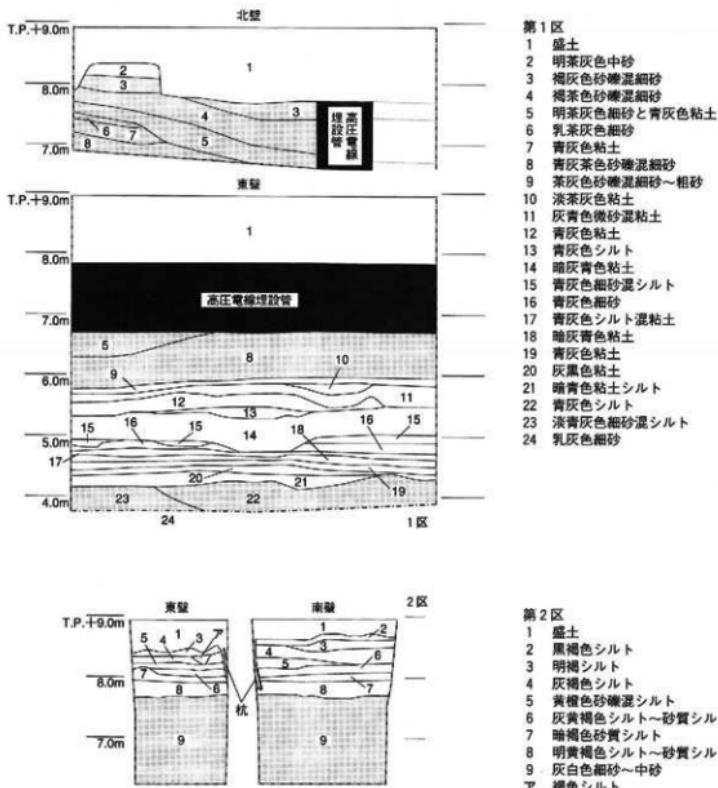
第3層 褐灰色砂礫混細砂。層厚0.2~0.3m。

第4層 褐茶色砂礫混細砂。層厚0.2~0.4m。礫を含む。北東へ落ち込む。



第2図 調査区位置図(S = 1/1000)

- 第5層 明茶灰色細砂と青灰色粘土。層厚0.4~0.6m。北東へ落ち込む。
- 第6層 乳茶灰色細砂。層厚0.2~0.5m。北東へ落ち込む。
- 第7層 青灰色粘土。層厚0.1m。北東へ落ち込む。
- 第8層 青灰茶色砂礫混細砂。層厚0.1~0.15m。一部褐色。室町時代の土器片を含む。北東へ落ち込む。
- 第9層 茶灰色砂礫混細砂~粗砂。層厚0.5~0.8m。北東へ落ち込む。
- 第10層 暗茶色~茶褐色砂礫混粗砂。層厚0.2~0.5m。1~3cmの礫多い。
- 第11層 淡茶灰色粘土。層厚0.1~0.2m。第10層で変色。
- 第12層 青灰色粘土。層厚0.1~0.4m。植物遺体を少量含む。
- 第13層 青灰色シルト。層厚0.2~0.3m。



第3図 断面図(S=1/80)

- 第14層 暗灰青色粘土。層厚0.4~0.5m。炭化物を少量含む。
- 第15層 青灰色細砂混シルト。層厚0.2m前後。
- 第16層 青灰色細砂。層厚0.2~0.3m。
- 第17層 青灰色シルト混粘土。層厚0.1~0.2m。
- 第18層 暗灰青色粘土。層厚0.2~0.3m。植物遺体を含む。粘着性有り。
- 第19層 青灰色粘土。層厚0.1~0.3m。
- 第20層 灰黒色粘土。層厚0.2~0.3m。植物遺体を含む。
- 第21層 暗青色粘質シルト。層厚0.1~0.2m。
- 第22層 青灰色シルト。層厚0.2~0.3m。
- 第23層 淡青灰色細砂混シルト。層厚0.4m前後。一部に薄く粘土層が堆積。
- 第24層 乳灰色細砂。層厚0.5m前後。南東側へ傾斜するラミナがみられる。
- 第3層～第10層は河川の堆積と考えられる。これらの層は調査区南西から北東へ傾斜するかたちで検出している。また、流れを示すラミナがみられた。
- ② 検出遺構と出土遺物
- 調査の結果、現地表下1.2m(T.P.+7.8m)以下で、河川跡と思われる砂層(第3層～第10層)を検出した。第8層では室町時代ごろと思われる瓦質の土器片を1点出土しており、この時期に埋没したであろう。現地表下約3.6m(標高5.3m)の第12層以下は、沖積地の特徴であるシルトと粘土が相互に堆積する洪水層がみられただけで、周辺調査で確認されている弥生時代中期の地層は同一レベルでは確認できなかった。

第1区

第1区から北へ約40m地点で、跡部神社の北側に位置する。現地表面の標高は第1区と同レベルであるT.P.+8.9m前後を測る。

① 層序

第2区は現地表下約2.6mまでの地層を観察した。地層は9層に分けることができた。以下、各層について記す。

- 第1層 盛土。層厚0.3~0.6m。東側がやや深い。
- 第2層 黒褐色シルト。層厚0.1~0.2m。耕作土。
- 第3層 明褐色シルト。層厚0.2~0.3m。
- 第4層 灰褐色シルト。層厚0.2~0.4m。近世磁器を含む。
- 第5層 黄橙色砂礫混シルト。層厚0.2~0.3m。東に厚く堆積。堅くしまる。
- 第6層 灰黄褐色シルト～砂質シルト。層厚0.2m前後。
- 第7層 暗褐色砂質シルト。層厚0.1~0.2m。
- 第8層 明黄褐色シルト～砂質シルト。層厚0.3~0.4m。
- 第9層 灰白色細砂～中砂。層厚1.5m以上。部分的に酸化鉄分を含む。湧水が著しい。

② 検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表(T.P.+8.9m)下1.3m以下で第1区と同様に、厚く堆積する砂層を検出した。

3.まとめ

調査の結果、両調査区で河川跡と思われる砂層が厚く堆積しているのが確認できた。これまでにも周辺の調査で砂層が厚く堆積していることが確認されている。

参考文献

- ・中西靖人・宮崎泰史・西村尋文他 1984『亀井』－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－(財)大阪文化財センター
- ・中西靖人・國乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭他 1985『亀井遺跡』－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場整備工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書II(財)大阪文化財センター
- ・中西靖人 1986『亀井』(その2)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・竹原伸次・大槻康宏 1987『亀井』(その3)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－(財)大阪文化財センター
- ・小野久隆他 1988『亀井北』(その1)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－(財)大阪文化財センター
- ・奥和之・山上弘他 1987『亀井北』(その2)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－(財)大阪文化財センター
- ・赤木克視・竹原伸次・大槻康宏他 1988『亀井北』(その3)－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－(財)大阪文化財センター
- ・近江俊一 1989.4「亀井遺跡」－南亀井町4丁目41-1の調査－(財)八尾市文化財調査研究会報告19
- ・高萩千秋 1989「20 亀井遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1990「10. 亀井遺跡(KM89-2)」『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告28 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1990.3「10. 亀井遺跡(89-284)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・青木勘助 1990.3「8. 亀井遺跡(89-041)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・岡田清一 1990.3「6. 亀井遺跡(88-586)の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告20 平成元年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・成海佳子 1991「11. 亀井遺跡第3次調査(KM90-3)」『平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』
- ・道 章 1992.3「17. 亀井遺跡(91-255)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書I』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・古川晴久 1996「8. 亀井遺跡第4次調査(KM96-4)」『平成8年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』



第1区 最終掘削状況（南から）



第1区 西側北壁 (T.P. +6.8~8.0m)



第1区 東壁中央 (T.P. +5.0~7.0m)



第2区 全景（東から）

VII 萱振遺跡第22次調查 (K F 99-22)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市萱振町5丁目地内で行った、公共下水道工事(平成10年度－第32工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する萱振遺跡第22次調査(KF99-22)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第613号 平成11年1月29日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年6月14日～6月16日(実働2日間)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は、約22.4m²を測る。
1. 現地調査・内業整理に参加した補助員は以下のとおりである。
市森千恵子・田島和恵・宮崎寛子・山口拓也(五十音字順)。

本　文　目　次

1.はじめに.....	67
2.調査概要.....	67
1)調査の方法と経過.....	67
2)検出遺構と出土遺物.....	68
3.まとめ.....	68

VII 萱振遺跡第22次調査 (KF99-22)

1. はじめに

萱振遺跡は八尾市の北西部に位置し、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地する。両河川は八尾市「二俣」地区で分流するもので、楠根川もその付近からこの冲積地の中央部を流れしており、その流域に数多くの遺跡が立地している。当遺跡の周辺には、北に山賀遺跡・西郡廃寺遺跡、南に東郷遺跡・小阪合遺跡・成法寺遺跡、西に宮町遺跡・佐堂遺跡・美園遺跡などがある。現在の行政区画では、緑ヶ丘1~3丁目、旭ヶ丘5丁目、萱振町1~7丁目、北本町3・4丁目、楠根町1・4丁目がその範囲にあたる。

これまでの調査では、遺跡北部の萱振町5・7丁目付近と、遺跡南東部の緑ヶ丘・旭ヶ丘付近では、遺跡の様相が異なっているものと考えられている。今回の調査地点から西50m地点にある府立八尾北高等学校敷地内では、昭和58年度に大阪府教育委員会による発掘調査が行われており、弥生時代前期～中世に至る様々な遺構・遺物を検出しており、古墳時代前期後半の方墳は、「萱振1号墳」と命名され、同校敷地内に一部が復元保存されている。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、公共下水道工事(平成10年度第一32工区)に伴うもので、当研究会が萱振遺跡内で実施した22次目の調査にあたる。調査地の位置は、府立八尾北高等学校から東へ50m地点にあたり、周辺では、市教育委員会・当調査研究会が6件の発掘調査を行っている。

調査区は発進立坑1ヶ所で、東西4m・南北5.6mの規模を測る。掘削深度は現地表下4.3mで、最終掘削深度(T.P.+1.65m)まで機械・人力を併用して掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めたが、結果的には地層断面の観察にとどまった。



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

2) 検出遺構と出土遺物

地層断面観察用の畦は南側に残した。現地表面の標高はT.P. +5.8~5.9mを測る。盛土は0.8m前後あり、東側には側溝構築の際の碎石が充填されていた。観察できた地層は次の12層である。

第1層：灰黒色粘土質シルト。層厚は0.15m程度、旧耕土であろう。上面の標高はT.P. +5.0m前後を測る。

第2層：青灰色粘土質シルト。層厚0.2m。この層もまた、耕土と考えられる。

第3層：灰褐色シルト～微砂。層厚0.2~0.3m。鉄分を多量に含んでいる。この層上面のT.P. +4.68m前後で、平安時代以降の瓦器(1)・瓦(2)のほか須恵器などの小破片が極少量出土した。

第4層：灰色微砂混粘土質シルト。層厚0.15m前後。攪拌されており、水田耕作土の可能性がある。

第5層：灰褐色粘土質シルト。層厚0.2m前後。

第6層：黒褐色粘土、層厚0.15m。硬く締まった土層である。

第7層：灰青色粘土質シルト。層厚0.35m。下部に植物遺体の薄層を数枚含む。

第8層：灰色粘土。層厚0.15m。きわめて軟弱な土層で、少量の有機物を点々と含む。

第9層：灰黒色粘土質シルト。層厚0.1m。

第10層：黒灰色微砂混粘土。層厚0.15m。

第11層：青灰色微砂。層厚1.15m。植物遺体の薄層を数枚含む。

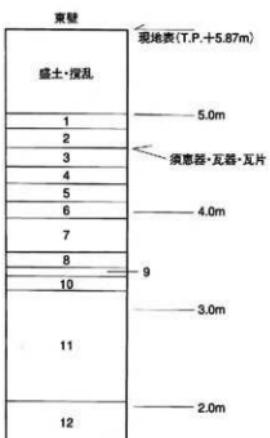
第12層：淡灰色粘土。層厚0.4m以上を確認した。

3.まとめ

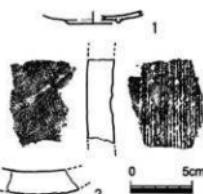
今回の調査では、工事に並行したため、現地表下4.3mまでの地層を観察することが可能であった。これまでの調査結果から、第3層灰褐色シルト～微砂は平安時代末期～鎌倉時代以降に堆積した洪水層、第4層灰色微砂混粘土質シルトはそれ以前の水田耕作土、第11層青灰色微砂は弥生時代後期までの河川と考えることができる。

参考文献

- ・広瀬雅信 1992 「萱振遺跡」『大阪府文化財調査報告書 第39輯』大阪府教育委員会
- ・高萩千秋 1992 「IX 萱振遺跡第11次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告34』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・清 善 1993 「萱振遺跡(92-006)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告27 平成4年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ・成海佳子 1996 「V 萱振遺跡第17次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告52』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一 1996 「V 萱振遺跡第18次調査」『同上 報告53』
- ・西村公助 1996 「VI 萱振遺跡第19次調査」『同上 報告53』
- ・岡田清一 1998 「VI 萱振遺跡第21次調査」『同上 報告60』



第2図 層序模式図 (S = 1/50)



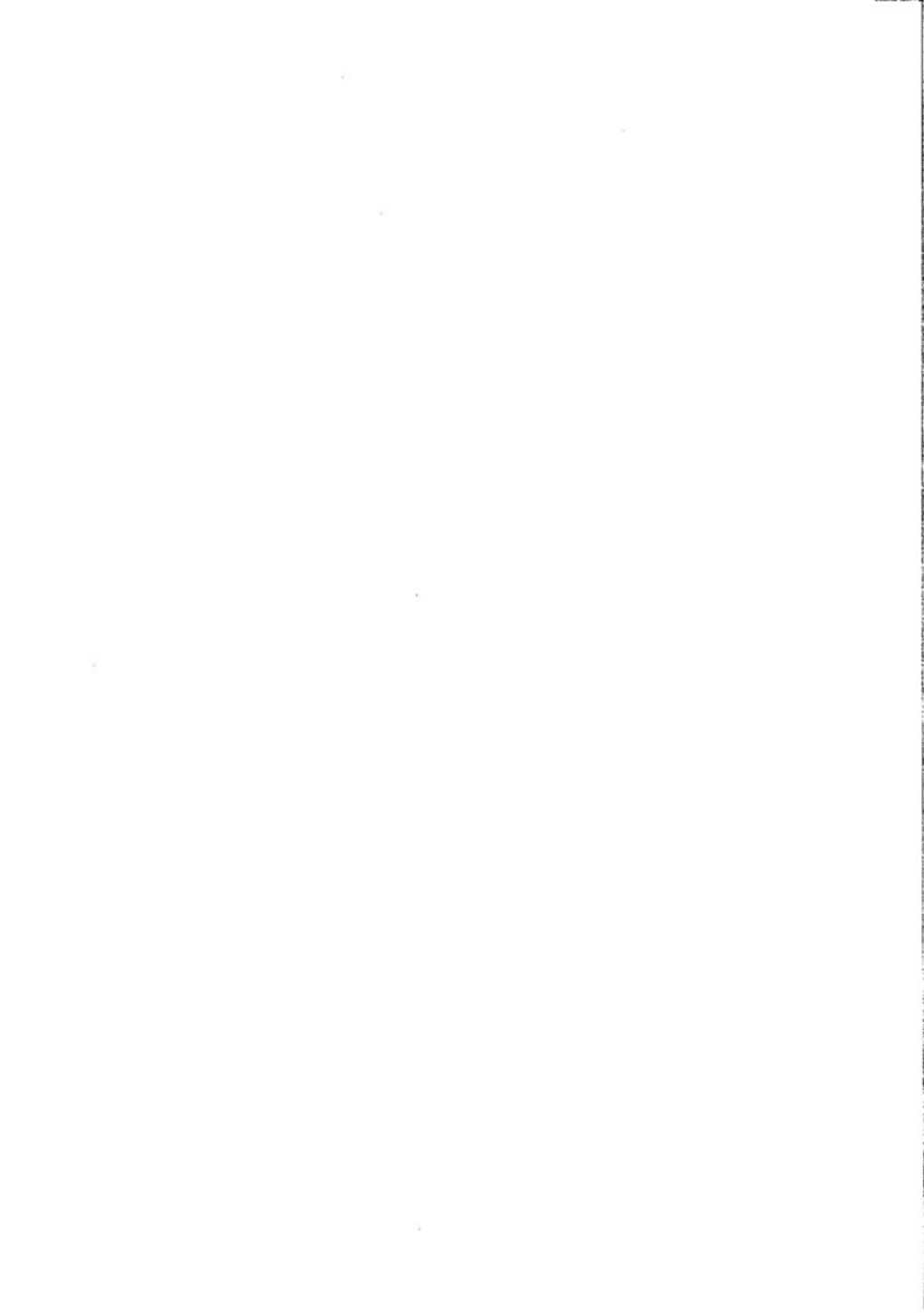
第3図 第3層上面出土遺物実測図 (S = 1/4)



機械掘削状況 (北東から)



南側壁面 (第4層以下)



VIII 心合寺山古墳第4次調査（S O99-4）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大竹5丁目地内(「新池」)で行った、堤体改修工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する心合寺山古墳第4次調査(SO99-4)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教社文第319号 平成11年9月20日付)に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成11年11月16日～12月1日(実働10日間)にかけて、成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は112m²を測る。
1. 現地調査・内業整理には飯塚直世・小田真也・加茂靖通・中西明美・山口拓也・横山妙子が参加した。(五十音順)

本　文　目　次

1.はじめ	71
2.調査概要	72
1) 調査の方法と経過	72
2) 検出遺構と出土遺物	74
3.まとめ	75

VII 心合寺山古墳第4次調査(SO99-4)

1. はじめに

八尾市北東部の大竹・楽音寺地区一帯には、西の山古墳(古墳時代前期末)・花岡山古墳(同中期初頭)・心合寺山古墳(同中期前業)・鏡塚古墳(同中期後業)などが存在している。心合寺山古墳は、現在のところ、中・北河内で最大の規模をもつ前方後円墳で、周濠を含めた全長は250m前後である。また、心合寺山古墳の南西側では古くから瓦が採集されており、南西側の周濠(観音池)内からも礎石や屋瓦が出土したことから、古墳の南西側に秦氏一族の氏寺と考えられる心合寺跡が推定されている。

八尾市教育委員会では、史跡整備のための発掘調査を平成4(1992)年度から行っており、数々の成果が得られている。平成9(1997)年度の調査では、墳丘西側くびれ部の平坦面で埴輪列が検



第1図 調査地周辺図(S=1/5000)

出され、3段築成の古墳であることが確認されたことから、従来140m前後とされてきた墳丘長は、約160mになることがわかった。また、平成10(1998)年度の調査では、前方部頂部の平坦面にも埴輪列のあったこと、またその内側には葺石により区画された方形壇状遺構のあったことや、後円部の墓壙の確認などが行われ、この地域一帯の首長墓にふさわしい内容が明らかにされた。さらに平成11(1999)年度の調査では、後円部の墓壙内では3基の粘土櫛、前方部の方形壇状遺構下では、木棺の痕跡の残る墓壙を確認した。また、前者からは剣・鏡・玉・胄・短甲など、後者からは太刀などの副葬品が、比較的良好な形で遺存していたことがわかった。

一方、当調査研究会では、平成元(1989)年度に北西側周濠「新池」の北西隅で樋管取り替え工事に伴う発掘調査(第1次調査 S O89-1)を、平成9(1997)年度に「新池」東～南の岸で堤体改修工事に伴う発掘調査(第2次調査 S O97-2)を、平成10(1998)年度には「新池」南北隅で樋管取り替えおよび南～西の岸で堤体改修工事に伴う発掘調査(第3次調査 S O98-3)を行っている。

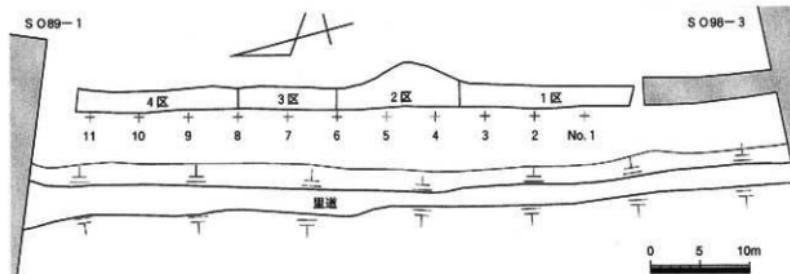
2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

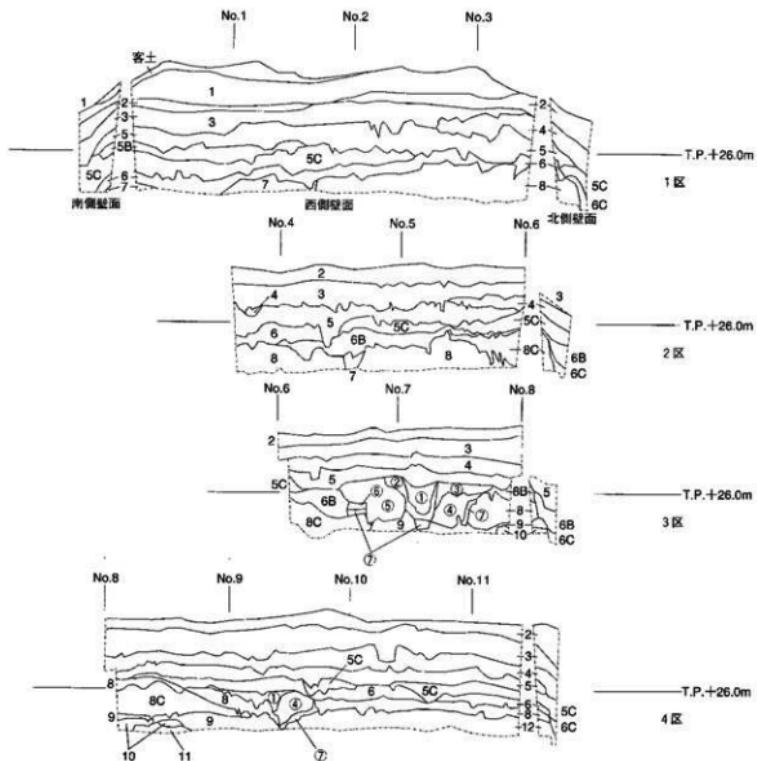
今回の調査は第4次調査(S O99-4)で、調査地は「新池」西の岸の中央部に位置し、南は第3次調査-3区と、北は第1次調査地と接している。調査地は第3次調査-2区・3区と同様池の法面基礎部分にあたり、規模は東西の幅約2m・南北の長さ56mを測る。

掘削については、現地表(T.P. +26.4～26.9m)から0.2～0.4m程度の厚さの客土・表土などを機械掘削した後、そこから法面基礎までの0.8～1.0m(T.P. +25.5m前後)を人力によって掘削し、土層堆積状況の確認、遺構・遺物の検出に努めた。

調査区の地区割は、工事用の杭に沿って設け、5mごとに区画し、地区名は南から1区～4区とした。調査区が池の岸に平行しているため、池に対して直角の土層堆積状況を確認する目的で、各地区的間に東西方向の畦を設けた。土層堆積状況図は、南北方向は西側壁面、東西方向は基本的に北側壁面を用いた。



第2図 調査区設定図(S=1/500)



- 1 茶褐色礫混じり砂質シルト
- 2 白灰色粗砂～礫
- 3 青灰～緑灰色粘土質シルト～微砂に白灰色微砂～礫混入
- 4 褐色微砂に青色粘土のブロック
- 5 青灰色粘土質シルト～微砂に青灰～紫褐色粘土のブロック
- 5B 青灰色粘土のブロック多量・青灰色微砂のブロック少量含む
- 5C 青灰色粘土の細かいブロック・礫混入
- 6 青灰色微砂と青灰～黒青色粘土の互層
- 6B 灰色粗砂～粗砂と青灰色粘土の互層
- 6C 灰色粗砂と青黑色粘土の互層
- 7 青灰～褐色微砂～粗砂
- 8 にぶい褐色粗砂に礫多量に混入
- 8B 明褐色シルト～微砂に礫混入
- 8C 褐色粗砂に礫・灰色シルト混入
- 9 にぶい褐色～淡青灰色シルト～微砂
- 10 暗褐色礫混粘土質シルト、灰色粘土質シルト少量含む
- 11 青黑色粘土質シルトに礫
- 12 明褐色粗砂
- ① 明褐色粗砂に灰色粘土のブロック少量・礫多量に含む
- ② 明褐色微砂
- ③ 明褐色シルト
- ④ 褐色粗砂～礫に灰色粘土質シルト混入
- ⑤ 青灰色粘土のブロック、巨礫混入
- ⑥ 明褐色粗砂
- ⑦ 明褐色微砂

第3図 横面図 (S=水平1/200・垂直1/50)

2) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、第2次調査・第3次調査同様、池内部の堆積状況が確認された。出土遺物は、極少量の埴輪をはじめ、奈良時代以降の土師器や中・近世～近代に至る瓦器・陶磁器・瓦・瓦質土管などがあるが、出土量はコンテナ1箱である。

調査地の現地表面はT.P.+26.4～26.9mで、南側には客土がなされており、T.P.+26.7m前後、中央部から北では客土が認められず、表土上面でT.P.+26.8～26.9mと北側が高くなっている。客土以下の層序は以下のとおりである。

第1層：茶褐色礫混じり砂質シルト。層厚0～0.4m。南西部で見られるもので、北部はない。

旧表土である。上面の標高は、T.P.+26.6～26.9mで南が低い。

第2層：白灰色粗砂～礫(粒径は50mm未満)。層厚0.1～0.35m。東～北部で厚い。現在の池内部の堆積土層である。

第3層：青灰色(一部緑灰色)粘土質シルト～微砂に白灰色微砂～礫混入。層厚0.2～0.3m。鉄分が斑紋状に含まれる。

第4層：褐色微砂に青粘土のブロック。層厚0～0.3m。南部には無く、北ほど厚い。

第5層：青灰色粘土質シルト～微砂に青灰色～紫褐色粘土のブロック。層厚0.1～0.4m。全体に堆積しているが、中央以南で厚い。南西部・北部の落ち込む部分には、下に5B・5C層が堆積する。

5B層：青灰色粘土のブロック多量・青灰色微砂のブロック少量含む。層厚0～0.2m。

5C層：青灰色粘土の細かいブロック・礫(粒径は30mm未満)混入。層厚0～0.3m。

第6層：青灰色微砂と青灰色粘土・青黒色粘土の互層。層厚0～0.4m。全体に堆積しているが、高まりでは認められず、落ち込む部分に厚く堆積し、下に6B・6C層が堆積する。

6B層：灰色細砂～粗砂と青灰色粘土の互層。層厚0～0.4m。

6C層：灰色細砂と青灰色～青黒色粘土互層。層厚0～0.4m以上。

第7層：青灰～褐色微砂～粗砂。層厚0～0.2m以上。南西部のみで認められた。この層までが、開削当時の池内部の堆積土層と考えられる。

第8層：にぶい褐色粗砂に礫多量に混入(粒径は50mm未満)。層厚0.1～0.4m以上、池の基盤層をなすものと思われ、上面の標高は、T.P.+25.7～26.0mを測る。中央部の高まり以北には8B層が、中央部の落ち込む部分には8C層が堆積する。

8B層：明褐色シルト～微砂に礫混入。層厚0～0.15m。

8C層：褐色粗砂に礫・灰色シルト混入。層厚0～0.4m以上。

第9層：にぶい褐色～淡青灰色シルト～微砂。層厚0～0.2m以上。北部に堆積する。

第10層：暗褐色礫混粘土質シルト。灰色粘土質シルト少量含む。層厚0～0.2m以上。北端部でしか認められなかった。

第11層：青黒粘土質シルトに礫(径20～30mm)。層厚0～0.15m以上。

第12層：明褐色粗砂。層厚0～0.1m以上。鉄分を多量に含んでいる。

このうち第1・2層は、調査直前までの池の岸辺～内部上層を構成する土層である。第3～7層は池内部の堆積土層で、シルト～微砂を主体とするブロック層または互層で、東側へ厚みを増して下がるもの、ほぼ水平な堆積を示しており、東側では第8層を切っている。

第8層以下が池開削時期の岸辺と考えられ、上面の南部には多量の岩石(径100~300mm)が転落した状況で検出された。西壁中央部では、第6b層・第8層を切る堆積土が確認できた。平面的には明確にできなかったが、一時期の流路と考えられる(①~⑦層)。

それ以下は、中央以北で第9層・第10層が安定した状態で堆積するのが確認できたが、以下の第11層・第12層は一部で確認しただけである。

3.まとめ

今回の調査地は、池の岸に沿った南北に長いトレンチであったため、調査地内では、そのほとんどが現在の池の岸から底を掘ることとなり、平面的な調査はできていない。調査の結果、第8層上面が開削当時の池の岸であつただろうこと、調査区の北部では開削当時の池の岸はやや東へ振るであろうことなどが推測できる程度である。第8層中には、平安時代以降の瓦が含まれていることから、開削時期はそれ以降と考えられる。

参考文献

- ・原田昌則 1990「心合寺山古墳(SO89-1)」「八尾市文化財調査研究会年報平成元年度」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・吉田野乃 1993「史跡 心合寺山古墳基礎調査現地説明会資料」八尾市教育委員会
- ・吉田野乃 1996「史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書」「八尾市文化財調査報告35 史跡整備事業報告1」八尾市教育委員会
- ・吉田野乃 1997「史跡 心合寺山古墳第5次発掘調査現地説明会資料」八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1998「史跡 心合寺山古墳第6次発掘調査現地説明会資料」八尾市教育委員会
- ・吉田野乃 1999「2、史跡心合寺山古墳新池改修に伴う立会い調査(平成9年度)」「八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書II」八尾市文化財調査報告41平成10年度公共事業 八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1999「史跡 心合寺山古墳第6次発掘調査概報」「八尾市文化財紀要9」八尾市教育委員会
- ・成海佳子 1999「VI 心合寺山古墳第2次調査(SO97-2)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告62」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1999「12. 心合寺山古墳第3次調査(SO98-3)」「平成10年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会



調査地から心合寺山古墳を望む



機械掘削状況（南西から）



人力掘削状況（南から）



調査風景（北から）



1区第8層上面（南から）



2区第8層上面（西から）



3区北側壁面



調査区全景（北から）

IX 太子堂遺跡第10次調查 (T S 99-10)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南太子堂4・5丁目地内で実施した公共下水道工事（10-215工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する太子堂遺跡第10次調査（TS99-10）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第260号 平成11年8月11日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年10月14日～平成12年1月18日（実働24日間）にかけて、森本めぐみを担当者として実施した。また、夜間調査となった人孔1ヶ所については、高萩千秋の補佐を受けた。調査面積は約132m²を測る。現地調査には、以下の補助員が参加した。
市森千恵子・加茂靖通・岸田靖子・山口拓也（五十音順）
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・澤村妙子・田島和恵・都築聰子・中西明美の参加を得た。
1. 本書の執筆、および写真撮影は森本が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	77
2.調査概要.....	77
1) 調査の方法と経過.....	77
2) 各調査区の概要.....	80
3.まとめ.....	93

IX 太子堂遺跡第10次調査 (TS99-10)

1. はじめに

太子堂遺跡は、大阪府の東部に位置する八尾市の南西部に所在する。現在の行政区画では、太子堂3～5丁目、東太子2丁目、南太子堂1～6丁目の東西約0.8km、南北約0.65kmがその範囲と推定されている。当遺跡は、その北側を南東から北西方向に流れていた古平野川によって形成された微地形上に展開する遺跡である。古平野川とは、旧大和川を構成していた大・中小河川の内の一河川である。そして、当遺跡周辺には、東側に植松遺跡、西側には跡部遺跡、亀井遺跡が存在しするが、これらの遺跡は当遺跡と同地形状に形成されている。また、当遺跡の南側の大阪市には旧石器～近世までの複合遺跡である長原遺跡が所在する。

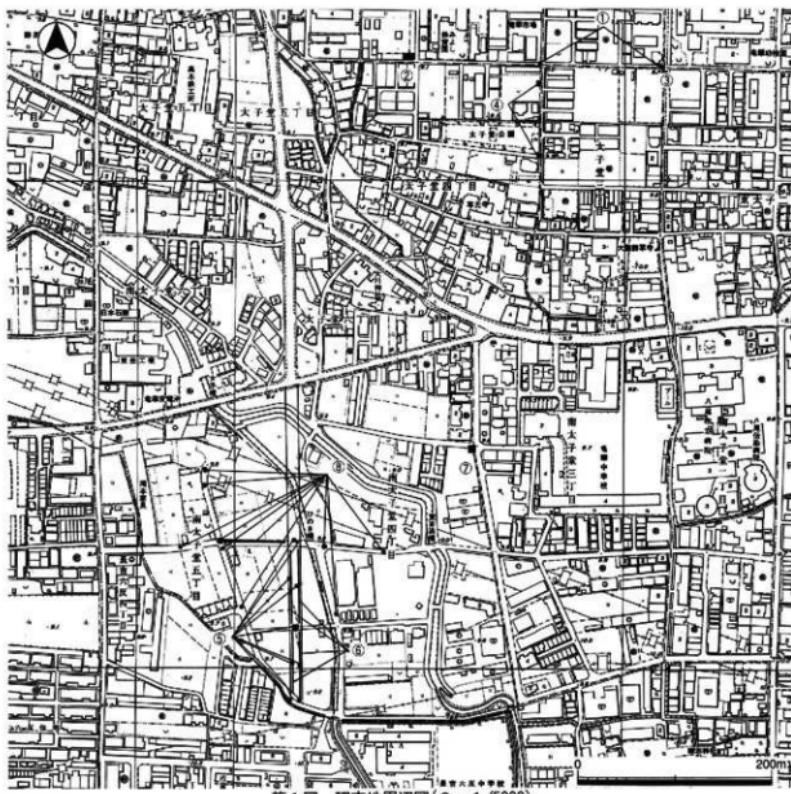
当調査研究会は、今までに太子堂遺跡内において9次にわたる調査を行っている。当遺跡の中で最も古い時期の遺構は、①・③で検出された古墳時代前期に比定されるものである。特に①では前期初頭に比定できる井戸が検出されており、また、吉備系や東海系など他地域の土器も溝の中から出土している。この成果は、他地域との交流があった集団の居住域の存在を示唆するものと思われる。③でも古墳時代前期の落ち込み状遺構や小穴が検出されている他、同時期の濃密な遺物包含層が確認されている。しかしながら、①の約0.2km南に位置する④では、この時期、河川として機能しており、また、②でも古墳時代中期の遺物包含層の下層は砂層であることから、居住域はおそらく①・③の北側に広がるのであろう。次に、広く確認されている時代の遺構・遺物は奈良時代～平安時代である。特に、当調査地の北東約0.75kmに位置する第1次調査では、奈良時代の遺構面（居住域）、鎌倉時代の遺構面（生産域）が確認され、土地利用の変化を窺うことができる。また、当調査地に近接する⑤・⑥では平安時代後期の井戸や土坑・溝などが検出されており、居住域の存在が明らかにされている。特に、⑥では調査区北側で奈良時代～平安時代前期の井戸など居住域を示す遺構が、南側では平安時代後期～鎌倉時代の水田など生産域を示す遺構が検出されている。このことから当調査地周辺は奈良時代以降安定した土地となり、居住域や生産域として利用されていたことが窺える。また、少量ではあるが、⑥で古墳時代中期の埴輪片も出土しており、周間に古墳が存在する可能性を示している。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事(10-215工区)に伴うもので、当調査研究会が太子堂遺跡内で行った第10次調査にあたる。調査は、人孔9ヶ所と開削部分1ヶ所を対象とした。調査総面積は約132m²を測る。調査区名は人孔を1区～9区とし、開削部分を10区と呼称した。このうち開削部分については、東西幅約64m、南北幅約1.5mと細長い調査区であったため、工事の進捗状況に合わせて一日に約5mづつ調査を行い、地区名は一Hごとに枝番号を付け、10-1区～10-13区と呼称した。

調査においては、市教委の埋蔵文化財調査指示書に従い、現地表下約1.2mを機械掘削範囲とし、以下約1.0mを包含層掘削範囲として機械掘削と人力掘削を併用して、遺構・遺物の検出に努めた。



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

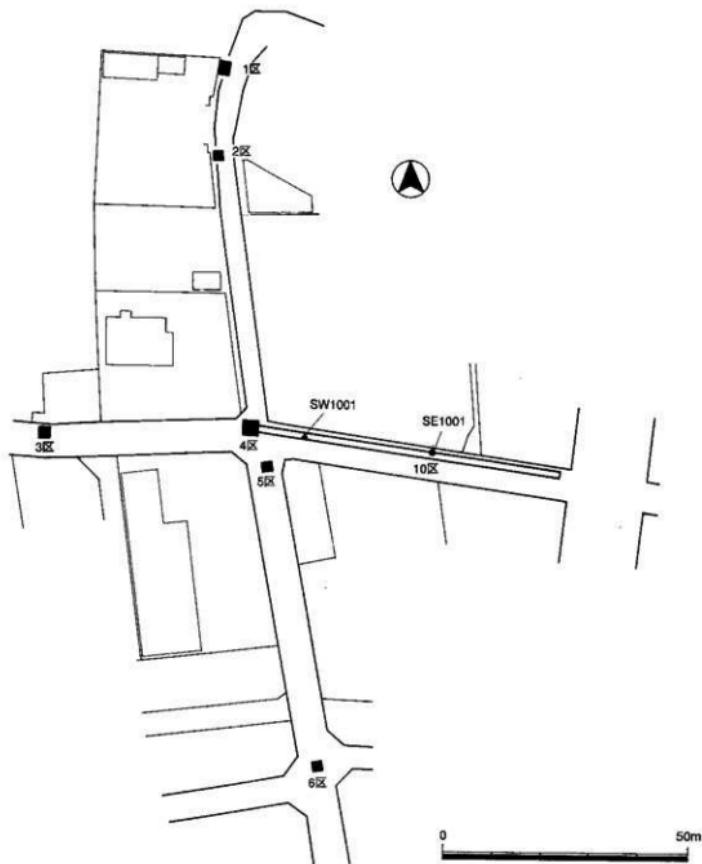
表1 既往調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査主体	主な成果	関連文献
①	太子堂	太子堂2・3 丁目地内	八文研	古墳時代前期の井戸・溝(吉備系・東部瀬戸内系・東海系などの土器を含む)	『太子堂遺跡(第1次調査・第2次調査報告書)』 八尾市文化財調査研究会報告36 1993
②	太子堂	太子堂2丁目 地内	八文研	古墳時代中期の包含層 奈良時代の溝	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』 1997
③	太子堂	東太子町2丁 目地内	八文研	古墳時代前期の落ち込み・小穴 遺物包 含層	『八尾市文化財調査研究会報告39』 1993
④	太子堂	太子堂3・4 丁目地内	八文研	古墳時代前期の埋没河川 平安時代後期 の水田耕土	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』 1997
⑤	太子堂	南太子堂4・ 6丁目地内	八文研	平安時代後期の井戸や土坑等 平安時代 ～中世の土師器・瓦器・瓦	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』 2000
⑥	太子堂	南太子堂5丁 目地内	八文研	古墳時代中期の埴輪出土 奈良時代～藤 倉時代の井戸・土坑・溝・水田等を検出	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』 2000
⑦	太子堂	南太子堂3丁 目地内	八文研	平安時代の遺物・古墳時代前期の遺物が 出土 埋没河川「古平野川」を検出	『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』 2000
⑧	太子堂	南太子堂4・ 5丁目地内	八文研		今回の報告
⑨					
⑩					

IX 太子堂遺跡第10次調査(T S 99-10)

加えて、それ以下も工事掘削深度まで立会い、可能な限り下層の地層堆積状況や遺構・遺物の確認に努めた。調査期間は平成11年10月14日～平成12年1月18日(実働24日間)である。なお、9区は日中に調査を行うことができなかつたため、夜間調査となった。

ところで、今回の下水道工事には、10区以外に各人孔をつなぐための開削部分が7ヵ所存在した。これらは調査対象外であったが、4区から土師器皿がまとまって出土したことにより、周囲にも関連する遺構が広がる可能性が高くなつたため、4区から西と北に伸びる開削部分について、八尾市教育委員会による立会い調査が行われることとなつた。

第2図 1~6区・10区位置図($S = 1/1000$)

2) 各調査区の概要

今回の調査は小調査区が多かったため、各調査区ごとに概要を述べる。地層の堆積状況については4区・6区以外は第4図と第9図にまとめた。

1区

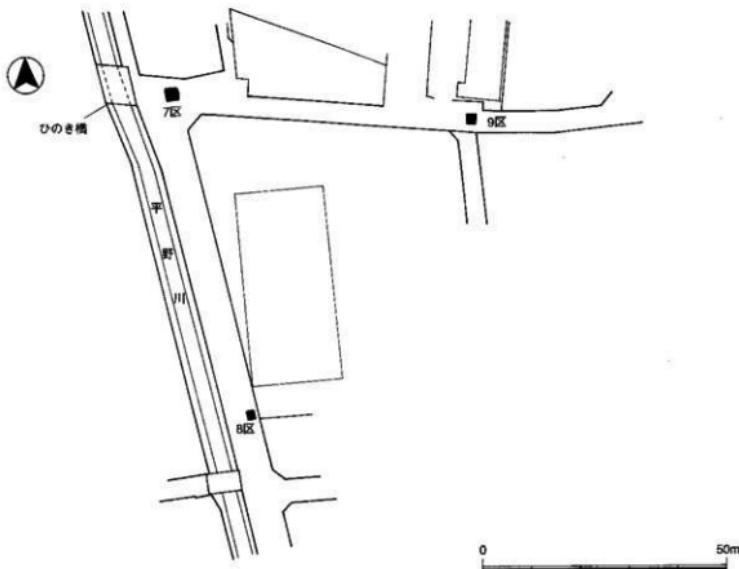
今回の調査地のなかで最北端に位置する調査区である。現地表はT.P. +10.0mを測る。現地表下約2.5m(T.P. +7.5m)まで調査を行った。調査の結果、遺構は確認できなかったが、103層で瓦質のすり鉢が、104・105層で土師器と須恵器が極少量出土した。しかし、いずれも小破片であったため図化できなかった。

2区

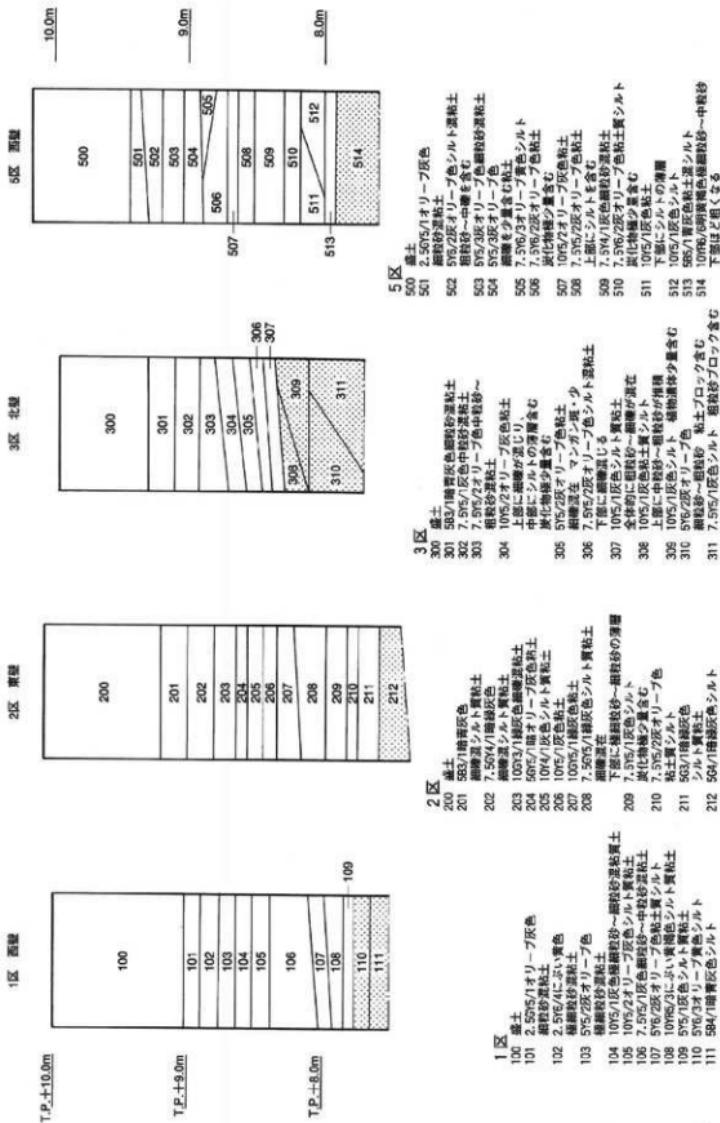
1区の南側約17mに位置する調査区である。現地表(T.P. +10.08m)下約2.7m(T.P. +7.4m)まで調査を行った。遺構は確認できなかったが、202・204～206層で土師器・須恵器等が少量出土した。いずれも小破片であったため図化できなかった。

3区

調査地の一番西側に位置する。現地表はT.P. +9.95mを測る。現地表下約2.2m(T.P. +7.7m)まで調査を行った。遺構は確認できなかったが、301・308層から遺物が出土した。308層からは瓦器椀(1～3)が出土している。



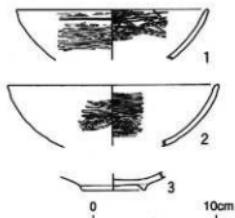
第3図 7～9区位置図(S=1/1000)



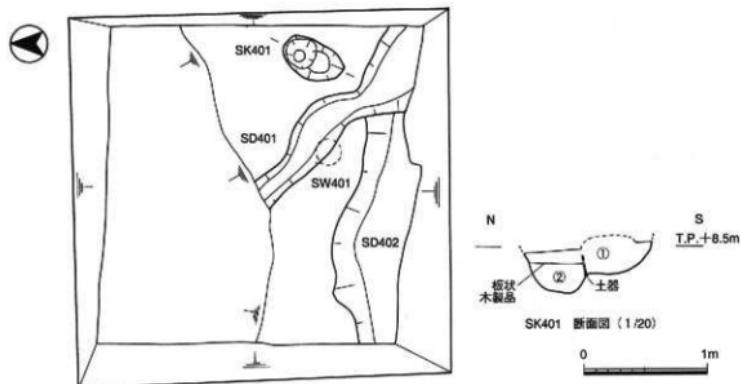
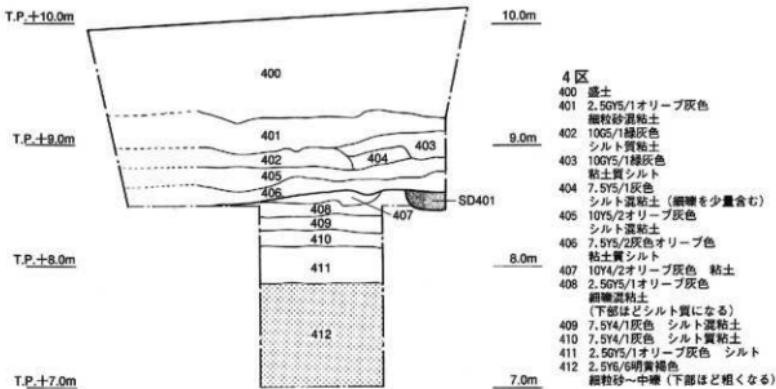
第 4 四 基本層序模式圖 1~3・5 区 (S = 1 / 40)

〈出土遺物〉

308層から出土した遺物のうち、瓦器碗3点（1～3）を図化した。1・2とも内外面のミガキは若干粗い。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。3は底部のみであるが、断面三角形のしっかりとした高台が貼り付けられ、見込み部はやや密にミガキが施されている。これらの時期は12世紀中葉に比定される。



第5図 308層出土遺物実測図 ($S = 1/4$)



第6図 4区 平・断面図 ($S = 1/40$)

4区

3区の東約40mに位置し、当調査区の東には10区が位置する。現地表はT.P. +10.0~10.1mを測り、調査は現地表下約3.0m(T.P. +7.0m)まで行った。その結果、現地表下約1.5m(T.P. +8.6m)で土坑1基(SK401)と溝2条(SD401・402)・土器集積(SW401)を検出した。これらの遺構は本来の遺構構築面よりも若干下がったところで検出した。しかし、東壁の観察の結果、遺構構築面は408層上面であることが確認できた。また、調査区の北半分については機械掘削時に掘りすぎており、同一の遺構面を検出することができなかった。そのため、遺構が存在したかどうかは確認できていない。

〈検出遺構〉

土坑(SK401)

S K 401

調査区の東端で検出した遺構である。前述した通り、本来の遺構構築面より下がったところで検出したため、正確な平面形状は不明である。検出できた部分は南西~北東に長軸をもつ楕円形を呈している。断面形状は不定形で、南側が浅く、北側が一段深くなっている。最も深い北側部分は、深さ約21cmを測る。埋土は、①: 2.5GY5/1オリーブ灰褐色粘土質シルト(炭化物極少量含む)、②: 5BG3/1暗青灰色粘土(粘性に富む層)の2層に分けることができた。SK401からは土師器皿がまとまって46枚以上出土した。これらの土師器皿は、①層出土(主に遺構の南側から出土)と②層出土(遺構の北側から出土)に分けることができる。①層出土土器は、小皿18枚以上と大皿1枚が重なった状態で出土した(写真1)。そして、①層を掘削した後、一段深くなる北側で径約24cmを測る円形の板状木製品を検出した。この板状木製品は、①層と②層を意図的に分けたものと推測できるが、非常に薄く、取り上げることができなかつた。この板状木製品の南側には土師器小皿(23・24・46)が3枚、底部を南に向かた状態で出土した(写真2)。加えて、板状木製品の直下には完形の大皿(49)が1枚、正位で出土しており、その大皿の下からは小皿が26枚以上出土した(写真3)。SK401の底のレベルは北側でT.P. +8.308mである。



写真1 ①層内遺物出土状況（北から）

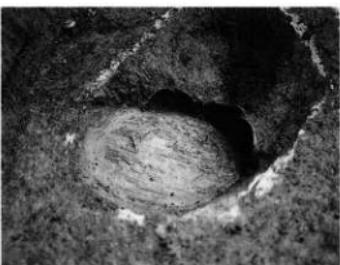


写真2 板状木製品出土状況（北から）

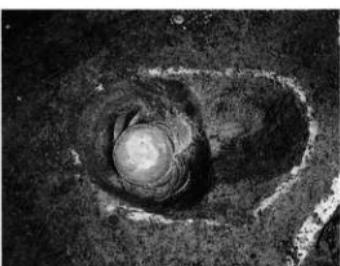


写真3 ②層内遺物出土状況（西から）

写真1~3 SK401 遺物出土状況

〈出土遺物〉

出土した土師器皿は口縁部の形態から3種類に、また、色調から3種類に分けることができた。^{註1}

形態：I類—「て」の字状口縁の系譜に位置付けられるもの

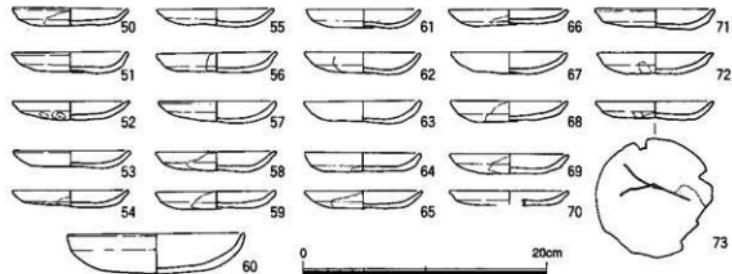
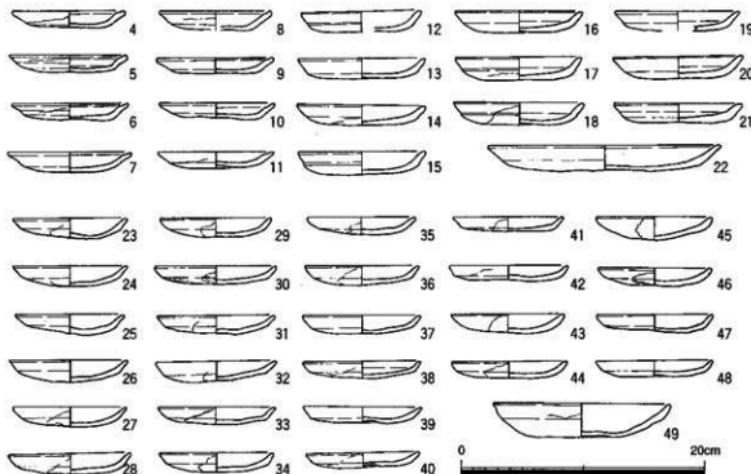
II類—ほぼ直線的に立ちあがるもの

III類—口縁部のヨコナデが明瞭で内面に段を成すもの

色調：A—10YR7/3に似る黄橙色

B—10YR8/2灰白色（褐色がかった灰白色）

C—2.5Y8/2灰白色（黄色がかった灰白色）



第7図 SK 401 (4~49) · SW 401 (50~73) 出土遺物実測図

【①層出土遺物】

T.P. +8.52~8.42mの間で検出した。径が10cm前後の小皿(4~21)18枚と19.2cmの大皿(22)1枚を図化した。口縁部の形態で分類すると、I類:4~11、II類:12~15、III類:16~21、22はII類となる。色調はすべてCに分類できる。平均口径はI類:9.5cm、II類:10.2cm、III類:10.5cmと差が認められる。特にI類とII・III類との口径差が大きい。これらの調整については、口縁部は一段の横ナデが施され、その他はナデ調整が行われている。以上の他、残存率が低いため、実測できなかった口縁部が12点ある。これらの形態はI類が10点、II類が2点、色調はすべてCである。これらを比率で表すとI類が60%を占め、II・IIIはそれぞれ20%を占めている。

【②層出土遺物】

T.P. +8.41~8.32mの間で検出した。小皿(23~48)26枚と大皿(49)1枚を図化した。口縁部の形態はすべてII類で、色調はA・Bが存在する。色調で分けるとA:23~45、B:46~48、49はAに分類できる。圧倒的にAが多く、小皿の88%を占める。平均口径はA・Bとも9.4cmで差は認められない。調整についても①層出土土器と同様、口縁部は1段の横ナデが施されており、その他はナデ調整が行われている。②層出土の土器皿のほとんどには底部から口縁部にかけて粘土接合痕が明瞭に残存している。これらの土器は、切りこみ円板技法によって製作されたものと考えられる。特に45には、粘土を重ね合わせた接合痕が内外面ともに明瞭に残存し、製作技法の一端を知ることができる。そして、②層出土の土器皿には、口縁部I・III類と色調Cは全く含まれておらず、特に色調においては①層出土の土器皿と明確な差が認められる。これらから上層には白色系の皿を、下層には褐色系の皿と意図的に分けて埋置されたことが推察できる。

S K 401から出土した土器皿は11世紀末~12世紀前半に比定できる。②層出土のII類には横ナデの強弱によって口縁部が若干外反するものも認められた。また、①層と②層出土の土器皿には、同じII類でも色調A・Bと色調Cには平均口径で0.8cmの差が認められた。

溝(S D)

S D 401

調査区の南東端から調査区中央へ伸びる溝である。平面形は南から北に向かって幅を減少させていく。断面形状は逆さまほこ形を呈し、深さは約0.1mである。埋土は10Y5/1灰色粘土(炭化物を少量含む)である。溝内からは、瓦器梶の小破片が出土したが、図化できなかった。

S D 402

調査区の南壁に沿って東西に伸びる溝で東側をS D 401に切られる。南肩を検出できなかったため、断面形状は不明である。埋土は10Y4/1灰色微砂混粘土である。出土した遺物は土器器、須恵器、瓦器の破片のみである。全て小破片のため図化できなかった。

土器集積(S W)

S W 401

S D 401の西肩部分で検出した。当初、S D 401内から土器片が出土したため、S D 401内出土遺物と考えていた。しかし、平面的にはS D 401を大きくえぐることが判明したため、独立した遺構とした(写真4)。S W 401はT.P. +8.53~8.43mの間で検出した。掘形を確認することはできなかったが、深さ約10cm、径約25cmの間から、小皿が23個体、大皿が1枚出土した。そのうち、小皿21枚がほぼ完形にまで復元できた。

〈出土遺物〉

図化できた遺物は24点(50~73)である。これらをS D 401で検出した土師器皿と同じ様に分類すると、口縁部の形態はすべてⅡ類で、色調はAとBに分けられる。その内訳はA:50~59、B:61~73で60はAとなる。これらを割合で示すとAが43%、Bが57%となり、S K 401②層出土土器とはわずかながら比率が逆転する。平均口径は色調A・Bとも9.4cmと差は認められない。これらの内、59のみ内外面とも煤が付着しており、灯明皿として使用されていた可能性がある。S W 401出土の土師器皿のほとんどにも底部から口縁部にかけて粘土接合痕が残存しており、これらも切りこみ円板技法によって作られたものであろう。また、73の底部にはY字のような線刻が確認できる。

S W 401出土の土器もS K 401同様、11世紀末~12世紀前半に比定できる。

5区

4区のすぐ南側に位置する調査区である。現地表(T.P.+10.15m)下2.6m(T.P.+7.4m)まで調査を行った。遺構の有無は確認できなかったが、508層から時期不明の土師器片が出土した。

6区

最南端に位置する調査区である。現地表(T.P.+10.18m)下約2.5m(T.P.+7.6m)まで調査を行った。結果、T.P.+8.4mの608層上面で土坑(S K 601)を検出した。

〈検出遺構〉

土坑(S K)

S K 601

調査区の南東端で検出した。S K 601は本来の遺構構築面で検出できたが、調査区の大部分を機械掘削時に掘り下げてしまっていたため、土坑の広がりやこれ以外の遺構の有無などは確認できていない。したがって、遺構の性格は不明であるが、ここでは土坑とした。埋土は5Y4/1灰色粘土(炭化物極少量含む)で、深さは約0.2mを測る。南東に向かって落ち込んでいる。出土した土器は土師器片と須恵器壺の体部のみで図化できなかった。

7区

現在の平野川の東側に位置する3つの調査区(7~9区)のなかで北西に位置する。現地表(T.P.+10.24m)下約3.0m(T.P.+7.2m)まで調査を行った。遺構の有無は確認できなかったが、701~703、705、706層から土器が出土している。しかし、いずれも小破片のため時期を明確にすることはできない。

8区

7区の南側に位置する調査区で現地表はT.P.+10.2mを測る。調査区西側に水道管が、東側に排水管が南北方向に設置されていたため、現地表下約1.5mまではほとんど搅乱されており、平面的な調査は行えなかった。地層も一部分でしか確認できなかった。805層から土師器が出土したが、小破片であるため、時期などは不明である。

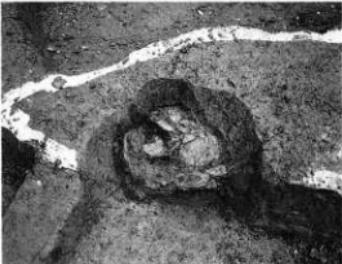


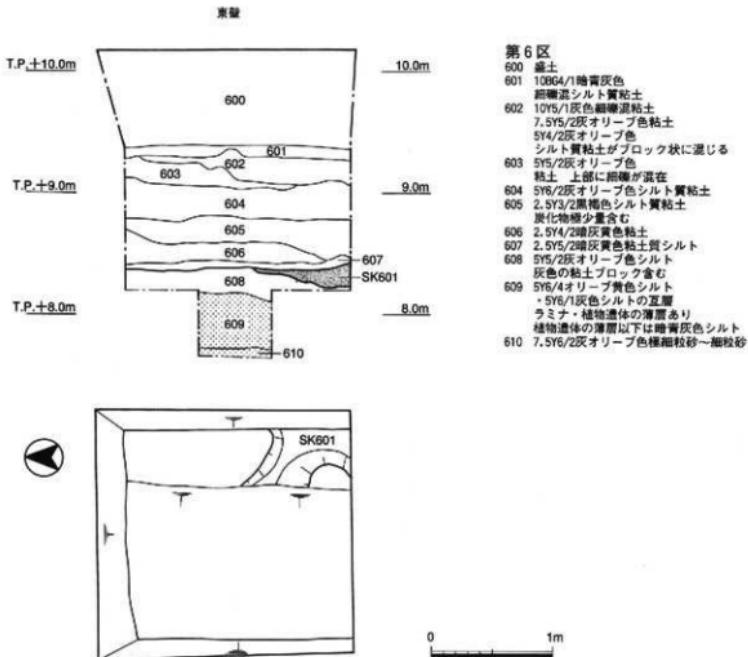
写真4 SW401遺物出土状況(北東から)

9区

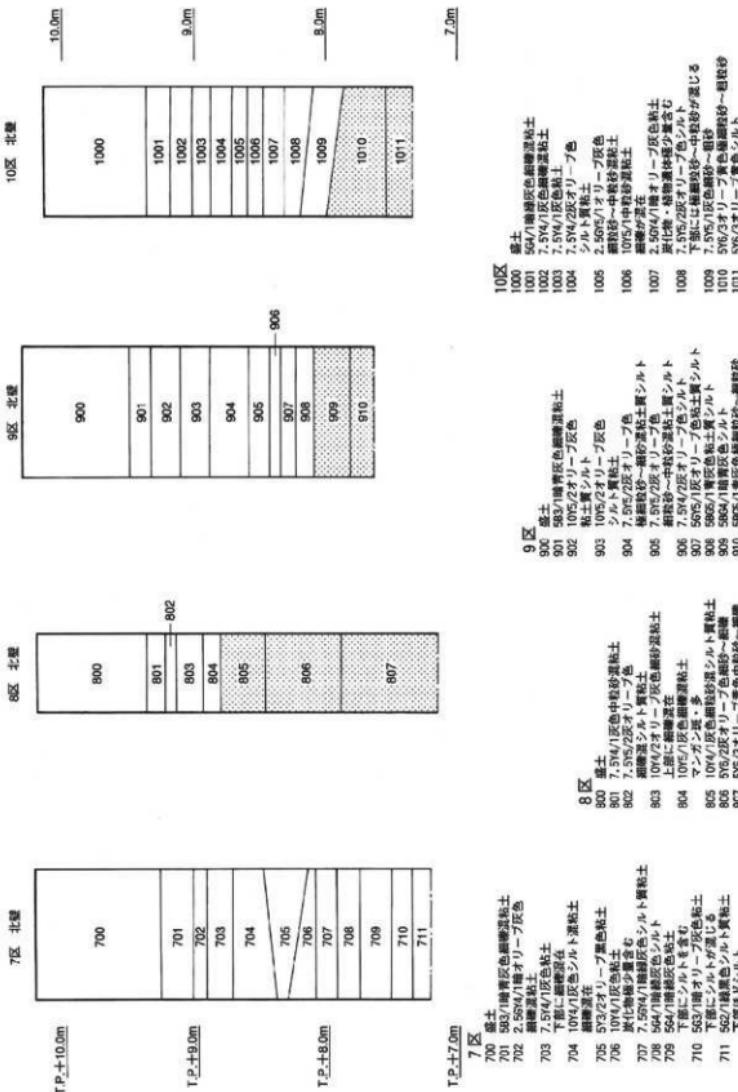
最東端に位置する調査区である。現地表 (T.P. +10.16m) 下約2.65m (T.P. +7.5m) まで調査を行った。遺構は確認できなかった。903層から土器器の小破片が出土したが時期などは不明である。

10区

4区から新設道路の既設のマンホールに至る、長さ約64m、幅約1.5mの細長い調査区である。調査は東側から開始した。1・2日目は7m分の調査(10-1区)を行い、その後、12日間で1日5mづつ調査(10-2区～10-13区)を行った。地層観察はすべて北壁で行った。現地表はT.P.+10.1～10.2mを測る。調査は工事掘削深度である現地表下約2.7～3.0m (T.P.+7.4～7.1m) まで行った。10区は東西に長い調査区であるが、堆積状況はほぼ同様で安定している。多少の高低差はあるが、現地表下約1.8～2.2m (T.P.+8.2～8.0m) で流水堆積層であるシルト～細礫層が確認できた。これは当地周辺を流れていた古平野川によって形成されたものであろう。この砂層は、調査区の西側で下部になるほど粗粒化し、中礫を含む堆積層となっている。このことから



第8図 6区平・断面図(S=1/40)



第59図 基本層序様式図7~10区(S=1/40)

10区の西側が流れの中心に近い部分であったことが推察できる。また、地層断面で確認できたのみであるが、10-8区で地震に伴う砂脈を確認した。この砂脈は1012層の砂が1007層中まで達していた。

〈検出遺構〉

遺構は、10-5区から井戸を1基(SE1001)、10-11区で土器溜1基(SW1001)を検出した。

井戸 (SE)

SE1001

10-5区から検出した井戸は、上部に瓦質の井戸側、下部に桶状の井戸側を用いている。上部の井戸側は3段分、下部の井戸側は2段分が確認できた。この井戸の構築時期などは不明である。しかし、調査区北側に広がる水田内に瓦質の井戸側を持つ井戸が現存しており、井戸側の最上部の高さがT.P.+9.0~9.3mと近似していることから、SE1001も最近まで使用されていた可能性が高い。

土器溜 (SW)

SW1001

10-11区では、T.P.+8.4m前後で須恵器の壺の破片や土師器、瓦器碗の破片等がやまとまった形で出土したため、これを土器溜とした。土器が出土した段階で平面精査を行ったが掘形は確認できなかった。

〈出土遺物〉

図化できたのは土師器皿(74~76)の3点である。

3枚とも形態はI類である。色調は76がA、74・75はBである。

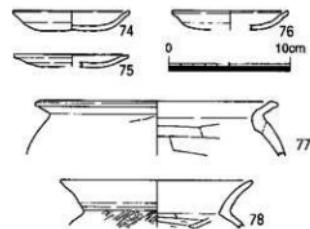
〈その他：10区から出土した遺物〉

10-8区から出土した。77は正確な出土層が不明であるが、おそらく1007層から出土したものと思われる。

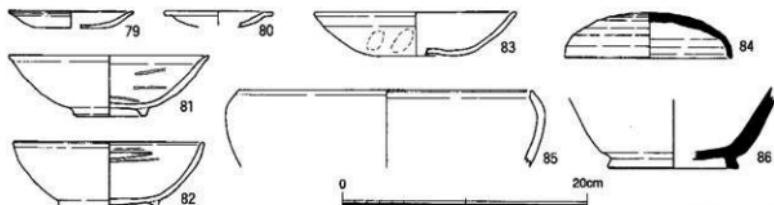
9世紀代の壺の口縁部である。78は1010層(砂層)から出土した。内面は頸部まで削りを施し、シャープな稜を成している。口縁は若干外反気味に立ちあがり、端部は丸くおさめる。時期は古墳時代初頭に比定できる。

〈調査区以外から出土した遺物〉

今回調査対象外であった開削部分の内、6ヵ所から遺物が表採された。これらは工事作業中に出土したものを工事関係者が採集していたものである。その内、良好な資料を報告することとした。表採された遺物のうち図化できたのは8点(79~86)である。それぞれ、79が2-4区间、80~82は3-4区间、83・84は5-6区间、85・86は7-8区间の開削部分から出土した。正確な出土位置、層位などは不明であるが、採集者によると、現地表下約1.6~1.8mで出土したものが多かったとのことである。時期は調査で検出した遺物と同じ時期のものが多くを占めるが、84のように古墳時代後期まで遡れるものもある。



第10図 SW1001出土(74~76)・1007層出土(77)・1001層出土(78) 遺物実測図



第11図 表探遺物実測図 2-4区間(79)・3-4区間(80~82)・5-6区間(83・84)・7-8区間(85・86) (S = 1/4)

表2) 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	遺構 番号	器種	法量	調整 技法	色調	胎土	焼成	備考
1	308層	瓦器碗	口径 (15.6) 器高 4.2	内外面ともヘラミガキ	5B1.7/1青黒色	精良	良好	1/6残存
2	308層	瓦器碗	口径 (17.1) 器高 5.1	内外面ともヘラミガキ	5B1.7/1青黒色	精良	良好	
3	308層	瓦器碗	底径 (5.2)	見込溝ヘラミガキ	5B1.7/1青黒色	精良	良好	
4	SK401 四	土師器皿	口径 9.3 器高 1.3	ナデの字状口縁	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	ほぼ完形
5	SK401	土師器皿	口径 9.5 器高 1.4	ナデの字状口縁	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	ほぼ完形
6	SK401 四	土師器皿	口径 9.4 器高 1.3	口縁端部はヨコナデ	2.5Y8/2灰白色	やや粗	良好	ほぼ完形
7	SK401	土師器皿	口径 (10.1) 器高 (1.7)	口縁端部はヨコナデ での字状口縁	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約1/5残存
8	SK401	土師器皿	口径 9.1 器高 1.5	口縁端部はヨコナデ での字状口縁	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	底部が一部欠損
9	SK401 四	土師器皿	口径 9.5 器高 1.3	口縁端部はヨコナデ での字状口縁	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約5/6残存
10	SK401 四	土師器皿	口径 9.4 器高 1.3	口縁端部はヨコナデ での字状口縁	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	ほぼ完形
11	SK401	土師器皿	口径 (9.6) 器高 1.3	口縁端部はヨコナデ での字状口縁	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約1/4残存
12	SK401	土師器皿	口径 (9.8) 器高 1.7	口縁端部はヨコナデ	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約2/3残存
13	SK401	土師器皿	口径 10.3 器高 1.8	口縁端部はヨコナデ	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約5/6残存
14	SK401 四	土師器皿	口径 10.4 器高 1.7	口縁端部はヨコナデ やや外反	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	完形
15	SK401	土師器皿	口径 10.4 器高 1.9	口縁端部はヨコナデ やや内反	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約2/3残存
16	SK401 四	土師器皿	口径 10.4 器高 1.7	口縁端部は強いヨコナデ 内面に段あり	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	完形
17	SK401	土師器皿	口径 10.4 器高 1.9	口縁端部は強いヨコナデ 内面に段あり	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約4/5残存
18	SK401 四	土師器皿	口径 10.6 器高 1.7	口縁端部は強いヨコナデ 内面に段あり	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	完形
19	SK401	土師器皿	口径 (10.4) 器高 (1.6)	口縁端部は強いヨコナデ 内面に段あり	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約1/3残存
20	SK401 四	土師器皿	口径 10.5 器高 1.8	口縁端部は強いヨコナデ 内面に段あり	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	完形
21	SK401 四	土師器皿	口径 10.6 器高 1.6	口縁端部は強いヨコナデ 内面に段あり	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	ほぼ完形
22	SK401	土師器皿	口径 (19.2) 器高 2.0	口縁端部は弱いヨコナデ	2.5Y8/2灰白色	精良	良好	約1/6残存
23	SK401 五	土師器皿	口径 9.2 器高 1.7	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR7/3に近い黄褐色	精良	良好	ほぼ完形
24	SK401	土師器皿	口径 9.5 器高 1.8	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR7/3に近い黄褐色	精良	良好	ほぼ完形
25	SK401 五	土師器皿	口径 8.7 器高 1.6	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR7/3に近い黄褐色	精良	良好	完形

遺物番号 図版番号	遺構 番号	器種	法量	調整 技法	色調	胎土	焼成	備考
26 五	SK401	土師器皿	器高 9.7 口径 1.8	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	ほぼ完形
27	SK401	土師器皿	器高 9.3 口径 1.7	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
28 五	SK401	土師器皿	器高 10.0 口径 1.7	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
29 五	SK401	土師器皿	器高 9.1 口径 1.5	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
30 五	SK401	土師器皿	器高 10.0 口径 1.5	口縁端部はヨコナデ 底部に指押さえ痕あり	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
31 五	SK401	土師器皿	器高 9.7 口径 1.5	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
32	SK401	土師器皿	器高 9.9 口径 1.6	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
33	SK401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.4	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	ほぼ完形
34	SK401	土師器皿	器高 9.4 口径 1.5	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
35 五	SK401	土師器皿	器高 8.6 口径 1.5	内外面ともナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
36	SK401	土師器皿	器高 9.3 口径 1.2	内外面ともナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	ほぼ完形
37	SK401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.5	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
38 五	SK401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.6	内外面ともナデ 底部に指押さえ痕あり	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
39	SK401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.3	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
40	SK401	土師器皿	器高 9.3 口径 1.2	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	約5/6残存
41	SK401	土師器皿	器高 9.0 口径 1.2	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
42	SK401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.1	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
43	SK401	土師器皿	器高 9.2 口径 1.5	内外面ともナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
44 五	SK401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.5	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
45 五	SK401	土師器皿	器高 9.4 口径 1.9	内外面ともナデ 粘土接合部が明瞭に残る	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	ほぼ完形
46 五	SK401	土師器皿	器高 9.2 口径 1.4	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好	ほぼ完形
47 五	SK401	土師器皿	器高 9.5 口径 1.3	口縁端部は弱いヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好	ほぼ完形
48	SK401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.3	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好	ほぼ完形
49 五	SK401	土師器皿	器高 14.7 口径 2.8	口縁端部はヨコナデ	2.5Y7/3浅黄色	精良	良好	完形
50 六	SW401	土師器皿	器高 9.3 口径 1.5	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
51	SW401	土師器皿	器高 9.5 口径 1.8	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
52 六	SW401	土師器皿	器高 9.5 口径 1.6	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
53	SW401	土師器皿	器高 9.5 口径 1.3	内外面ともナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	ほぼ完形
54 六	SW401	土師器皿	器高 9.6 口径 1.4	口縁端部はヨコナデ 底部は指押さえ痕あり	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	ほぼ完形
55	SW401	土師器皿	器高 9.7 口径 1.5	口縁端部はヨコナデ 底部は指押さえ痕あり	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	ほぼ完形
56 六	SW401	土師器皿	器高 9.8 口径 1.6	口縁端部はヨコナデ やや外反する	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形
57 六	SW401	土師器皿	器高 9.8 口径 1.9	口縁端部はヨコナデ 底部に粘土塊をつめた痕跡あり	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好	完形

遺物番号 団版番号	遺構 番号	器種	法量	調整 技法	色調	胎土	焼成	備考
58	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.8 1.6	口縁端部はヨコナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙色 内面:10YR8/2灰白色	精良	良好 ほぼ完形
59 六	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.9 1.7	口縁端部はヨコナデ	外面:10YR7/3にぶい黄橙色 内面:10YR4/1褐色	精良	良好 完形 内外面とも媒が付着
60	SW401	土師器皿	口径 高さ	(14.4) 3.3	口縁端部はヨコナデ	2.5Y8/1灰白色	精良	良好 約1/2残存
61	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.3 1.5	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 ほぼ完形
62	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.4 1.7	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 ほぼ完形
63	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.5 1.9	口縁端部はヨコナデ 底部は指押さえ痕あり	外面:10YR8/2灰白色 内面:10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好 ほぼ完形
64	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.8 1.6	口縁端部はヨコナデ 底部は指押さえ痕あり	10YR8/2灰白色	精良	良好
65 六	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.6 1.4	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 完形
66 六	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.7 1.2	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 完形
67	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.6 1.8	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 完形
68	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.6 1.7	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 ほぼ完形
69	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.7 2.1	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 約2/3残存
70	SW401	土師器皿	口径 高さ	(9.7) 1.2	口縁端部はヨコナデ やや外反する	10YR8/2灰白色	やや粗	良好 約1/3残存
71	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.7 1.5	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 ほぼ完形
72	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.6 1.7	口縁端部はヨコナデ 底部は指押さえ痕あり	10YR8/2灰白色	精良	良好 ほぼ完形
73 六	SW401	土師器皿	口径 高さ	9.6 1.6	口縁端部はヨコナデ	10YR8/2灰白色	精良	良好 ほぼ完形 底部に線割りあり
74	10-11 区・土塁	土師器皿	口径 高さ	(9.6) (1.7)	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好 約1/4残存
75	10-11 区・土塁	土師器皿	口径 高さ	(9.3) (1.1)	口縁端部はヨコナデ 湖底は丸くおさまる (ての字状口縁?)	10YR8/2灰白色	精良	良好 約1/8残存
76	10-11 区・土器桶	土師器皿	口径 高さ	(9.6) (1.6)	口縁端部はヨコナデ 湖底は丸くおさまる (ての字状口縁)	10YR8/2灰白色	精良	良好 約1/5残存
77	10-8区 1007- 1008層	土師器皿	口径 高さ	(20.0) (4.5)	外面部もナデ 特に内面はナデ	外面:10YR6/3にぶい黄橙色 内面:10YR7/4にぶい黄橙色	やや粗	良好 約1/6残存
78	10-8区 1011層	土器	口径 高さ	(15.6) (4.9)	外面:タキ 内面:ヘラケズリ	2.5Y5/2暗黄灰色	精良	良好 約1/6残存
79	2-4区	土師器皿	口径 高さ	(10.1) 1.4	口縁端部はヨコナデ 崩壊部は受け口状	7.5YR6/4にぶい橙色	精良	良好 約1/2残存
80	4-3区	土師器皿	口径 高さ	(9.0) (1.2)	口縁端部はヨコナデ ての字状口縁	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好 約1/6残存
81	4-3区	黒色土器 桶	口径 高さ 底径	(16.2) 5.0 (6.1)	外面:摩擦しており凹凸 内面:不明瞭	外面:10YR6/3にぶい黄橙色 内面:N2 黒色	やや粗	良好 約1/2残存
82	4-3区	黒色土器 桶	口径 高さ 底径	(15.5) 5.6 (8.2)	内外面とも摩擦しており 調整不規則(ヘラミガキ か)	N2/ 黒色(高黒)	精良	良好 約1/8残存
83	5-6区	土師器皿	口径 高さ	(16.4) 3.6	口縁端部はヨコナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	精良	良好 約1/8残存
84	5-6区	須恵器口 鉢	口径 高さ	(13.4) 3.8	外面:大井部は回転ケズリ 内面:回転ナデ	N7/ 灰白色	密	良好 約1/2残存
85	7-8区	土師器皿	口径 高さ	(24.0) (6.4)	底部はヨコナデ	2.5Y5/2暗黄灰色	精良	良好 約1/10残存
86	7-8区	須恵器 鉢	底径 高さ	(10.5) (5.6)	内外面とも回転ナデ	2.5Y8/4淡黄色	密	良好 約1/4残存

3.まとめ

今回の調査は、小規模な人孔部分が多くを占めた。しかし、4区と6区では平面的に遺構を検出することができた。特に4区ではSK401とSW401で土師器小皿がまとまって出土しており、当該期の良好な資料である。なかでも、SK401は、薄い板状木製品の周りに土師器小皿が3枚立てられた状態で出土しており、出土状況も興味深い。八尾市域での土師器皿の集積遺構は、八尾市教育委員会調査の跡部遺跡（83年度調査）や中田遺跡第8次調査などで検出されており、これらは地鎮祭祀に伴うものと報告されている。今回検出したSK401・SW401もほぼ完形の土師器皿がまとめて埋置されており、前記例と同様、祭祀に伴う遺構であると推察できる。当調査地周辺では、同時期の遺構が⑤・⑥でも検出されており、当調査地周間にも広がる可能性が高い。

さて、出土した土師器皿については、中田遺跡第8次調査では口縁部の形態で2種類、色調によって3種類に分類されており、市教委調査の跡部遺跡でも少なくとも2系統に分類できると報告されている。今回出土した土師器皿についても全体を観察した結果、口縁部の形態と色調によってそれぞれ3種類に分類することができた。口縁部の形態は技術系統の差を示し、色調は生産地の差を示すとされている。特に、SK401①層出土の色調CのII・III類は平均口径が他より大きい。^{註3} 加えて、器壁も厚く、全体的にはぼってりとしており、他とは明らかに系譜が異なる。また、I類は「て」の字状口縁と呼ばれるもので、形態が大きく異なる。前記の出土例でもひとつの遺構の中から複数の系統をたどれる土師器皿が出土している。以上のことから、複数の系統の土師器皿を使用することに何らかの意味があったものと推察できる。

そして、各調査区の最下層では流水堆積層である砂層（シルト～細礫）を確認できた。これは古平野川に相当する砂層であると思われる。古平野川は当地西約250mに位置する第9次調査ではT.P.+8.7~6.5m前後で検出されており、当調査地より若干高いレベルから砂層が検出されている。今回の調査では古平野川に相当する砂層からは弥生時代後期～古墳時代中期にかけての遺物が出土している。

今回の調査では、もうひとつ特筆すべき成果がある。それは調査対象外であった開削部分から出土した遺物の採集ができたことである。これらは工事関係者が工事中に出土した遺物を採集し、出土位置や出土レベル、出土年月日などを記憶して、手渡してくれたものである。このことは工事関係者の全くの好意であり、表探ながら、時代を推察できる遺物も含まれているため今回報告することとした。このように工事関係者の埋蔵文化財に対する理解を得られたことも一つの貴重な成果である。

- 註1 坪田真一1995「Ⅲ 中田遺跡第8次調査（NT91-8）」「中田遺跡」財団法人八尾市文化財調査研究会報告49で行われている土師器皿の分類方法を参照した。
- 註2 橋本久和1987「中世土器の製作技法ノート（1）」「中世土器の基礎研究Ⅲ」日本中世土器研究会
- 註3 伊野近富1987「かわらけ考」「京都府埋蔵文化財論集」第1集—創立五周年記念誌—（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

参考文献

- ・井西貴子・岡田清一・坪田真一 1993「太子堂遺跡<第1次調査・第2次調査報告書>」八尾市文化財調査研究会報告36（財）八尾市文化財調査研究会
- ・高萩千秋 1993「17 太子堂遺跡第4次調査（TS92-4）」「八尾市文化財調査研究会報告39」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・藤田道子・成海佳子 「Ⅶ 太子堂遺跡第3次調査（TS91-3）」
・成海佳子 「Ⅷ 太子堂遺跡第6次調査（TS94-6）」
上記2編1997『財団法人八尾市文化財調査研究会報告58』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 「14. 太子堂遺跡第7次調査（TS97-7）」
・高萩千秋 「15. 太子堂遺跡第8次調査（TS97-8）」
上記2編2000『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子 1999「16. 太子堂遺跡第9次調査（TS97-9）」「平成10年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・伊野近富 1995「1. 土師器皿」
・森 隆 1995「2. 黒色土器」
・尾上 実・森島康雄・近江俊秀「6. 瓦器輪」
上記3編は中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』「Ⅲ 土器・陶磁器」 真陽社



1区 西壁断面 (T.P. +10.0~ -8.3m)



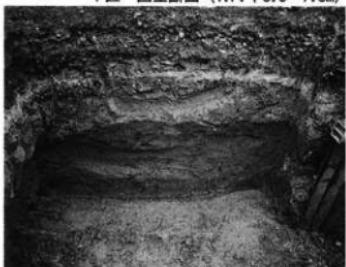
3区 北壁断面 (T.P. +9.8~ -8.3m)



1区 西壁断面 (T.P. +8.3~ -7.5m)



3区 北壁断面 (T.P. +8.5~ -7.7m)



2区 東壁断面 (T.P. +10.0~ -8.3m)



5区 西壁断面 (T.P. +10.0~ -8.5m)



2区 東壁断面 (T.P. +8.5~ -7.4m)



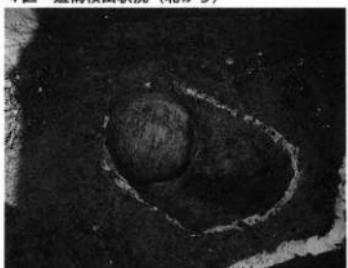
5区 西壁断面 (T.P. +9.8~ -7.5m)



4区 遺構検出状況（北から）



6区 遺構検出状況（西から）



4区 SK 401 板状木製品の検出状況（西から）



6区 SK 601 東壁断面（西から）



4区 北壁断面 (T.P. +8.5~7.0m)



6区 東壁断面 (T.P. +10.0~8.3m)



4区 最終掘削状況（西から）



6区 東壁断面 (T.P. +8.0~7.5m)



7区 北壁断面 (T.P. +10.0~8.5m)



9区 夜間調査状況 (西から)



7区 北壁断面 (T.P. +8.5~7.2m)



9区 北壁断面 (T.P. +10.0~7.5m)



8区 南壁断面 (T.P. +9.5~8.4m)



10-1区 挖削開始状況 (東から)



8区 最終掘削状況 (南から)



10-5区 近世井戸検出状況 (南から)



10-5区 北壁断面 (T.P. +9.5~8.2m)



10-8区 砂脈? 検出状況 (T.P. +8.65~8.1m)



10-5区 北壁断面 (T.P. +8.2~7.3m)



10-11区 土器混入状況 (南から) (T.P. +8.4m)



4



14



5



16



6



18



9



20

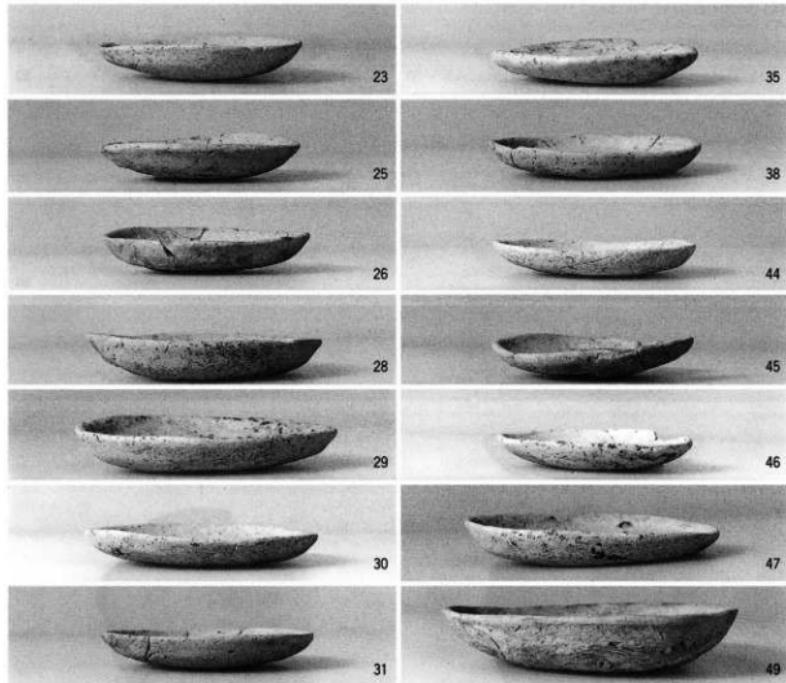


10

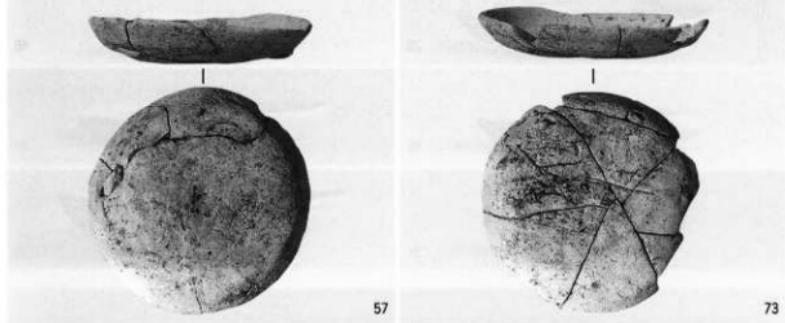
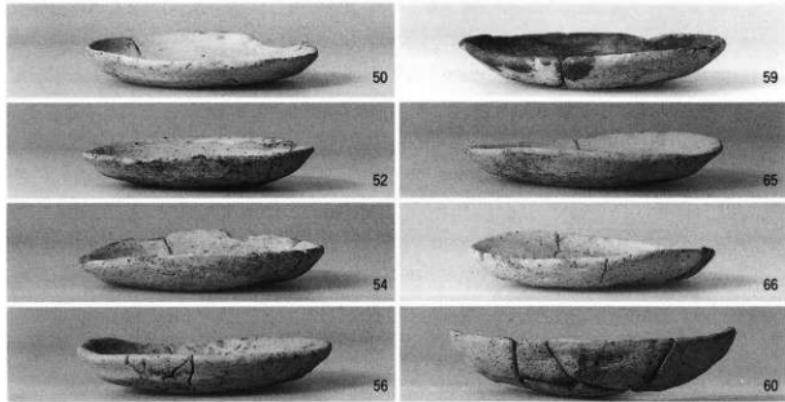


21

S K 401 ①層出土遺物



S K 401 ②層出土遺物



實 圖

本圖集是《東鄉遺跡》第55次調查（1999年）所作的一個片斷，內容為東鄉縣東鄉鎮小學村（現已撤并入東鄉鎮）東北側的東鄉遺跡。這是一處新石器時代遺址，其文化層厚約1米，出土有石器、陶器、骨器等。

X 東鄉遺跡第55次調查（TG99-55）

本圖集內容包括：地圖、地形圖、遺址分布圖、遺物分布圖、遺物分類圖、遺物說明、地圖說明、地質說明、土壤說明、植物說明、動物說明、人骨說明、地質剖面圖、土壤剖面圖、植物剖面圖、動物剖面圖、人骨剖面圖、地圖說明、土壤說明、植物說明、動物說明、人骨說明、地質剖面圖、土壤剖面圖、植物剖面圖、動物剖面圖、人骨剖面圖。

大 目 文 本

地圖	1
地形圖	2
遺址分布圖	3
遺物分布圖	4
遺物分類圖	5
遺物說明	6
地圖說明	7
地質說明	8
土壤說明	9
植物說明	10
動物說明	11
人骨說明	12
地質剖面圖	13
土壤剖面圖	14
植物剖面圖	15
動物剖面圖	16
人骨剖面圖	17

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市荘内町2丁目地内で実施した公共下水道工事（平成11年度小阪合排水区第5工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第55次（TG99-55）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第357号 平成11年10月18日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年2月3日～2月23日（実働8日間）にかけて、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約16m²である。
1. 現地調査にあたっては、飯塚直世、市森千恵子、加茂靖通の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成12年8月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－市森、岸田靖子、中西明美、図面トレース－市森、樋口、本書の執筆・写真撮影及び編集－樋口が担当した。

本 文 目 次

1.はじめに	101
2.調査概要	103
1) 調査の方法と経過	103
2) 基本層序	105
3) 検出遺構と出土遺物	109
3.まとめ	111

X 東郷遺跡第55次調査 (TG99-55)

1. はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす冲積作用によって形成されている。今回報告する東郷遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市のはば中央に位置する。現在の行政区画では、本町1・7丁目、東本町1～5丁目、北本町2丁目、光町1・2丁目、桜ヶ丘1～4丁目、莊内町1・2丁目の東西約1.1km、南北約0.9kmがその範囲と推定されている。

当遺跡は、昭和46年に東本町2丁目において水道管敷設工事が行われた際、現地表下約1.5mの所で墨書き人面土器等が発見され（西岡1977）、その存在がはじめて確認された。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター・当調査研究会による多次にわたる調査の結果、弥生時代時代中期～近世に至る複合遺跡として認識されている。

今回の調査地である莊内町2丁目付近は、東郷遺跡の南東部に位置し、南北に走る府道八尾道明寺線を挟んで東側には小阪合遺跡が、東西に伸びる府道大阪港八尾線を挟んで南側には成法寺遺跡がそれぞれ隣接する。周辺では、これまでに2箇所で比較的大規模な調査が実施され、平面的な遺構の広がりが明らかにされつつある。以下、これらの調査地について概説していくと、まず、当調査地の西側に隣接する第43次調査地では、T.P.+7.4m前後において、古墳時代前期～鎌倉時代にかけての遺構面を検出している。この内、古墳時代前期の遺構としては、土器棺墓を2基検出しており、当地が墓域として機能していたことが推測される。また、鎌倉時代後期に比定される柱穴も確認されており、この時期には居住域に変貌を遂げていたことが明らかにされた（高萩1994）。一方、当調査地の東に隣接する小阪合遺跡内で実施された（財）大阪府文化財調査研究センターの調査では、弥生時代～鎌倉時代の遺構が多数検出されている（駒井・本間1998）。以下、時代順に見ていくと、弥生時代では、後期以前の水田が見つかっており、古楠根川を利用した生産域が広がっていたと推測される。古墳時代初頭では、堅穴住居が2棟検出されており、当地が居住域として利用されていたようだ。中期に入ると、掘立柱建物をはじめ多量の遺物も出土していることから、居住域として機能していたことは確実である。一方、奈良時代～平安時代にかけては、引き続き居住域を形成する遺構群が検出されているほか、河川内からは、牛や馬の骨とともに和同開珎などの和銭が52枚出土している。この河川内遺物の出土状況は、祭祀を行った可能性が指摘でき、当地の北部に位置する東郷廃寺（酒1995）とともに、祭祀を執り行う居住域、つまり寺院や官衙的な施設の存在を垣間見ることができそうである。平安時代後期～鎌倉時代にかけては、居住域に関連する遺構として曲物井戸が挙げられるが、これ1基だけであり、居住域を形成していたかの判断は難しい。むしろ動溝が多数検出されているところをみると、生産域に変わりつつあったのかもしれない。



2. 調査概要

1) 調査方法と経過

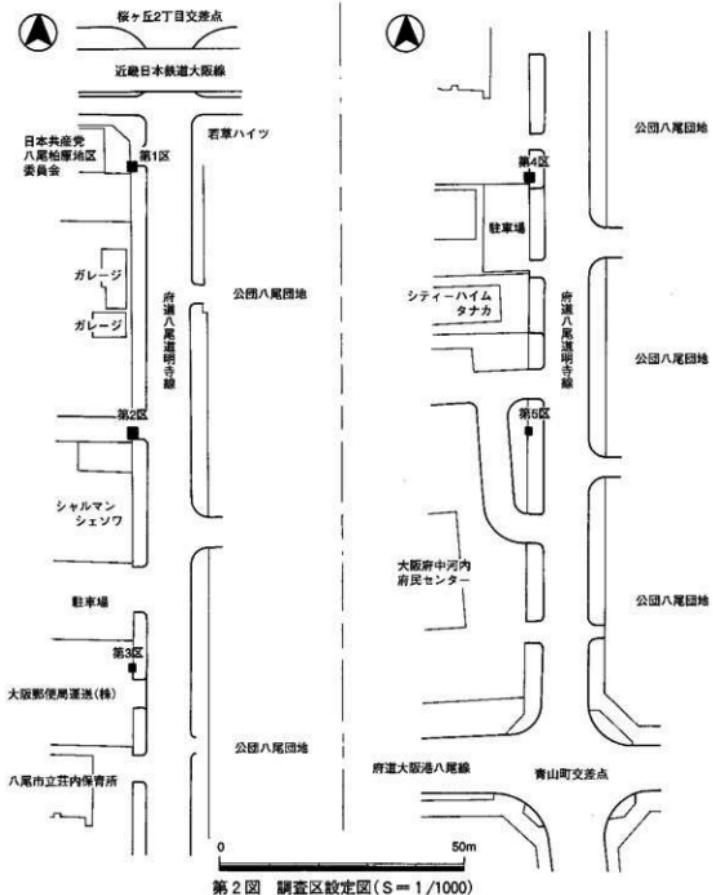
今回の発掘調査は、八尾市莊内町2丁目地内の公共下水道工事(11-5工区)に伴うもので、当調査研究会が東郷遺跡内で実施した第55次調査(T G99-55)にあたる。調査は、東西約2m、南北約250mの細長い範囲において、約1.8m四方の人孔部分5箇所(北から順に、第1区~

表1 調査地一覧表(地図番号は第1図に対応)

地図番号	調査名	調査地番	調査原因	調査面積(m ²)	調査期間	調査機関
TG6	TG81-6	桜ヶ丘2丁目9地	社会保険事務所新築建設		昭和56年7月25~8月8日	市教委
TG23	TG86-23	莊内町1丁目	共同住宅建設	596	昭和62年2月16日~3月18日	八文研
TG26	TG87-26	莊内町1丁目28~31	地下貯蔵建設	49	昭和63年1月16日~1月29日	八文研
TG33	TG90-33	桜ヶ丘1丁目39	共同住宅建設	200	平成2年5月10日~6月1日	八文研
TG39	TG92-39	莊内町2丁目	公共下水道工事	50	平成4年10月26日~11月7日	八文研
TG42	TG93-42	莊内町1丁目28~10	共同住宅建設	208	平成5年12月1日~12月13日	八文研
TG43	TG93-43	莊内町2丁目15・16・17・18	共同住宅建設	300	平成5年12月13日~12月27日	八文研
TG47	TG94-47	桜ヶ丘34・37	共同住宅建設	760	平成6年8月1日~9月30日	八文研
TG48	TG94-48	桜ヶ丘1丁目23・24	共同住宅建設	630	平成6年10月24日~12月14日	八文研
TG50	TG95-50	莊内町36-1・37	共同住宅建設	190	平成8年1月10日~1月24日	八文研
TG52	TG96-52	桜ヶ丘1丁目88・89・90-1	共同住宅建設	180	平成8年10月29日~11月12日	八文研
TG55	TG99-55	莊内町2丁目	公共下水道	16	平成12年2月3日~29日	八文研
TGT1	TGT99-1	桜ヶ丘2丁目234-1	店舗付学生寮建設	120		八文研
KS7	KS86-7	小阪合町1・2丁目	河川改修工事	732	昭和61年4月5日~8月8日	八文研
KS8	KS86-8	青山町1・2丁目	南小阪合区画整理事業	998	昭和61年8月25日~12月10日	八文研
KS9	KS87-9	小阪合町1・2丁目	河川改修工事	330	昭和62年4月7日~7月31日	八文研
KS21	KS91-21	若草町25-1・25-4・25-5・27・28	共同住宅建設	300	平成4年1月8日~2月10日	八文研
KS22	KS92-22	若草町23-1・23-4・23-..・23-7・23-8	共同住宅建設	200	平成4年8月5日~8月28日	八文研
KS36	KS97-36	若草町地内	公共下水道工事	12	平成10年2月9日	八文研
府1		桜ヶ丘・堀ヶ丘地内	猿河川拂根川改修工事		昭和62年5月~昭和63年11月	府教委
府2		若草町地内	府営住宅建設	6697	平成9年12月26日~平成10年12月25日	センター
府3		莊内1丁目地内	府道拡張工事		平成7年~平成8年	府教委
府4		高美町地内	府道拡張工事		昭和62年~平成4年	府教委
府5		青山町地内	府道拡張工事			府教委
市1	東郷廐寺遺跡 94-730	桜ヶ丘2丁目59	事務所付庫建設		平成3年4月22日~5月1日	市教委
市2		小阪合町1丁目	公共下水道工事	20	昭和61年2月7日~8日	市教委
市3	小阪合遺跡 95-104	青山町1丁目35-4~7-40-3	診療所及び住宅建設		平成7年6月6日~7月12日	市教委

調査機関 府教委: 大阪府教育委員会 市教委: 八尾市教育委員会 センター:(財)大阪府文化財調査研究センター

八文研:(財)八尾市文化財調査研究会



第5区と呼称する)を対象とする極めて点的なもので、調査総面積は約16m²を測るに過ぎない。掘削に際しては、市教育委員会の指示書に基づき、現地表下0.7~1.0m前後までは機械掘削とし、それ以下の0.5~0.8mについては機械と人力を併用しながら掘り進めていき、遺構・遺物の検出に努めた。なお、今回の調査では、可能な限り工事掘削深度まで立会い調査を行い、下層の堆積状況の把握に努めた。

調査期間は、平成12年2月3日~2月23日(実働8日間)までである。

2) 基本層序

ここでは、各調査区で確認された地層について概説していく。

第1区

第100層 客土・盛土。

第101層 2.5Y5/1オリーブ灰色粗粒砂～極粗粒砂混シルト(中疊も含む)。攪拌を受けたと思われる非常に汚れた地層である。グライ化が顕著である。旧耕土に相当すると推測される。

第102層 2.5Y4/4オリーブ褐色中疊混粘土質シルト(雲状のマンガンを含む)。上方において植物遺体が多く混在する。粒度組成は上方から下方に向かうにつれて細粒化の傾向にある。

第103層 5Y5/2灰オリーブ色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト(雲状のマンガンを含む)。

2.5Y4/2暗灰黄色粘土のブロックが認められる。土器片も含まれる。土壤化層か。

第104層 2.5Y4/3オリーブ褐色～2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト～シルト。上方では粘土質シルトが優勢である。2.5Y4/1黄灰色粘土質シルトのブロックを含む。炭化物を極少量含む。土器片を極少量含む。

第105層 10YR6/6明黄褐色～2.5Y5/4黄褐色粘土質シルト～中疊。水平に発達したラミナ構造をもつ流水堆積層である。粒度組成は、下方において粗粒砂～中疊が優勢であり、上方に向かうにつれて細粒化の傾向にある。下方では水平方向に発達したラミナ構造が顕著に観察できる。

第106層 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土～シルト(マンガン斑を極少量含む)。シルトが部分的に認められるが、ラミナ構造をもつのかは判別しにくい。粘性が強い本層は、湿地帯のような水浸かりの環境下で形成された地層と推測される。

第107層 2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土～シルト。炭化物を極少量含む。土器片も散在する。本地層は、締まりも悪く、攪拌を受けているようだ。水田耕土に相当するものと思われる。一部、畦畔に相当すると推測される5Y4/1灰色中疊混粘土を盛り上げた所も観察できた。

第108層 5Y4/1灰色粗粒砂～細疊混粘土質シルト。西壁の一部分でしか観察できなかつたため、不確定要素を多分に含むが、地層全体の締まりは悪く、人為的に埋め戻したような層相を呈する。したがって遺構内埋土の可能性も考えられる。

第109層 2.5Y4/2暗灰黄色細疊混粘土質シルト～シルト。上方では細疊が散在し、土壤化の影響で汚れているようだ。下方に向かうにつれてシルトが優勢になる。下方では雲状のマンガンも多く含む。

第110層 2.5Y5/3黄褐色シルト(マンガン斑を極少量含む・雲状のマンガンを多く含む)。水成層である。

第111層 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト～極粗粒砂。上方に向かうにつれて細粒化する流水堆積層である。下方では水平方向に発達したラミナ構造が顕著に観察される。

第112層 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂～細疊。流水堆積層である。

第2区

第200層 客土・盛土。

第201層 5Y4/2灰オリーブ色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト。炭化物や植物遺体が散在する。グライ化も著しい。攪拌を受けていることから、旧耕土に比定される地層である。

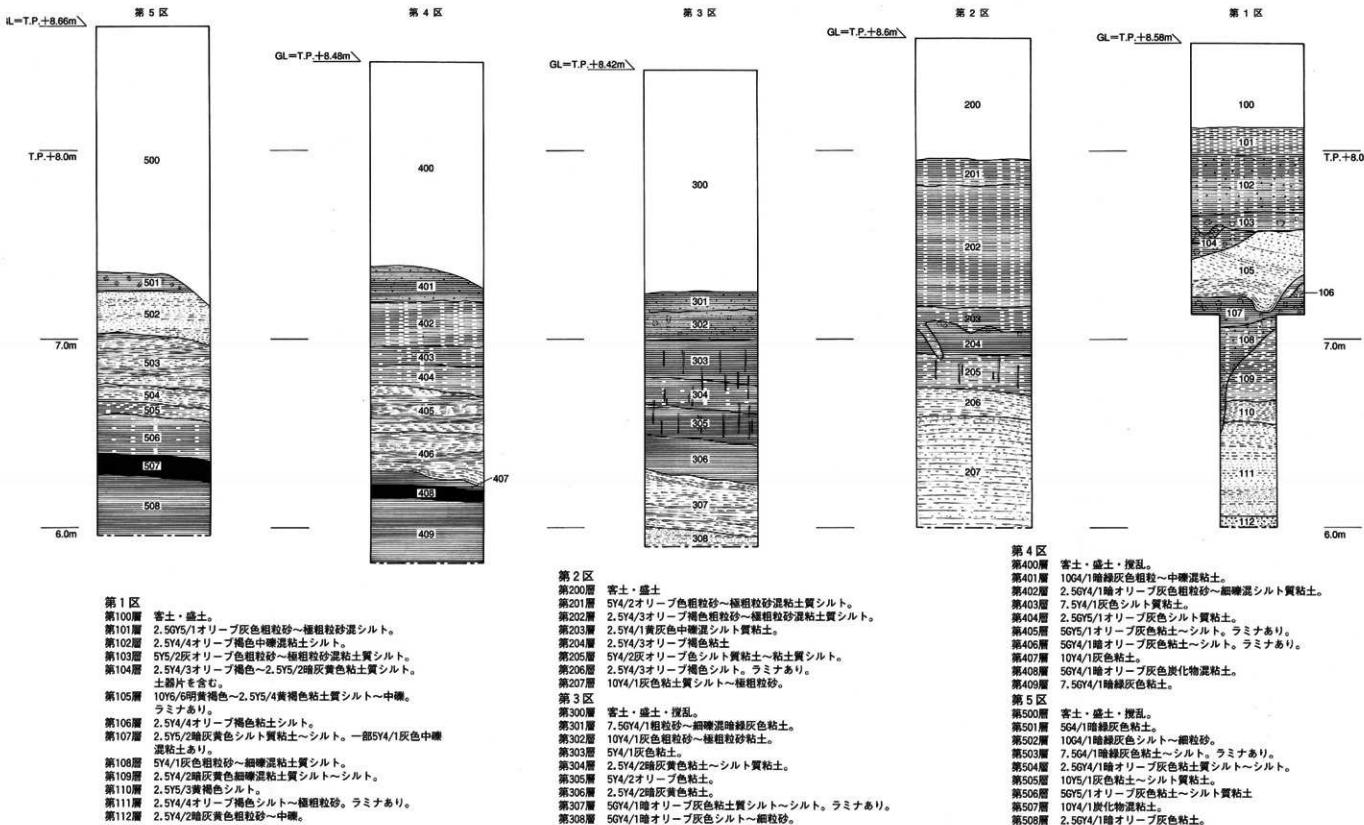
- 第202層 2.5Y4/3オリーブ褐色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト（マンガン斑・雲状のマンガンを多く含む）。地層全体に土器片が散在するその様は、堆積構造的には、自然に形成されたものとは考えにくい。おそらく人工的に盛り上げたものであろう。整地層か。
- 第203層 2.5Y4/1黄灰色中疊混シルト質粘土（マンガン斑を含む）。非常に汚れた地層で、ブロックが認められる。土器片も比較的多く含む。本報告では地層として捉えているが、巨視的には遺構内埋土の可能性も考えられる。
- 第204層 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土（酸化鉄分斑を含む・マンガン斑を少量含む）。上方では、第203層のブロックが多く混在する。これは第203層形成時の影響である。
- 第205層 5Y4/2灰オリーブ色シルト質粘土～粘土質シルト。上面にはマンガンが多く認められ、また、よく縮まっている。下方ではマンガン斑が顕著に観察できる。部分的にシルト質に富むところがあるが、ブロック状に混在するものではないため、湿地性の堆積層であろう。2.5Y4/1黄灰色粘土を充填させた根痕も多く認められる。
- 第206層 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト。南から北に若干下がるラミナ構造を有する水成層である。
- 第207層 10Y4/1灰色粘土質シルト～極粗粒砂（雲状のマンガンを含む）。流水堆積層である。ただしラミナ構造は観察できない。

第3区

- 第300層 客土・盛土（調査区西部分については上方：コンクリート・下方：バラスである）。
- 第301層 7.5GY4/1粗粒砂～細疊混暗緑灰色粘土。地層は水分を充分に含み、縮まりは悪い。攪拌を受けているためか、淘汰は不良である。
- 第302層 10Y4/1灰色粗粒砂～極粗粒砂粘土（マンガン斑を極少量含む）。攪拌を受けているせいか、ブロックを多く含む。
- 第303層 5Y4/1灰色粘土（雲状のマンガンを多く含む・下方ではマンガン斑が優勢）。第302層と比較すると、本層のほうが縮まった地層である。地層全体に、10Y4/1灰色粘土を充填する根痕が多く分布する。
- 第304層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土～シルト質粘土（雲状マンガンを多く含む）。上方では、マンガン斑が顕著に認められ、しかもよく縮まっている。土壤化の影響を受けているのかもしれない。地層全体に、10Y4/1灰色粘土を充填する根痕が多く分布する。
- 第305層 5Y4/2灰オリーブ色粘土（雲状の酸化鉄分を多く含む）。本層の粘性の強さは、泥状の堆積層を示す。地層全体に、10Y4/1灰色粘土を充填する根痕が多く分布する。
- 第306層 2.5Y4/2暗灰黄色粘土（雲状の酸化鉄分を多く含む）。粘性に富む地層である。第303層～第305層で認められた根痕は、本層まで達していない。
- 第307層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルト。水平方向に発達したラミナ構造をもつ流水堆積層である。
- 第308層 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～細粒砂。流水堆積層である。

第4区

- 第400層 客土・盛土（調査区西部分については上方：コンクリート・下方：バラスである）。
- 第401層 10G4/1暗緑灰色粗粒砂～中疊混粘土。グライ化が著しく、攪拌を受けた地層である。
- 第402層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粗粒砂～細疊混シルト質粘土（雲状のマンガンを多く含む）。



第3図 基本層序模式図(S = 1/20)

本層も攪拌を受け、汚れた地層である。

- 第403層 7.5Y4/1灰色シルト質粘土（マンガン斑を極少量含む・下方では管状の酸化鉄分を多く含む）。
- 第404層 2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土（管状の酸化鉄分を多く含む）。上方は、比較的硬く縮まっており、土壤化している可能性が高い。土器を含む。
- 第405層 5GY1/1オリーブ灰色粘土～シルト。ラミナ構造をもつ流水堆積層である。
- 第406層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト。ラミナ構造をもつ流水堆積層である。炭化物も混在する。
- 第407層 10Y4/1灰色粘土。粘性に富む湿地性の堆積層である。
- 第408層 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。微細な炭化物を多量に含む地層である。
- 第409層 7.5GY4/1暗緑灰色粘土。粘性に富む湿地性の堆積層である。

第5区

- 第500層 客土・盛土（調査区西部分については上方：コンクリート・下方：バラスである）。
- 第501層 5G4/1暗緑灰色粘土。10Y4/1灰色シルト～極細粒砂のブロックを含む地層である。このブロックは攪拌を受けたために混在したものである。
- 第502層 10G4/1暗緑灰色シルト～細粒砂（マンガン斑を極少量含む）。ラミナ構造は明瞭に観察できないが流水堆積層である。
- 第503層 7.5GY4/1暗緑灰色粘土～シルト（管状のマンガンを極少量含む）。ラミナ構造をもつ流水堆積層である。
- 第504層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルト（雲状のマンガンを多く含む）。ラミナ構造は明瞭に観察できないが流水堆積層である。
- 第505層 10Y5/1灰色粘土～シルト質粘土（雲状のマンガンを多く含む）。
- 第506層 5GY5/1オリーブ灰色粘土～シルト質粘土（雲状のマンガンを多く含む）。第505層よりも粘性に富む。
- 第507層 10Y4/1灰色粘土。微細な炭化物を多量に含む地層である。
- 第508層 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。夾雜物を含まないピュアな地層である。

3) 検出遺構と出土遺物

①検出遺構

今回の調査では、各調査区の面積が狭い上、しかも各調査区の東側を既設の水道管が南北に走っており、その埋設に伴う搅乱の影響や湧水により平面的な調査は困難を極めた。以上の理由から、残念ながら平面的に遺構を検出することはできなかった。

②出土遺物

第1区

第107層内出土遺物（1～3）

土師器・須恵器・瓦器の細片が19点出土した。この内図化が可能であったものは3点（1～3）である。1は須恵器杯身の細片である。底部は平底と考えられる。2・3は須恵器の体部～高台部である。器種は、高台径から判断して、小型の壺などが考えられる。いずれも細片であるため

断定できないが、概ね8～9世紀代に属する遺物と推測される。

第2区

第203層内出土遺物（4・5）

土師器・須恵器・瓦器・青磁・平瓦の細片が22点出土した。この内図化できたものは2点（4・5）のみである。4は土師器高杯の柱状部で、内面には絞り痕が認められる。5は青磁碗の口縁部である。

第205層内出土遺物（6）

土師器高杯の裾部が1点（6）出土した。外面は横方向のミガキが密に施される。大きく開く裾部の形状から、古墳時代初頭（庄内式期）の楕形高杯が想定される。

第3区

出土遺物はなし。

第4区

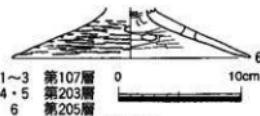
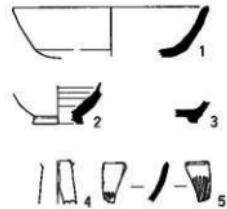
第404層内出土遺物（7～19）

土師器が細片を含めて110点出土した。その内図化できたのは、壺4点（7～10）、高杯1点（11）、壺6点（12～17）、小型器種2点（18・19）である。これらの土器群は、概ね古墳時代初頭（庄内式期）～前半（布留式期）に属するものである。

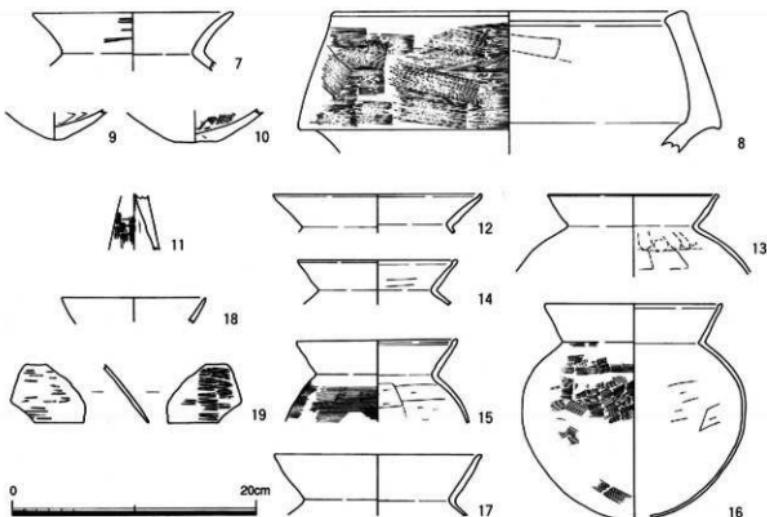
7は広口壺の口縁部～頸部である。摩滅が激しく調整は断定できないが、おそらく口縁部外面は横ナデ、内面は板状の工具による横方向のナデをそれぞれ施しているものと推測される。8は大型の複合口縁壺の口縁部で、内・外ともにハケナデを施す。胎土には角閃石が多く含まれることから、生駒西麓産の土器である。9・10は底部である。いずれも胴部にかけて大きく開く形態を有することから、器種は壺と推測される。11は外面にハケナデ後ヘラミガキ調整を行う高杯の柱状部で、内面には絞り痕も認められる。12は壺の口縁部～頸部である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁端部をわずかに摘み上げる形態を有する。生駒西麓産の胎土を用いる。13は、口縁端部がほぼ水平な平坦面を形成しつつ、わずかに内側に肥厚する形態の壺である。調整は体部内面に横方向のケズリを行い、その後頸部付近に指ナデを施す。頸部の屈曲はやや丸みをもつ。胎土には角閃石を含まず、色調は10YR7/3にぶい黄橙色を呈する。14～16は口縁端部が丸みをもち、内側に肥厚する形態を有する壺である。この内14は焼成が極めて良好で、一見須恵器と見間違えるほどである。15・16は、体部外面が上半部を縱方向のハケナデ後横方向のハケナデを、下半部が縱方向のハケナデを施す。体部内面はケズリ調整を行うが、頸部屈曲部までは及んでいない。15の体部外面にはヘラ状の工具で刻んだと思われる記号文（？）が3ヶ所認められる。17は口縁端部が丸く終わる形態の壺の口縁部である。頸部の屈曲は不明瞭で、わずかに内湾する口縁部をもつ。調整は摩滅が激しいため明確でないが、内・外ともに横ナデを施しているものと推測される。18は小型丸底壺の口縁部と推測される。摩滅が激しく調整は不明。19は器台の裾部である。内・外ともに横方向のミガキを密に施す。

第5区

出土遺物はなし。



第4図
第1区、第2区出土遺物実測図(S=1/4)



第5図 第404層内出土遺物実測図(S=1/4)

3.まとめ

今回の調査地は、極めて小面積であり、しかも点的な調査でありながら、東郷遺跡南東部と小阪合遺跡北東部の東西方向の平面的な広がりを理解する上で極めて重要な地点であったといえる。残念ながら、明確な遺構は検出できなかったが、地層観察や遺物の出土状況などから、地層そのものが遺構の可能性が高いものも数例認められたことは有意義であった(表2)。

一方、地層の堆積構造から、当地の古環境を暗示する成果も得ることができた。以下では、各調査区で確認された地層の対応関係を明確にし、地層の広がりを把握することを試み、まとめにかえたい。なお、第1区～第5区までの各地層はそれぞれ平面的に対応するはずであるが、それを裏付ける根拠に乏しいことなどから、便宜上第1区～第3区と、第4区・第5区とを別々に分けて考えていくことにする。

まず第1区～第3区については、弥生時代後期以前については、第2区周辺に流れの中心をもつ河川(第110層～第112層・第206層・第207層・第307層・第308層が相当)が存在したようだ。その後は排水不良の湿地帯のような環境(第109層・第204層・第205層・第303層～第306層が相当)を呈していたようである。そしてそれらが干上がり、「遺構?」(第107層・第108層・第203層)が形成されたものと推測される。「遺構?」の時期については、年代の指標となるべき遺物が少ないため困難を極めるが、第203層については、第43次調査地で検出された古墳時代前期～中世頃の遺構面に対応する可能性が高く、そのあたりの時期を考えたい。この第203層は、湿地性の地層が土壤化した段階で構築されたものと推測されるが、同様の条件下で形成された遺構として第

表2 遺構の可能性が高い地層一覧表

調査区名	地層名	標高(T.P.+値)	主な出土遺物	時代	備考
第1区	第102層	8.0m	なし	中世以降	土器片を少量含む地層である。人為的に形成された地層と思われる。整地層か。
第1区	第104層	7.5m	なし	中世以降	ブロックを多く含む地層である。人為的に埋め戻しているようだ。
第1区	第107層	7.2m	須恵器小型蓋高台 須恵器杯身片	平安後期～ 中世	擾拌を受けたような層相は水田耕上を彷彿させる。一部鉢群状の高まりも存在する。
第1区	第108層	7.1m	なし	古墳前期～ 中世	地層全体の繕まりが悪く、人為的に埋め戻したような層相を呈する。
第2区	第202層	7.8m	土師器細片	中世以降	地層全体に土器片が散在するその様子は、堆積構造的には、自然に形成されたものとは考えにくい。おそらく人為的に盛り上げたものであろう。整地層か。
第2区	第203層	7.2m	土師器細片 白磁碗細片	古墳前期～ 中世	ブロックを多く含む非常に汚れた地層である。人為的に埋め戻しているようだ。
第4区	第404層	6.9m	土師器壺並 上師器壺	古墳前期	庄内式～布留式土器を多く含む地層である。土器は水流による摩滅を受けておりらず、人為的にそこに捨てたような出土状況であった。

108層が挙げられる。仮に第108層が遺構であるならば、第203層と同時期を与えてても大差はないものと思われる。したがって第107層については、時期的に第108層・第203層より新しくなることはまちがいない。なお(財)大阪府文化財調査研究センターの小阪合遺跡の調査では、平安時代後期～鎌倉時代かけての鍛冶を中心とした生産域が広がっていた可能性を指摘しているが、第107層はその生産域の西方への広がりを示す成果かもしれない。その後、第1区では第105層で明らかのように一時期河川が存在したようで、その河川が機能を失った後遺構（第104層が相当）が構築された可能性が高い。また、第102層や第202層のような人為的に整地を行った地層が認められる。同様の地層は、第1区の北約50mの地点で実施した第52調査地（高萩1998）でも確認されているが、ここでは、この整地層が平安時代末頃に形成されたことが明らかにされている。

次に第4区・第5区を見ていくと、弥生時代後期以前については、第407層～第409層・第506層～第508層のような粘土優勢の堆積層が続く。おそらく湿地のような水浸かりの環境であったと推測される。その後、第405層・第406層・第503層～第505層のようなラミナ構造が顕著に残る流水堆積層が形成される。この流水層が埋没した後に、第404層のような庄内式土器や布留式土器を含む地層（遺構？）が形成されるようだ。これ以降は、再び閉塞的な湿地帯のような環境になるようであるが、おそらく当地周辺を流れていたと思われる河川の後背湿地にあたっていたものと推測される。以上が今回の調査の成果である。

引用・参考文献

- ・西岡三四郎 1977 「人面土器」『八尾市史(文化財編)』八尾市役所
- ・高萩千秋 1994 「X IV 東郷遺跡第43次調査(TG93-43)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・駒井正明・本間元樹 1998 「小阪合遺跡発掘調査終了報告」(財)大阪府文化財調査研究センター
- ・道 章 1995 「東郷廃寺発掘調査報告」「八尾市文化財紀要?」八尾市教育委員会
- ・高萩千秋 1998 「X IV 東郷遺跡第52次調査(TG96-52)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・若林邦彦 1999 「第Ⅲ章 考察 第2節 河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷」「河内平野遺跡群の動態Ⅶ」大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター



第1区西壁（水糸=T.P.+7.0m）



第2区西壁（水糸=T.P.+7.5m）



第3区西壁



第3区周辺状況〔後方は平成9・10年度(財)大阪府文化財調査研究センター実施の小阪合遺跡調査地〕
(南西から)



第4区西壁



第4区周辺状況〔後方は荘内保育所〕(南東から)



第5区西壁（水糸=T.P.+6.5m）



第5区周辺状況〔右後方は大阪府中河内府民センター〕
(北東から)



13



15

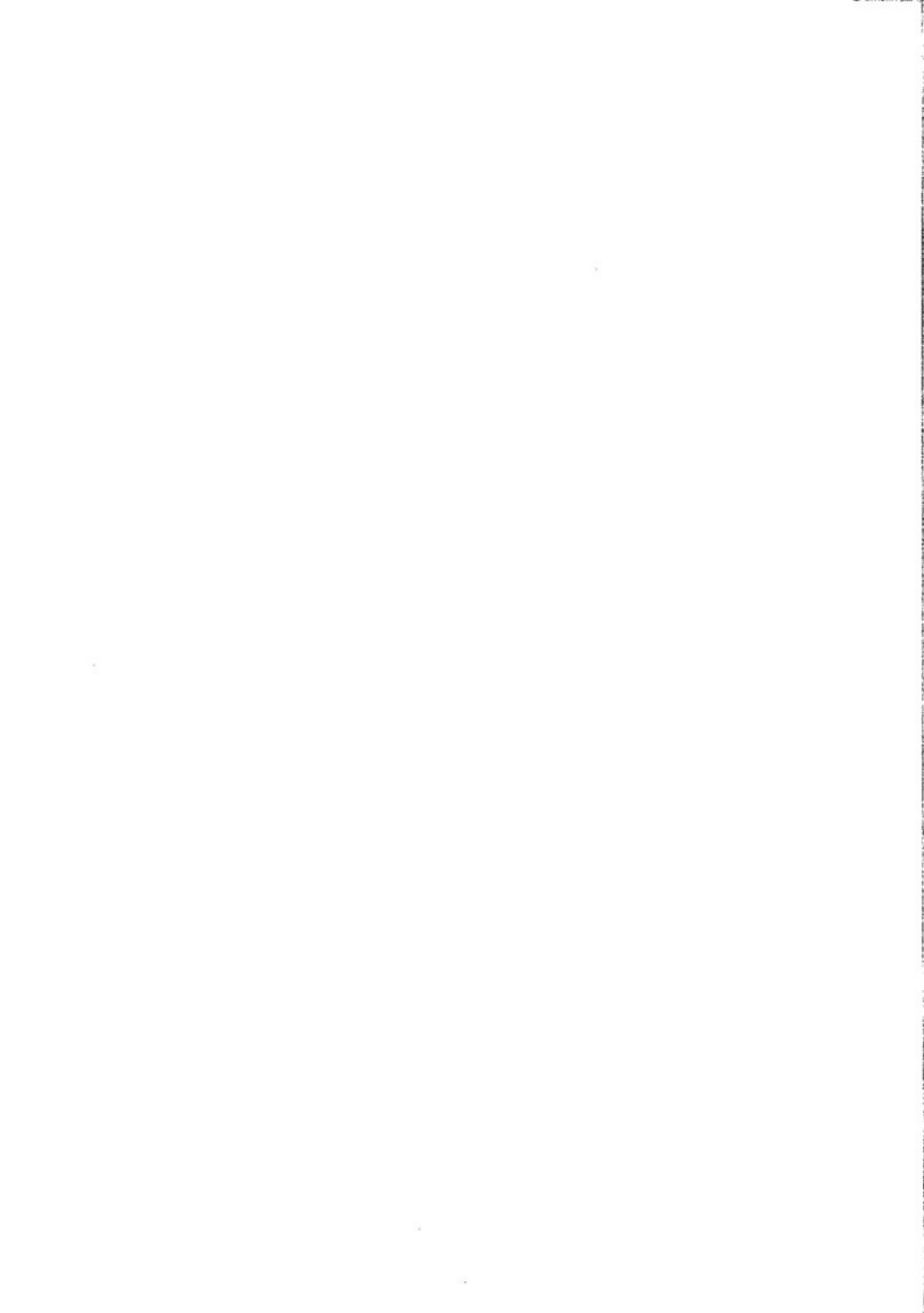


16



17

第404層內出土遺物



XI 宮町遺跡第2次調査 (MM99-2)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市宮町1丁目地内で実施した公共下水道工事（平成10年度八尾排水区第202工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する宮町遺跡第2次（MM99-2）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第304号 平成11年9月7日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年3月24日（実働1日間）に、岡田清一、樋口 薫を調査担当者として実施した。調査面積は約10m²である。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成12年8月31日に完了した。
1. 本書に関わる業務は、図面トレースー市森千恵子、樋口、本書の執筆・写真撮影及び編集ー樋口が担当した。

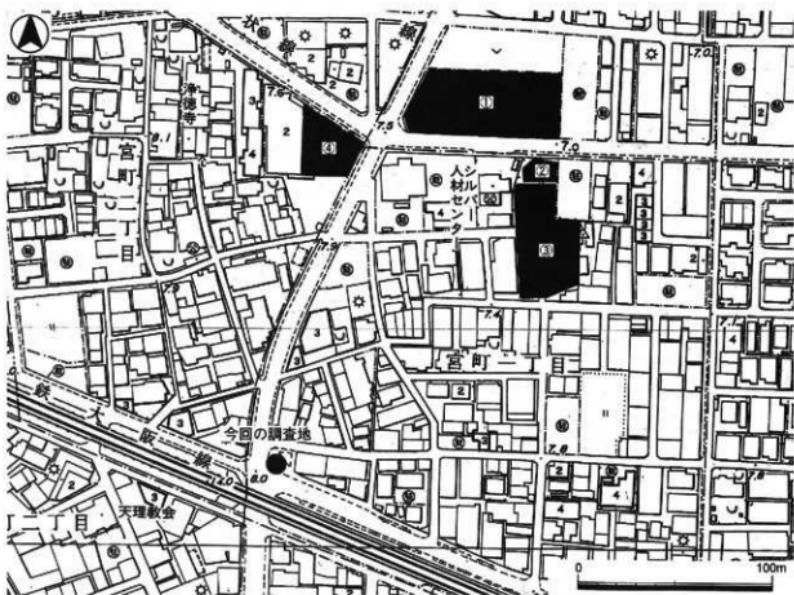
本 文 目 次

1.はじめに	117
2.調査概要	118
1) 調査方法と経過	118
2) 基本層序	118
3) 検出構造と出土遺物	119
3.まとめ	119

XI 宮町遺跡第2次調査 (MM99-2)

1. はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。この河内平野は、旧大和川の分流がもたらす沖積作用によって形成されている。今回報告する宮町遺跡は、この大平野の東部を画する八尾市の北西部に位置する。現在の行政区画では、宮町1～4丁目、本町5・6丁目の東西約0.3km、南北約0.6kmがその範囲と推定されている。地形的には、長瀬川と楠根川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形においては、北西に美園遺跡・佐堂遺跡、東に東郷遺跡、南に八尾寺内町遺跡が隣接している。当遺跡では、これまでに主要地方道八尾枚方線穴太交差点付近を中心に、八尾市教育委員会および当調査研究会による小規模な調査が数次行われているに過ぎない。これらの調査では、平安時代後期～近世の遺構・遺物を検出しているが、中でも穴太神社境内で実施された調査では、土壇や礎石といった遺構や瓦を中心とした遺物が出土していることから、その周辺が『河内鑑名所記』や『和漢三才図会』などの文献に出てくる大日山千眼寺に比定されている（米田・原田・駒沢1982・原田1983）。



第1図 調査地周辺図($S = 1/2500$)

表1 調査地一覧表（地図番号は第1図に対応）

地図番号	調査名	調査地	調査原因	調査面積 (m ²)	調査期間	調査機関
①	MM91-1	宮町3丁目94-1	店舗建設	約 200	平成3年6月6日～17日	八文研
②		宮町1丁目20・21	倉庫建設		昭和57年3月1日～4月10日	市教委・八文研
③		穴太神社境内	神社境内の整備		昭和56年7月10日～昭和57年3月31日	市教委
④		宮町2丁目1	店舗建設	約 80	昭和55年7月7日～29日	市教委
今回の調査地	MM99-2	宮町1丁目地内	公共下水道	約 16	平成12年3月24日	八文研

調査機関 市教委・八尾市教育委員会 八文研・(財)八尾市文化財調査研究会

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は、八尾市宮町1丁目地内の公共下水道工事(10-202工区)に伴うもので、当調査研究会が宮町遺跡内で実施した第2次調査(MM99-2)にあたる。調査地は、約4m四方の正方形を呈し、調査面積は約16m²を測るに過ぎない。

掘削に際しては、市教育委員会の指示書に基づき、現地表(T.P.+7.643m)下1.0m前後までは機械掘削とし、それ以下の0.5mについては機械と人力を併用しながら掘り進めていき、遺構・遺物の検出に努めた。なお、今回の調査は、調査地が主要地方道八尾枚方線穴太南交差点北東角に位置することから、車両の通行に支障をきたすおそれがあるため、夜間に実施することになった。調査期間は、平成12年3月24日(実働1日間)のみである。

2) 基本層序

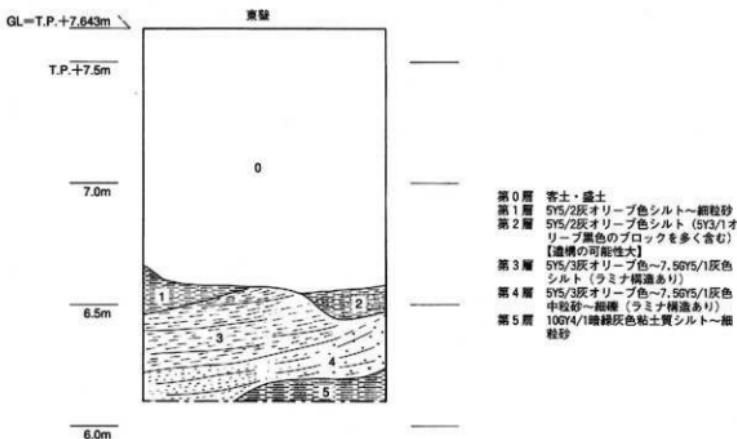
本調査では、T.P.+6.1～7.6m前後の間において6層の地層を確認した。これらの地層は、上方については不明瞭な点が多いが、下方についてはラミナ構造が顕著に残る水流堆積層が続いている。以下、各地層について概説していく。

第0層 客土・盛土。5Y3/1オリーブ黒色中疊混シルト～極細粒砂(2cm大のバラスも一部混入する)。

第1層 5Y5/2灰オリーブ色シルト～細粒砂(管状にマンガンを含む)。比較的よく縮まった地層



第2図 調査地位置図(S=1/400)



第3図 地層断面模式図(S=1/20)

である。粒度組成は上方に向かうにつれて粗粒化の傾向にある。

- 第2層** 5Y5/2灰オリーブ色シルト (5Y3/1オリーブ黒色のブロックを多く含む)。第3層上面に構築された遺構の可能性が高い地層である。残念ながら平面的な調査による確認はできていない。
- 第3層** 5Y5/3灰オリーブ色～7.5GY5/1灰色シルト。水平に発達したラミナ構造をもつ水流堆積層である。非常に穏やかや水流のもとで形成された地層であろう。なお、上方では雲状にマンガンの沈着が認められ、下方についてはグライ化が顕著である。
- 第4層** 5Y5/3灰オリーブ色～7.5GY5/1灰色中粒砂～細礫。粗いラミナ構造をもつ水流堆積層である。粒度組成は北方に向かうにつれて粗粒化の傾向にある。
- 第5層** 10GY4/1暗緑灰色粘土質シルト～細粒砂。ラミナ構造は顕著に観察できないが、第3層・第4層同様、水流堆積により形成された地層である。グライ化が著しい。

3) 検出遺構と出土遺物

残念ながら、遺構・遺物の検出は無かった。ただし地層観察の結果、ブロックを多く含むことから、第2層が第3層上面に検出された遺構であった可能性が高い。

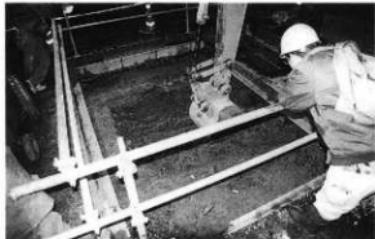
3.まとめ

遺構・遺物の検出が皆無であったため、今回の調査における成果は極めて乏しい。しかし、先述したとおり地層観察の結果、本調査地では少なくともある時期、シルト～砂礫を充填するような流水域に位置していたことが明らかであり、それらが土壤化した段階で、遺構を構築できた環境にあった可能性も指摘できる。なお、本調査地の北北東約500mの地点で実施された第1次調

査地では、T.P. +6.6m前後において14世紀前半～16世紀初頭の遺構群を検出している（坪田1995）。これらの遺構は、水成層が土壤化した段階で構築されているものと思われる。本調査区で観察された第2層も、T.P. +6.5m前後のラミナ構造が顕著な水成層上面で確認されており、もし第2層を遺構と仮定するならば、第1次調査地の遺構の出方と符合する。しかしながらこれだけでもって、地層や遺構面の対応関係を把握するには資料が少なすぎる。今後の調査に期待したい。

引用・参考文献

- ・米田敏幸・原田昌則・猪沢敦 1982.3『宮町遺跡発掘調査概要 I -穴太神社境内廃千眼寺の調査-』八尾市文化財調査報告8 昭和56年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1983.3「第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 昭和50・51年度」八尾市教育委員会
- ・原田昌則 1983「第1章 宮町遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度(財)八尾市文化財調査研究会報告3」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 1995「II 宮町遺跡第1次調査(MM91-1)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告45」(財)八尾市文化財調査研究会



機械堰削状況（南東から）



地層断面観察状況（北東から）



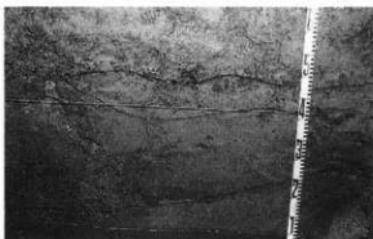
調査地全景（東から）



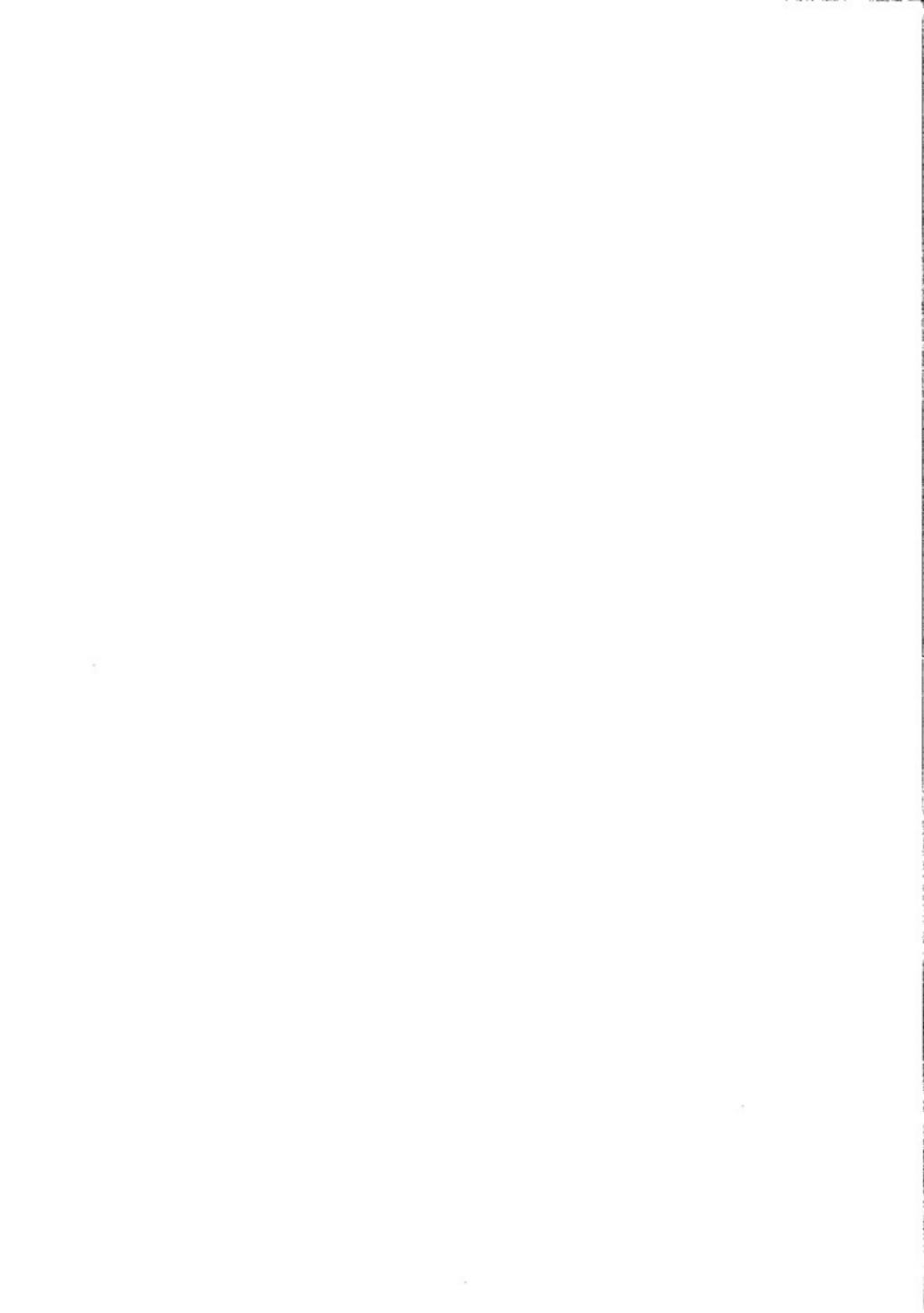
西壁地層〈水系=T.P.+6.5m〉



西壁地層南部〈水系=T.P.+6.5m〉



西壁地層北部〈水系=T.P.+6.5m〉



四

四

新潟県佐渡市山賀遺跡第10次調査報告書（YMG99-10）

新潟県立歴史博物館・新潟県立大学人間文化研究科・新潟県立大学人間文化研究科

XII 山賀遺跡第10次調査（YMG99-10）

新潟立木

新潟県立歴史博物館・新潟県立大学人間文化研究科・新潟県立大学人間文化研究科

例　　言

1. 本書は大阪府八尾市新家町4・7丁目地内で実施した電らん管埋設工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する山賀遺跡第10次調査（YMG99-10）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会作成の指示書（八教社文第147号 平成11年6月8日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が関西電力株式会社大阪南支店から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年8月25日～8月29日（実働4日）にかけて、高萩千秋・成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約20.25m²である。
1. 内業整理は現地調査終了後隨時行い、平成12年9月に終了した。
1. 本書の執筆・編集は、高萩が行った。

本　文　目　次

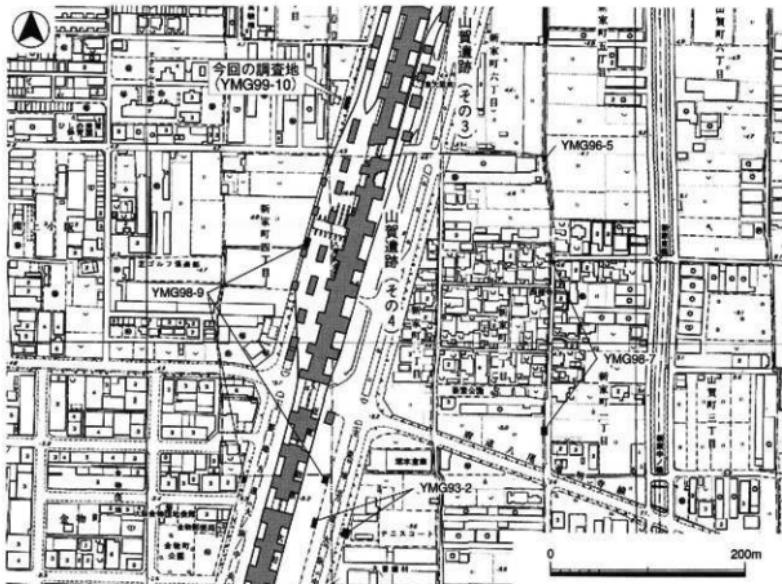
1.はじめに	123
2.調査概要	124
1) 調査の方法と経過	124
2) 基本層序	124
3) 検出遺構と出土遺物	125
3.まとめ	127

XII 山賀遺跡第10次調査 (YMG99-10)

1. はじめに

山賀遺跡は八尾市の北西部に位置し、東大阪市の南東部にまたがる。現在の行政区画では、新家町1～8丁目・山賀町1～6丁目および東大阪市の若江西新町5丁目・若江南町4～5丁目がその範囲と推定されている。地理的には旧大和川の本流であった長瀬川・玉串川に挟まれた沖積地およびその他の小河川の沖積作用により形成された河内平野の中央部で展開する縄文時代晚期～近世に至る複合遺跡である。

当遺跡は、昭和46年に東大阪市域で行なわれた楠根川改修工事に伴う掘削残土の中から弥生時代前期の土器類や石器類が多量に発見されたことから周知となった遺跡である。その後、大阪府教育委員会、(財)大阪文化財センター、東大阪市教育委員会、(財)東大阪市文化財協会、八尾市教育委員会、当調査研究会によって多次にわたる調査が行われてきた。昭和54～60年度の長期にわたる、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道路建設に伴う調査では縄文時代～近世に至る遺構・遺物が検出され、遺跡が広範囲に存在することがわかった。特に、弥生時代前期（中段階）の集落の存在は、河内平野での稻作導入期の動向を知る上で貴重な資料となっている。



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

当遺跡の周辺には東に西郡廃寺遺跡、西に小若江北遺跡（東大阪市）、南に友井東遺跡、南東に萱振遺跡、北に若江北遺跡（東大阪市）、北西に上小阪遺跡（東大阪市）など数多くの遺跡が分布している。

今回の調査地は、当調査研究会で実施している第9次調査（YMG98-9）の第1区の北部に位置しており、その調査では弥生時代後期～近代の地層を確認している。また、近畿自動車道建設に伴う『山賀遺跡（その3）』の調査地の西部にあたる。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は電らん管埋設工事に伴うもので、当調査研究会が実施する山賀遺跡内の第10次調査（YMG99-10）にあたる。調査は電らん管の中継部分が対象で、幅約3.6m×長さ約10.0mの矢板打設で囲った立坑部分である。調査地は中央環状線の西側歩道にあたり、日中は大阪園の動脈として自動車の往来が絶えないところである。このような交通事情から工事作業はすべて夜間となり、発掘調査についても夜間調査となった。調査期間は、平成11年8月25～29日である。現地表（T.P.+4.8m前後）下約0.5mは覆鋼板設置のため掘削されており、それより以下を現地表下約5.8（T.P.-1.0）mまで機械掘削と人力掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。

2) 基本層序

調査区内の中央付近を南北方向に断面を残し、土層の観察および記録を行った。その結果、32層に分層できた。なお、断面観察については夜間という条件下であったため、色調や分層に多少の誤りがあるものと思われる。

- 第0層 盛土・擾乱。層厚0.8～1.5m。中央環状線および埋設工事などにより、調査区東部・南部で深く削平されている。
- 第1層 青灰～黒灰色砂混粘質シルト。層厚0.2m。上面に粗砂含む。旧耕作土と思われる。ほぼ水平に堆積。
- 第2層 灰色微砂～粗砂。層厚0.15m。ほぼ水平に堆積。
- 第3層 青灰色微砂～砂質シルト。層厚0.2～0.3m。ほぼ水平に堆積。
- 第4層 灰色粘土。層厚0.2m前後。下部で平安時代ごろの土師器小皿の小片が1点出土している。ほぼ水平に堆積。
- 第5層 灰褐色砂混（少量）粘土。層厚0.2m。植物遺体を少量含む。調査区の中央付近から

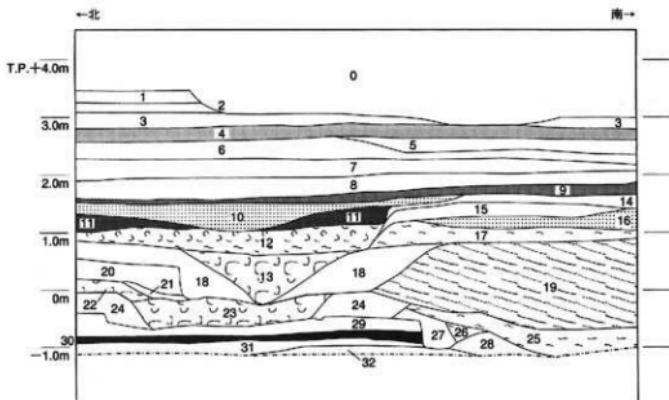


第2図 調査区位置図 (S = 1/750)

- 南側に堆積する層で、第6層を切り込んでいるようである。
- 第6層 明褐色砂混粘土。層厚0.15~0.4m。ごく少量の砂混じりである。ほぼ水平に堆積。
- 第7層 暗褐色~暗灰色粘土。層厚0.2~0.4m。ほぼ水平に堆積。
- 第8層 青灰色粘土。層厚0.2~0.4m。ほぼ水平に堆積。
- 第9層 黒灰色粘土。層厚0.05~0.15m。北方へ緩やかに下がっている。
- 第10層 灰色粗砂。層厚0.1~0.5m。第9層より切り込みがみられ、下部には灰色粘土質シルトが含まれるレンズ状の堆積。
- 第11層 黒灰色粘土Ⅱ。層厚0~0.3m。植物遺体を多量に含む。第10層の南北側で確認している。
- 第12層 灰色粗砂・黒灰色粘土・青灰色シルト・灰色微砂の互層。層厚0.4~0.5m。
- 第13層 灰色粗砂・黒灰色粘土・青灰色シルト・灰色微砂・黒灰色粘土の細かいブロック。層厚0.9m。
- 第14層 青灰色砂混粘土シルト。層厚0.1~0.2m。
- 第15層 灰色粗砂・褐色粘土・青灰色シルトの互層。層厚0.25m。
- 第17層 暗褐色粘土・青灰色・植物遺体の互層。層厚0.2~0.4m。
- 第18層 暗褐色粘土。層厚0.8m。1cm前後の炭酸鉄を含む。弥生土器片1点出土。
- 第19層 白灰色粗砂。層厚1.5m。洪水などにより堆積した砂層で、調査区中央付近から南側へ深くなっている。1mm前後の比較的整った砂粒である。
- 第20層 青灰色微砂混粘土。層厚0.5m。
- 第21層 白灰色粗砂・青灰色粘土質シルトの互層。層厚0.15m。
- 第22層 青灰色粘土シルトに灰色粘土のブロック。層厚0.2m。
- 第23層 青灰色砂質シルトに黒灰色粘土のブロック。層厚0.5m。
- 第24層 青灰色微砂。層厚0.4m。
- 第25層 暗褐色粘土。層厚0.4m。南部に堆積する第19層の下部にあたる。南部では植物遺体の薄層縞状に堆積。
- 第26層 暗褐色粘土。層厚0.2m。植物遺体を多量に含む。
- 第27層 灰色粘土シルト~微砂~粗砂の互層。層厚0.5m。
- 第28層 灰色粗砂。層厚0.5m。
- 第29層 暗灰色粘土。層厚0.2m前後。粘着性のある粘土で、ほぼ水平に堆積する。
- 第30層 黒灰色粘土Ⅲ。層厚0.1~0.2m。29層と同様、粘着性があり、ほぼ水平に堆積する。
- 第31層 灰色粘土。層厚0.1~0.2m。黒灰色粘土を少量含む。ほぼ水平に堆積。
- 第32層 灰色粘土混じり粗砂。層厚0.1m以上。

3) 検出構造と出土遺物

調査の結果、現地表(T.P.+4.8m)下0.8~1.5mは大部分が中央環状線工事により削平を受けており、調査区中央付近のごく一部に旧耕土の残存が確認できた程度である。第1~4・6~8層までの土層はほぼ水平堆積を呈しており、比較的安定した土層であろう。また隣接地の「山賀(その3)」の調査では生産域を検出しており、それに関連する層に相当するであろう。現地表(T.P.+2.6m)下1.8m前後の第4層内(調査区北部)では、平安時代ごろのものと思われる土師器小皿の小片を出土している。



0	盛土・擾乱	17	暗褐色粘土・青灰色・植物遺体の瓦層
1	青灰～黒灰色砂混粘質シルト（上面粗砂）	18	暗褐色粘土（炭酸塩含む）
2	灰色礫砂～粗砂	19	白灰色粗砂
3	青灰色砂～砂質シルト	20	青灰色礫砂混粘土
4	灰色粘土Ⅰ部（土器片1点）	21	白灰色粗砂・青灰色粘土シルトの瓦層
5	灰褐色砂混（少量）粘土（植物遺体少量含む）	22	青灰色粘土シルトに灰色粘土のブロック
6	明褐色砂混（極少量）粘土	23	青灰色砂質シルトに黒灰色粘土のブロック
7	褐色～暗灰色粘土	24	青灰色礫砂
8	青灰色粘土	25	暗褐色粘土（南部では植物遺体の薄層純状に堆積）
9	黒灰色粘土	26	暗褐色粘土（植物遺体多量に含む）
10	灰色粗砂（下部に灰色粘土質シルト）	27	灰褐色粘土シルト～微砂～粗砂の互層
11	黒灰色粘土Ⅱ（植物遺体多量に含む）	28	灰褐色砂
12	灰色粗砂・黒灰色粘土	29	暗灰色粘土
13	青灰色シルト・灰色礫砂の互層	30	黒灰色粘土Ⅲ
14	灰色粗砂・黒灰色粘土・青灰色シルト・	31	灰色粘土に黒灰色粘土少量含む
15	灰色礫砂・黒灰色粘土の細かいブロック	32	灰色粘土・黒灰色粘土・粗砂の互層
16	青灰色砂混粘質シルト		
18	J3		
20	12		
21	11		
22	13		
23	14		
24	15		
25	16		
26	17		
27	18		
28	19		
29	20		
30	21		
31	22		
32	23		
31	24		
32	25		
31	26		
32	27		
31	28		
32	29		
31	30		
32	31		
31	32		

調査区断面図 (S = 1 /80)

第10～28層は、河川および溝の堆積とみられる。第19層は一時的な大きな流れにより堆積した粗砂が南東から北西方向にみられる。この河川の埋没前後に、溝状遺構が2～3回掘り込まれているようである。(第13・18・21～24層) そのうちの第18層内では壺の体部片と思われる弥生時代前期ごろの土器片1点を出土している。第19層の堆積層は「山賀(その3)」の調査で検出している河川5に対応するものと思われる。また、現地表(T.P.-1.2m)前後ではほぼ水平に堆積する黒灰色帶(第30層)を検出した。この黒色帶は(財)大阪文化財センターが行った近畿自動車道路建設に伴う調査でも広範囲にわたっており、観察されている弥生時代前期または縄文時代後期に比定される第1または第3黒色粘土層に相当するものと思われる。層厚も0.1m前後と安定した堆積を呈している。

註1 西口陽一他 1984『山賀(その3)』(財)大阪文化財センター

3.まとめ

今回の調査では弥生時代中期ごろと平安時代ごろに相当する遺物が出土したのみで各層の時期を位置付ける遺構・遺物の検出はなかった。しかし、数回にわたる河川の堆積がみられ、特に弥生時代前期前後の時期に、「山賀(その3)」の調査成果と同様、当調査区周辺では活発な沖積作用があったことが観察できた。また、検出した粗砂層の堆積は「山賀(その3)」で検出している河川5に対応する可能性がある。報告では当調査区東部を北方向へ伸びる想定をしているが、検出レベル・方向および堆積層がほぼ一致していることが平面図・断面図の対比で言えるであろう。さらに、「山賀(その3)」の調査で確認された時代決定の鍵層となる第1黒色粘土層と第3黒色粘土層に対応する層を確認することができた。

参考文献

- ・杉本一郎・森井貞雄・西口陽一・生田維道・田中和宏他 1983・1984・1986『山賀(その1)』～『山賀(その5・6)』(財)大阪文化財センター
- ・亀島重則・坂田育功・生田維道他 1984・1983『友井東(その1)』・『友井東(その2)』(財)大阪文化財センター
- ・成海佳子 1994「IX山賀遺跡第1次調査(YMG93-1)」「X山賀遺跡第2次調査(YMG93-2)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告43」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・森本めぐみ 1998「II X山賀遺跡第5次調査(YMG96-5)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告60」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫 1998「28.山賀遺跡第6次調査(YMG97-6)」「平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」
- ・古川晴久 1998「29.山賀遺跡第7次調査(YMG97-7)」(財)八尾市文化財調査研究会



東壁南側 (T.P. +2.0~3.0m)



東壁 (T.P. -1.0~+1.0m) (北西から)



東壁中央 (T.P. -1.0~+1.0m)



東壁南側 (T.P. -1.0~+1.0m)

XIII 弓削遺跡第2次調査 (Y G E 99-2)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市志紀南2丁目地内で実施した公共下水道工事（10-222工区）に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する弓削遺跡第2次調査（YGE99-2）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第359号 平成11年10月15日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成11年12月10日～12月20日（実働6日間）にかけて森本めぐみを担当者として実施した。調査面積は約20.5m²を測る。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時行い、平成12年8月31日に終了した。
1. 現地調査には岸田靖子・中西明美・宮崎寛子が参加した。なお、内業整理には前記以外に飯塚直世・澤村妙子・田島和恵の参加を得た。
1. 本書の執筆・編集は森本が行った。

本　文　目　次

1.はじめ	129
2.調査概要	129
1) 調査の方法と経過	129
2) 基本層序	132
3) 検出遺物と出土遺物	134
3.まとめ	136

XIII 弓削遺跡第2次調査 (YGE99-2)

1. はじめに

弓削遺跡は八尾市中央部の南端に位置する遺跡で、志紀南の交差点を起点とする大阪外環状線と国道25号線に挟まれた、一辺約0.5~0.7kmの三角形を呈する地域(志紀町南2~4丁目)が遺跡の範囲と推定されている。地形的には古長瀬川と古玉串川が分岐して北流する二俣地区の西側に位置し、古長瀬川が形成した自然堤防上に立地している。当遺跡の周辺には古長瀬川右岸に東弓削遺跡が、左岸に志紀遺跡、田井中遺跡が位置している。また、当遺跡は南側で柏原市と接しており、柏原市域には縄文時代中期から中世に至る複合遺跡である本郷遺跡が広がっている。

以下、当調査地周辺調査の主な成果について概説する。当調査地周辺での最も古い時期を表す遺物は、⑦で砂層内から出土した縄文時代中期末の土器である。また、⑦のすぐ北側に位置する⑮でも縄文時代晩期の遺物が確認されているが、いずれも極少量で、遺構から検出されたものではない。その他、⑥では古墳時代初頭の溝状遺構の底から晩期末の深鉢が伏せた状態で検出されている。次に⑧で弥生時代中期の溝状遺構が確認されているが、性格や規模等も不明である。弓削遺跡・本郷遺跡で最も広く確認されているのは弥生時代後期~古墳時代前期にかけての遺構・遺物である。なかでも、①ではT.P.+11.5mで検出された南北方向に伸びる弥生時代後期の溝からコンテナ約150箱分の土器が密集した形で出土しており、河内地域の畿内第V様式の良好な資料となるものである。また、②・③・④・⑤でも弥生時代後期の遺構・遺物が検出されている。遺跡範囲からはやや西に離れるが、④ではT.P.+11.0m前後で弥生時代後期初頭の井戸と溝が検出されており、周辺に居住域が存在する可能性が高いことを示している。また、⑯では弥生時代後期の方形周溝墓が確認され、古墳時代前期~中期にかけては竪穴住居が検出されるなど、周辺の土地利用を考える上で貴重な資料を提供している。加えて、⑭では弥生時代後期の溝から小銅鐸が出土しており、特異な事例となっている。その他、⑤・⑥・⑧等では埴輪類が検出されており、周間に古墳の存在を窺わせている。

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事(10-222工区)に先立って実施したもので当調査研究会が弓削遺跡内で行った第2次調査にあたる。調査の対象となったのは発進立坑1箇所のみで、規模は南北幅3.2m、東西幅6.4m、面積20.5m²を測る。調査の方法として、八尾市教育委員会の指示書に



写真1 調査区近景(東から)

基づき、現地表（T.P. +14.12m）下1.3m前後を機械で掘削した後、以下を機械掘削と人力掘削を併用して遺構・遺物の検出に努めた。本来ならば、工事掘削範囲である現地表下9.05m（T.P. +5.15m）まで調査を行うべきであったが、調査日程および掘削方法の制約上、現地表下約8.7m（T.P. +5.4m）を掘削した段階で以下の調査を断念した。



第1図 調査地周辺図 (S = 1/5000)

表1 周辺の調査地一覧表

遺跡名	所在地	調査主体	主な成果	関連文献
① 丹別 YG84-1 TII	志紀南町2八尾市	八尾市 考古研究会	弥生時代後期の井戸・土坑・溝・小穴 古墳時代後期の遺 奈良時代の井戸・溝・土坑	『昭和59年度事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告7 1985
② 丹別 (90-533) 丁目	志紀南町4八尾市教委	八尾市 考古研究会	弥生時代後期末～古墳時代前期の包含層 中・近世の動溝	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告1』 八尾市文化財調査報告25 1992
③ 丹別 (94-631) 丁目	志紀南町4八尾市教委	八尾市 考古研究会	弥生時代後期の包含層	『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告1』 八尾市文化財調査報告33 1996
④ 丹別 (97-444) 丁目	志紀南町2-3八尾市教委	八尾市 考古研究会	弥生時代後期初頭の井戸と溝	『丹別遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要10 2000
⑤ 丹別 (98-380) 丁目	志紀南町3八尾市教委	八尾市 考古研究会	河川内推進(弥生上層・須恵器・埴輪など出土)	『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告40 1994
⑥ 本郷 81-1次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	縄文時代後期の深鉢 古墳時代初頭の井戸・溝状遺構 『門崎塚』・形象埴輪出土	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概要』1981年度 1982
⑦ 本郷 83-1次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	縄文時代中期末の土器 弥生時代中期～後期・古墳時代前期の包含層 古墳時代中期～中世の遺物包含層	『柏原市所在遺跡発掘調査概報』大東・田辺・本郷遺跡－1983年』柏原市文化財報告1983-IV 1984
⑧ 本郷 83-2次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	弥生時代中期の溝状遺構 弥生時代中期～古墳時代中期の包含層 円筒埴輪出土	『柏原市所在遺跡発掘調査概報』大東・田辺・本郷遺跡－1983年』柏原市文化財報告1983-IV 1984
⑨ 本郷 84-2次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	弥生時代後期の遺物 古墳時代後期の溝(破碎された須恵器の縁と駆骨出土)	『本郷遺跡』ト・手山遺跡－マンション建設に伴う－柏原市文化財調査1984-VI
⑩ 本郷 85-1次	本郷5丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	古墳時代後期の須恵器・製壺土器・土師留出土	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1985年度 1986
⑪ 本郷 88-1次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	現地表下2mで遺物包含層を検出	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1985年度 『柏原市文化財調査1988-I』 1989
⑫ 本郷 89-2次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	現地表下5mで田中大川の洪水痕を検出	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1989年度 『柏原市文化財調査1989-I』 1990
⑬ 本郷 91-1次	本郷5丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	弥生時代中期の土坑 弥生時代後期の方形周溝・溝(小銅鐸出土) 古墳時代前期～中世の堅火住居・溝	『本郷遺跡』1991-1992年度 『柏原市文化財調査1992-II』 1993
⑭ 本郷 91-2次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	奈良時代の溝	『柏原市遺跡群発掘調査概報』1991年度 『柏原市文化財調査1991-IV』 1992
⑮ 本郷 93-3次	本郷5丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	古墳時代～奈良時代の遺物・中世以降の遺物出土	『柏原市所在遺跡発掘調査概報』1996年度 『柏原市文化財調査1996-II』 1997
⑯ 本郷 94-1次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	現地表下0.9mで中・近世の遺物包含層を検出	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1994年度 『柏原市文化財調査1994-I』 1995
⑰ 不郷 94-2次	本郷3丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	中世の遺物包含層 近世の耕作溝	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1994年度 『柏原市文化財調査1994-II』 1995
⑱ 木郷 98-1次	本郷5丁目柏原市教委	柏原市 考古研究会	縄文時代後期の遺物出土 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物	『木郷遺跡－公共下水管設置に伴う－柏原市文化財調査1998-IV』 1999
⑲ 丹別・志紀 遺跡	志紀南町1大阪府教委	大阪府 考古研究会	古墳時代前の包含層(S字口縁甕出土)	『寝屋川南都流域下水道事業に伴う中里内・志紀・丹別・太平寺遺跡発掘調査概要』1995



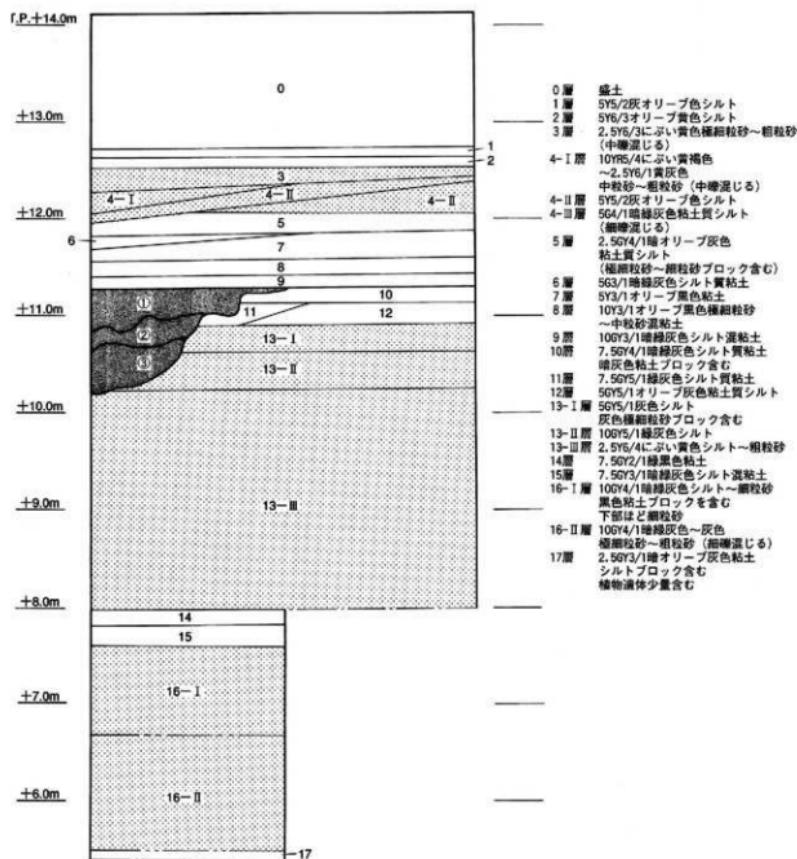
2) 基本層序

基本層序は第3図の通りである。現地表下約8.6m(T.P.+5.4m)まで調査を行った。確認できた地層は全部で17層である。地層の観察は南壁を中心に行なった。掘削状況から正確に標高を測ることができなかった16層以下は二点破線で表現した。

- 0層：盛土。
- 1層：5Y5/2灰オリーブ色シルト。マンガン斑多い。
- 2層：5Y6/2オリーブ黄色シルト。マンガン斑多い。
- 3層：2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂～粗粒砂。中疊を少量含む。鉄分・マンガン斑多い。
- 4-I層：10YR5/4にぶい黄褐色～2.5Y6/1黃灰色中粒砂～粗粒砂。上部に水平ラミナがみられる。
- 4-II層：5Y5/2灰オリーブ色シルト。
- 4-III層：5G4/1暗緑灰色粘土質シルト。細疊を少量含む。
- 5層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト。極細粒砂～細粒砂のブロック含む。
- 6層：5G3/1暗緑灰色シルト質粘土。
- 7層：5Y3/1オリーブ黒色粘土。粗粒砂～細疊を多く含む。
- 8層：10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂～中粒砂混粘土。
- 9層：10GY3/1暗緑灰色シルト混粘土。
- 10層：7.5GY4/1暗緑灰色シルト質粘土。暗灰色の粘土ブロックを含む。
- 11層：7.5GY5/1緑灰色シルト質粘土。
- 12層：5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト。
- 13-I層：5GY5/1オリーブ灰色シルト。灰色の極細粒砂ブロックを含む。
- 13-II層：10GY5/1緑灰色シルト。
- 13-III層：2.5Y6/4にぶい黄色シルト～粗粒砂。西ほど粗く極粗粒砂～中疊が主となる。
- 14層：7.5GY2/1緑黒色粘土。
- 15層：7.5GY3/1暗緑灰色シルト混粘土。
- 16-I層：10GY4/1暗緑灰色シルト～細粒砂。黒色粘土ブロックを含む。
- 16-II層：10GY4/1暗緑灰色～灰色極細粒砂～粗粒砂。細疊も混じる。
- 17層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。シルトブロックを含む。植物遺体極少量含む。

今回の調査では大きく分けて3時期(3・4層・13層・16層)の流水堆積層を確認した。3層については4層と一連の堆積である可能性もあるが、3層の下層はマンガンや鉄分で堅く締まった状態であったため、分けて報告する。最も新しい時期の砂層である3・4層は粗粒砂を中心とした堆積であるが、ややしまった堆積状況であった。対して13層と16層は締まりの悪いシルト～疊層であった。13・16層とも湧水が激しく、層厚もそれぞれ2mを超えたため、断面を残しての観察はできなかった。各層ともシルト～細疊の互層を成していたが、特に13-III層は5cmを超える疊をやや多く含んでおり、流水の激しさを物語っている。以下では、わずかにT.P.+8.0～7.6mで粘土層(14・15層)を確認したが、土壤化などの痕跡は確認できなかった。そして今回の調査範囲であるT.P.+5.5m前後まで流水堆積が続き、最終的に確認した17層も植物遺体を含む粘性の強い粘土で湿地の堆積状況を示していた。

今回、遺構・遺物を検出した層は以下の通りである。現地表下2.6～2.5m(T.P.+11.5m前後)



第3図 地層断面模式図〈南壁〉(S=1/50)

の9層では弥生時代後期～古墳時代後期にかけての遺物を確認した。そして10層上面（T.P. + 11.3m前後）では弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構面を確認した。11・12層は弥生時代中期～後期の遺物を含む層であった。

3) 検出遺構と出土遺物の概要

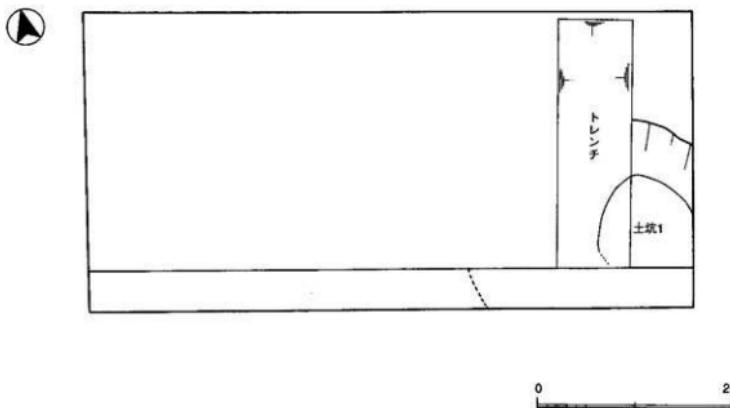
今回の調査では、10層上面（T.P. + 11.3m前後）で土坑1基（土坑1）を検出した。しかし、土坑が存在した位置に下層確認のトレンチを南北方向に設置してしまったため、平面的にはごく一部しか確認できなかった。

土坑1

南壁と平面的に検出した形状から土坑としたが、正確な性格は不明である。前述した通り、南北トレンチで西側を掘削してしまったため、部分的な検出となった。南壁で確認した最大幅は2.28m、深さ1.06mを測る。埋土は3層から成り、①：10GY2/1緑灰色シルト混粘土、②：N 3/暗灰色粘土（シルトブロック含む）、③：10BG3/1暗青灰色シルト質粘土（オリーブ灰色粘土質シルトが混じる）である。①層は東側ではシルト優勢となる。この土坑の最下部は13-III層上面まで達している。

〈出土遺物〉

土器は①・②層から出土した。図化できたのは2点（1・2）である。1は壺の口縁部である。頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部は面をもつ。外面調整はタタキ、内面はハケが施されている。頸部外面には工具痕がみられる。2は高杯の口縁部である。口縁部は小さく外反する。内外面とも磨耗しているため、調整は不明瞭である。これらの他、タタキ後にハケ調整を施す壺の体部の破片が出土しており、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭に比定できる。



第4図 検出遺構平面図(S=1/50)

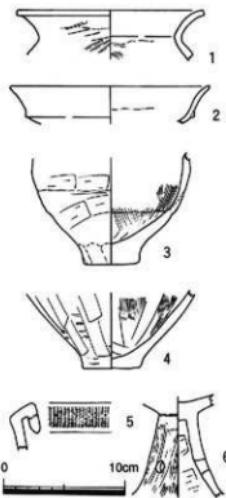
<11・12層内検出遺物>

調査区中央付近でややまとまって出土した。遺構であった可能性も否定できないが、包含層内出土遺物として報告する。

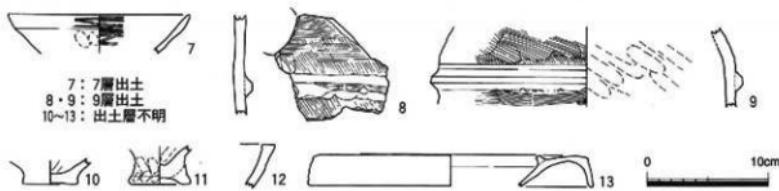
図化できた遺物は4点(3~6)である。3は壺である。比較的丸い体部をもち、外面調整は粗い板ナデ、内面はハケを施している。4は壺である。底部から体部にかけてやや直線的に立ちあがっている。また、外面の調整はタタキ後、ハケ調整で、内面もハケ後、板ナデを行なっている。5は口縁端部が垂下する鉢である。口縁部には簾状文の後に刺突文を施す。残存率が低かったため、口径を出すことができなかった。6は高杯の脚部である。外面はハケ後、粗いヘラミガキを行なっており、脚部と杯部の境をミガキが1条めぐっている。スカシ孔は3方向に穿たれている。それぞれ弥生時代中期末~後期前半に比定できる。

<その他の地層内出土遺物>

その他、4-I・7・9・13-I層から遺物が出土している。4-I層からは土師器の破片が、7層からは土師器と瓦器が出でている。また、9層からは古墳時代前期~後期までの土器の他、埴輪の破片も出土しており、13-I層からは弥生時代の土器と思われる破片が出土している。しかしながら、図化できたのは7点(7~13)のみである。7は7層出土の瓦器楕である。内面はやや粗いヘラミガキを施しているが、外面には指押さえと若干のヘラミガキが残るのみである。12世紀中頃のものと思われる。また、8・9は9層から出土した埴輪の破片である。共に小破片のため、全容は明らかではないが、8は円形のスカシ孔の一部が残存している。9はタガより上部が若干内傾している。朝顔形埴輪になる可能性がある。時期は川西編年のIV期に相当すると思われる。10~13は機械掘削中の出土であり、正確な出土層位は不明であるが、およそT.P.+11.0m前後から出土している。10は壺か壺の底部である。調整はナデで内面に工具痕が残る。11は鉢の底部である。指押さえがしっかりと残る。12は口縁端部に面をもつ高杯の口縁部と思われる。残存率が低かったため、口径を出すことができなかった。13は水平口縁を持つ高杯であるが残存率が低いため、径には若干の不安が残る。しかしながら、時期は弥生時代中期後葉に比定できよう。



第5図 土坑1出土(1・2)
11・12層出土(3~6)遺物実測図



第6図 地層内出土遺物 7層出土(7)・9層出土(8・9)・出土層位不明(10~13)(S=1/4)

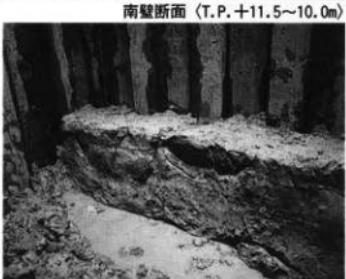
3. まとめ

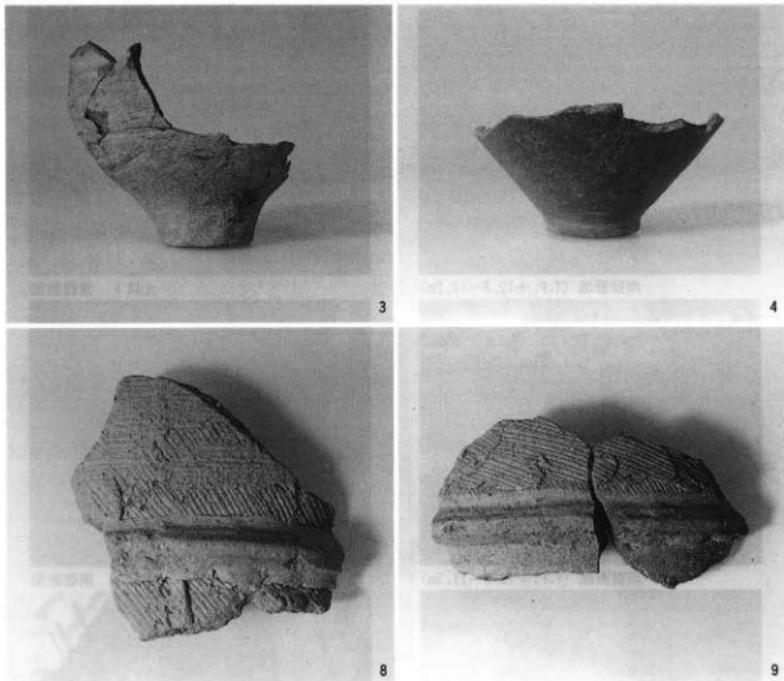
今回の調査ではT.P.+11.3m前後で弥生時代後期～古墳時代初頭に比定できる遺構面を検出した。弓削遺跡内の調査では弥生時代後期の遺構面もしくは包含層が確認されており、今回も同様の結果を得ることができた。加えて、弥生時代中期～後期までの遺物を含む層（11・12層）を確認することができた。そして、出土層位が不明ながら弥生時代中期後葉に比定できる高杯も出土しており、周囲に遺構が存在する可能性を示している。また、9層からはあまり磨耗していない埴輪が出土した。周辺調査では当調査地の南西約200mに位置する⑤でもほとんど磨耗していない円筒埴輪や形象埴輪が検出されており、⑥でも円筒埴輪や形象埴輪が検出されている。当調査区でも、周辺に古墳の存在をうかがわせる結果となった。

今回の調査は掘削深度が現地表下約8.7m（T.P.+5.4m）と弓削遺跡内で最も深い部分まで地層を観察することができた。13層以下は湧水が激しく、断面観察も充分にはできなかつたが、13層、16層の砂層は9層や土坑1の出土遺物から弥生時代中期以前の河川堆積層であることが確認できた。また、間に挟まれた14・15層は一時期、沼沢地のような比較的の流れの緩やかだった時期があったことを示し、一連の河川堆積層を大きく二時期に分けるものであると推察できる。

参考文献

- ・西村公助 1985「8 弓削遺跡(第1次調査)」「昭和59年度事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告7
- ・酒 斎 1992「5. 弓削遺跡(90-553)の調査」「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書」八尾市文化財調査報告25 八尾市教育委員会
- ・酒 斎 1996「17. 弓削遺跡(94-631)の調査」「八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書I」八尾市文化財調査報告33 八尾市教育委員会
- ・藤井淳弘 1999「13. 弓削遺跡(98-380)の調査」「八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書I」八尾市文化財調査報告40 八尾市教育委員会
- ・酒 斎 1999「5. 弓削遺跡(97-444)」「八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書II」八尾市文化財調査報告41 八尾市教育委員会
- ・田中和弘 1982「第5章 本郷遺跡」「柏原市埋蔵文化財発掘調査概要 1981年度」 柏原市教育委員会
- ・北野 重 1993「本郷遺跡 1991・1992年度」柏原市教育委員会
- ・北野 重・阪口文子 1999「本郷遺跡—公共下水管埋設に伴う—」柏原市教育委員会
- ・川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」「考古学雑誌64-2」日本考古学会
- ・寺沢 薫・森岡秀人編 1989「弥生土器の様式と編年 近畿編I」(株)木耳社
- ・尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995「6. 瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- ・若林邦彦編 1999「河内遺跡群の動態Ⅶ」—南遺跡群弥生時代後期～古墳時代前期— 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター





11・12層出土遺物（3・4）、9層内出土遺物（8・9）

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうく67
書名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告67
調査名	I 跡跡遺跡(第31次調査) II 植松南遺跡(第2次調査) III 太田遺跡(第4次調査) IV 大竹西遺跡(第4次調査) V 亀井遺跡(第9次調査) VI 亀井遺跡(第10次調査) VII 萱振遺跡(第22次調査) VIII 心合寺山古墳(第4次調査) IX 太子堂遺跡(第10次調査) X 東郷遺跡(第55次調査) XI 宮町遺跡(第2次調査) XII 山賀遺跡(第10次調査) XIII 弓削遺跡(第2次調査)
卷次	
シリーズ名	財團法人 八尾市文化財調査研究会報告67
シリーズ番号	67
編集者名	I・IX・XIII森本めぐみ、II・V・VI・XII成海佳子、III・VI・XII高萩千秋、IV・X・XI樋口 薫
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 0729-94-4700
発行年月日	西暦2001年3月31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
植松南遺跡 (第31次調査)	大阪府八尾市春日町2丁目・東太子1丁目地内	27212	—	34度36分 47秒	135度35分 44秒	19991129～ 20000303	117	公共下水道
植松南遺跡 (第2次調査)	大阪府八尾市南植松町2-3丁目地内	27212	—	34度36分 23秒	135度35分 50秒	19990407～ 19990528	28	公共下水道
太田遺跡 (第4次調査)	大阪府八尾市太田3丁目地内	27212	—	34度35分 20秒	135度35分 24秒	19990614～ 19990618	43	公共下水道
大竹西遺跡 (第4次調査)	大阪府八尾市上尾町9丁目・西高安4丁目地内	27212	—	34度38分 21秒	135度38分 04秒	19991104～ 19991221	91.52	公共下水道
亀井遺跡 (第9次調査)	大阪府八尾市亀井町4丁目地内	27212	—	34度36分 57秒	135度34分 44秒	19991206～ 19991220	33.52	公共下水道
亀井遺跡 (第10次調査)	大阪府八尾市亀井町1・2丁目地内	27212	—	34度36分 52秒	135度34分 54秒	20000306～ 20000331	40	公共下水道
萱振遺跡 (第22次調査)	大阪府八尾市萱振町5丁目地内	27212	—	34度38分 22秒	135度36分 32秒	19990614～ 19990616	28	公共下水道
心合寺山古墳 (第4次調査)	大阪府八尾市大竹5丁目地内	27212	—	34度38分 11秒	135度38分 35秒	19991116～ 19991201	112	堤体改修
太子堂遺跡 (第10次調査)	大阪府八尾市南太子堂4・5丁目地内	27212	—	34度36分 28秒	135度35分 14秒	19991014～ 19990118	132	公共下水道
東郷遺跡 (第55次調査)	大阪府八尾市莊内町2丁目地内	27212	—	34度37分 26秒	135度36分 44秒	20000203～ 20000223	16	公共下水道
宮町遺跡 (第2次調査)	大阪府八尾市宮町1丁目地内	27212	—	34度37分 46秒	135度35分 54秒	20000324	10	公共下水道
山賀遺跡 (第10次調査)	大阪府八尾市新家町4・7丁目地内	27212	—	34度38分 41秒	135度35分 55秒	19990825～ 19990829	20.25	電らん管埋設
弓削遺跡 (第2次調査)	大阪府八尾市志紀町南2丁目地内	27212	—	34度35分 33秒	135度37分 04秒	19991210～ 19991220	20.5	公共下水道

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
跡部遺跡 (第31次調査)	集落	弥生時代前期	地層	弥生土器	
		古墳時代初頭～平安時代	水成層(河川)	古式土師器	
		古墳時代後期	土坑1、溝1、土器窯1	土師器・須恵器	
		奈良時代～平安時代	井戸1、溝1	土師器・須恵器・瓦器・上錐・木製品	
植松南遺跡 (第2次調査)	集落	奈良時代以降	水成層(河川)	土師器	
太田遺跡 (第4次調査)	集落	旧石器時代	地層		縄文時代後期に比定される海成層を確認。層内には巻き貝・二枚貝が多数含まれており、この地域が当時期に内湾最奥部に位置していたことが判明。
		縄文時代前期(?)	土坑3		
		弥生時代以降	河川		
		平安時代以降	溝1		
人竹西遺跡 (第4次調査)	集落	縄文時代後期	海成層(河内湾?)	貝化石	
		縄文時代晚期	水成層(河内湾?)		
		弥生時代前期～中期	水成層(河川)		
		弥生時代後期	地層	弥生土器(畿内第V様式)	
亀井遺跡 (第9次調査)	集落	弥生時代中期以前	水成層(河川)		
		弥生時代中期～後期	水成層	弥生土器(畿内第IV～V様式)	
		古墳時代前期	水成層(河川)	古式土師器	
		古墳時代中期以降	水成層	須恵器	
亀井遺跡 (第10次調査)	集落	近世	井戸1、溝1	陶磁器片	
		室町時代以前	河川	瓦質土器	
萱原遺跡 (第22次調査)	集落	平安時代以降	水成層(河川)	瓦器・瓦	
心合寺山古墳 (第4次調査)	古墳	平安時代以降	池	埴輪片・瓦	
太子堂遺跡 (第10次調査)	集落	古墳時代初頭	水成層(河川)	古式土器	
		平安時代前期	地層	土師器	
		平安時代後期	土坑2、溝2、土器窯2	土師器・須恵器・瓦器	
		近世～現代	井戸1		
東郷遺跡 (第55次調査)	集落	古墳時代初頭～前期	地層(遺構?)	古式土師器	
		奈良時代～平安時代	地層(耕作土?)	土師器・須恵器	
宮町遺跡 (第2次調査)	集落	時期不明	水成層(河川)		
山賀遺跡 (第10次調査)	集落	弥生時代前期	水成層	弥生土器	(財)大阪文化財センター実施の近畿自動車道建設に伴う発掘調査で確認された縄文時代後期または弥生時代前期に比定される黒色粘土層を確認。
		平安時代	地層	土師器	
弓削遺跡 (第2次調査)	集落	弥生時代中期	水成層(河川)	弥生土器	
		弥生時代末期～古墳時代初頭	土坑1	古式土師器	
		古墳時代中期	地層	埴輪片	
		平安時代後期	地層	瓦器	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告67

- | | |
|------------------|-------------------|
| I 跡部遺跡（第31次調査） | VII 心合寺山古墳（第4次調査） |
| II 植松南遺跡（第2次調査） | IX 太子堂遺跡（第10次調査） |
| III 太田遺跡（第4次調査） | X 東郷遺跡（第55次調査） |
| IV 大竹西遺跡（第4次調査） | XI 宮町遺跡（第2次調査） |
| V 亀井遺跡（第9次調査） | XII 山賀遺跡（第10次調査） |
| VI 亀井遺跡（第10次調査） | XIII 弓削遺跡（第2次調査） |
| VII 萱振遺跡（第22次調査） | |

発行 平成13年3月
編集 財団法人八尾市文化財調査研究会

〒581-0821

大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2

TEL・FAX(0729) 94-4700

印刷 (株)近畿印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>

